
呪い天使

0 ~ マル ~

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪い天使

【Nコード】

N2874C

【作者名】

0　ゝマルゝ

【あらすじ】

普段から大人しい主人公の伊藤（僕）とクラス内で人気を博している鈴科が生徒会長に立候補した。当然のように鈴科が当選するかわれられたが、1次審査では伊藤が優勢となった。それに自尊心を傷つけられた鈴科がとった行動はイジメだった。鈴科のイジメはエスカレートしていき、伊藤とその友達が取ったある行動により物語は大きく傾いてく・・・！？——人の心が揺らぐ、ハラハラドキドキな展開のお話です。【作者より・・・あまりにも駄文なので、時間があれば文章を書きなおしたいと考えていますがどうでしょう

か。
」

呪い天使 01 『最初』（前書き）

はじめまして。連載ものです。是非読んでくださいね。

呪い天使 01 『最初』

呪い天使 1 『最初』

僕の名前は伊藤雄^{いとうゆう}。高校2年生。性別男。

親は小学4年生の時に離婚した。

泣き叫ぶ僕に何も言わず、父は顔色ひとつ変えずに出て行った。それからというものの母は女でひとつ僕を支えてきた。

もちろん安定した就職も無い。

世間一般でいう『貧乏』というものだ。

今の僕に出来ることはいい大学に入り、いい仕事に就く。

そして母を幸せにすることだ。

勉強した成果もあつてクラスの5位以内をキープしている。

少し臆病な性格のせいかな、友達と呼べる友人はほとんどいない。

でも今までは普通に生活してたんだ……。普通に……。

ある日のことだ。

新生徒会を作る日がやって来た。

僕の幼いころからの夢……。生徒会長になること。

僕の人生を左右する大勝負だった。

立候補初日に立候補届を出していた。

僕の立候補はみんな普通に見えていて、何も言おうとしない。

そして、これとして話題にすることもなければ嫌がることも無い。

僕は自分が生徒会になると信じ、家に帰って母に報告したんだ。

「ただいま」

「おかえり。どうだった？立候補……。」

「うん！たぶん僕がなれるよ・・・！」

「そうなの！頑張ってるね。」

「ごはんは何？」

「そこにお米と煮干があるからそれを食べてね・・・。」

僕はじつと母を見つめて、ごはんを炊いた。

「おい！伊藤〜！」

学校。早朝から水沢令治が僕に話しかけてきた。

水沢は僕にとって唯一の男の親友だった。

彼も僕と同じ、はしくれもの。

はしくれもので何が悪い、といつも二人で語り合っている。

いつも大人し目の彼の声は今日に限って大きく教室に響いた。

しかし、騒いでいるのは水沢だけでない。

ある話題がクラス中を騒がせたのだ。

鈴科影斗。僕と同じくらいの成績で人望も厚い奴だった。

そんな彼が・・・

「えっ！？お前立候補するのかよ！？」

「生徒会長にかっ・・・！？」

「ああ・・・。俺が学校を変えてやるんだよ。」

「お前ならできそうだな・・・。」

「ああ、投票よろしくな！」

「伊藤〜！大変だっ！！あの鈴科が立候補するって・・・！！！！」

「・・・まじかよ・・・。」

水沢とはこれ以上話さず、僕は席に座った。

僕は袈裟にノートを広げ、終わってる宿題をやりなおしていた。

「ねえねえ、何、朝っぱらから宿題なんてしてるのよ?」

都宮時雨

彼女は僕の唯一の女の親友。

もちろん恋人、とかそういう関係ではない。

都宮は僕の考えに賛同してくれている。

賛同しながらもクラスでの盛り上がりについていけている。

全員平等を目指す彼女はある意味僕の憧れでもあった。

とりあえず、都宮とは今仲が良い。

「まあ、宿題はねえ・・・早めにやらないと・・・さ。」

「・・・鈴科のこと、動揺してるでしょ?」

「・・・動揺しない方がおかしくない・・・?」

「大丈夫だよ!伊藤なら大丈夫!だって先生からの支持もいいじゃない!」

「それを信じるよ。とりあえず先生に投票してもらえばいいんだよねっ!」

この学校の生徒会の決めかたは二次審査制である。

1次審査は先生が行い、2次審査は生徒全員だ。

一次で勝った人は大きなポイントを与えることになりほとんどが勝つ。

先生への見た目はここで重要視されるわけだ。

しかしクラス中では鈴科が勝つだろうと言われていた。

そういう騒ぎが起きて、ふざけた奴が場を盛り上げている。

「おっ!?!おっ!?!おっ!?!おー!鈴科ー!」

周りはそのノリについてきていた。

笑って適当に手拍子するものもいたが、間違いなくクラスは鈴科を支持している。

そのノリに耐えられなくなったのだろうか？

僕はとっさにトイレに駆け込んだ。

ここで生徒会長にならなければいけないんだ・・・

便座の上に座る僕はそつと手と手をつなぎ合わせた。

呪い天使 02 『生徒』 (前書き)

これから、この物語の趣旨が見えます

呪い天使 02 『生徒』

呪い天使 2 『生徒』

1次審査当日のこと。

「えっと・・・！僕は伊藤雄です・・・！是非清き一票を・・・！」

「みなさんこんにちわ。僕は鈴科影斗といいます。よろしくお願いします。」

形だけの演説だった。

今行っている集会は立候補する人が名前をあげるためだけの会。とりあえずマニフェストなど語ったところで意味はない。

結局一次審査で投票するのは先生だけ。

いくら良い演説をしても、偏見の目は変わらない。

今までの自分の成果が見られる所だ。

一応成績では鈴科には勝っているんだけど・・・。

何も部活に入っていない僕と陸上部のエースの鈴科。

鈴科がその点では優れているから結果は見えない。

「伊藤く！演説お疲れ！演説良かったよ！」

都宮が優しく声をかける。

水沢も同行してきた。

「結局今までの実績の勝負だから演説は関係ないけどね。」

「まあまあ、そんなこと言わないでさ！」

数日後だった。

一次審査の結果は発表されたある日。

学校の門にどうとうと勝った人の名前が書かれる。

粹な先生みたいで毎年恒例である。

そして僕は朝から驚くことになる。

なんせその門に書かれている名前は『伊藤雄』であつたからだ。

今日、久しぶりにクラスメイトがここぞとばかりに話し掛けてくる。

「お前すごいじゃん！」

「鈴科に勝つたじゃん！」

「お前が生徒会長決定じゃねーかよっ！」

「ははっ！根暗な学校になりそうだぜ！」

「それはいいすぎだろ！まっ、雄ならいい学校にしてくれるさ。ははっ」

「じゃっ、頑張れよー」

まだ完全に決まってもいないのにこの盛り上がり。

また始まった、あの例のエール。

笑うもの、ノリについていくもの、手拍子だけするもの。

いろんな人が僕を見つめた。

目線のおきどころに困る僕は床しか見ることができない。

下を向きながらうなずくだけの僕の視界に教室を出る鈴科の顔が映った。

放課後

今日は都宮も水沢も先に帰ってしまった。

ひとりで帰るのは慣れているけれど今日はなんとなくだれかと帰っていたかった。

そう考えると、本当に誰かと帰っていればよかったのかもしれない。

今日はすごい日だと感じた。

また驚かせることがあったのだ。

普通の人は普段持ち歩いていないようなナイフが、

自分の靴に刺さり、靴は履けなくらいズタズタになっていたからだ。

呪い天使 02 『生徒』 (後書き)

なお、この物語はフィクションです

呪い天使 03 『刃物』（前書き）

伊藤に襲う被害・・・それは・・・

呪い天使 03 『刃物』

呪い天使 3 『刃物』

生徒会長の一次審査に受かり、喜んでいた矢先に僕の靴が刃物で傷付けられていた。

しかも本格的なナイフで、普通の人は持っていないだろうと思わるものだ。

ヤクザが僕を狙ってる・・・？

今まで関わることもなかった人が・・・？

大体なんで僕にこんなことを・・・？僕何かした・・・？
様々な可能性を僕を襲った。

「さようならー」

慌てて横を振り向くと、担任の茂木先生が僕に声をかけていた。
さようなら、ただ一言いえばいいのに声が出なかった。

先生が疑った目で僕を見る。

僕は必死に声を出そうとする。

「さっ、さようならっつ・・・」

震えながらそう伝える。

先生もニコツと笑ってその場を通り過ぎた。
しばらくして僕はナイフを取り外し、靴を手を持ちそのまま下校した。

帰り道、色々な事が僕の頭をよぎる。

そもそも僕には何の落ち度もない。

しいて言うならちよつと内気なだけだ。

僕はとりあえず靴を買いに行くことにした。

悩みに悩んだことも、この先すぐに分かることになる。

そこからだ。僕の生活が変わってしまうのは・・・。

とりあえず僕はこの靴のことは誰にも悟られなかった。

ボロボロになった靴はゴミ袋の中にしまいこんだ。

なけなしのお金で全く同じ種類の靴を購入した。

これで完璧。

生徒会長になろう人間がそんなんではだめなのだ。

「あれ・・・？ナイフはどこだっけ？・・・まあいいや。」

満足に満ちた表情で僕はいつもの帰り道を歩いた。

次の日のこと。

なんかクラス中がざわめいてる。

いつものことだ。みんなが騒いでるだけだ。

特別視する必要はない。

やべつ、宿題やってなかったっけ・えーと、134ページ134—
ページ…

そんな毎日の繰り返し。

チャイムの音が鳴り響く。いつもより低く響き渡る。

その低いチャイムが鳴ると同時に僕は教室のドアを開け、席に着いた。

そして定番のホームルームが始まる。

「おはようございます。

最近のみんなの服装はだらしないです。先生のようにネクタ・・・

」

先生の話当真剣に聞くのはクラスの少人数だけだった。

それでも僕は先生の話をはたすら聞く。

先生はいいことを言うときもある。

いちばん前の席で先生を見つづけた。

「では、朝のホームルームは終わりです。

・・・伊藤君、鈴科君、この後職員室前にきなさい。」

最後に小声でこういった。

さっそく生徒会長のことだと思った。

なんせ全学年をまとめる仕事に就こうとしてるんだから。

きつと鈴科も呼ばれて立候補の準備をするのだろう。

僕は締まっているネクタイをさらに締めた。

職員室前に行くと茂木先生が立っている。

その後ろには鈴科もいる。

先生は真面目な顔をしている。

ふと後ろを見ると遠くのほうで校長先生がいる。

又けてられないなと心で笑った。

そこで、なんか茂木先生が僕に何か言った。

確かにそうだった。

僕は耳を疑った。

そして体中が固まった。

「伊藤君、このナイフは何だい？」

呪い天使 03 『刃物』 (後書き)

伊藤の行動が今後・・・

呪い天使 04 『犯人』（前書き）

伊藤のつた行動は先生にどうとられたか・・・

呪い天使 04 『犯人』

呪い天使 4 『犯人』

先生と鈴科がいる。僕はつきり生徒会関係のことだと思ってた。ただ先生は僕にこういつて僕は固まってしまう。

なぜなら・・・

先生が昨日僕の靴をずたずたにしたナイフを持っていて・・・あきらかに、僕を疑っているからだ・・・。

「このナイフは何だい？」

言葉を失う僕。

ここですぐに本当のことを言えばよかったのかもしれない・・・。この間が、長く感じて、先生は僕をさらに疑うことになってしまう・・・。

また先生が繰り返し同じ質問をする。

僕はやっと口が開く。

あまり、こういったことは話したくないのだけれども・・・

「昨日・・・靴に、靴に刺さってたんです・・・。

はい・・・、切り裂かれちゃって・・・。はい・・・。」

「じゃあその靴はどこにありますか？」

このとき僕は終わったと思った。

自分の今日履いてきた靴は、紛れもなく前の切られた靴と同じ種類

の靴で

切られた靴は見つからないようにと昨日の帰り道捨てたのである。

「今朝……捨てました……。」

「何故そんなことを？」

「……騒ぎにしくなかつたからです……」

「では今下駄箱にある靴はなんですか？前のと同じものですよね。」

「いいえ……実は昨日同じ種類の靴を買ったんです……」

あつっつ・・・・・

僕はまた驚くことになる。

こうなることを計算していたかのように靴は良い加減に汚されていた。

これではどう見ても僕が前から履いていた靴だった。

僕がおどししながら説明している事が事実だと証明する人がいない。

「あ……、あ……今日の朝までは綺麗だったんです……」

「分かった分かった、いいわけは言いから……このナイフは何だ
い？」

自分の言うことは何言っても伝わらない、そう悟った。

僕は迫ってくる先生に恐怖心を抱き、無我夢中で走った。

先生の声も聞こえないほどに走る・・・
きつと

「待て！」とか言ってたのだろう……。

息も荒れ、スピードを落とした。

僕は誰がこんなことをしたのかある程度推測する。

僕に恨みを持つ奴は……
そしてすぐに答えは搾り出された。

「おい。」

そこで誰かの声がする。

振り向く僕……。

振り向かなければ良かったと今でも後悔している……。

僕を呼んだ男の顔は、これから先僕に恐怖を与えることになる。

「おい伊藤……。」

彼の声、顔、全てが悪に満たされていた。

僕をにらみ続け、生気さえ感じさせないその冷たい瞳……。
紛れもなく彼が犯人だ……。そう確信させた。

「……鈴科つつ……！！！」

ドッ……

いきなり僕の顔は殴られる。

振り向いて彼の顔を確認したその直後に顔を殴られ、
続けて手加減無しで僕の腹部は殴られる。

……運が悪いことにまわりに人一人としない。

「痛つ……なんでこんなことを……。」

「分かってるだろ？そくだよ。そう、生徒会長さっ……！」

「まだ、決まったわけじゃ……。」

「俺のプライドを．．．崩しやがって．．．」

彼は憎しみ溢れていた。

もう彼を止めることはできない．．．。

僕は彼が何を言っているか分からなかった。

そして．．．笑いながら彼はこういい残して去っていく。

ごめんね、こんなじゃないからね！

しばらく時は止まり、僕は廊下で啞然としていた。

彼が、人望の厚い彼が．．．あのナイフを．．．

いつも持ち歩いていたと思うと怖さのあまり．．．

歩くことも紫になった頬に手をあてることも何もできなかったんだ．

．．。

呪い天使 04 『犯人』（後書き）

そして鈴科と伊藤はこれから大きく関わっていく・・・

呪い天使 05 『友人』（前書き）

そして、事は始まった。

呪い天使 05 『友人』

呪い天使5 『友人』

鈴科が、僕の靴を切り裂き、先生に疑われるのを想定して僕の新品の靴を汚し、そして帰り道で僕を殴った。

その彼の一言は、一生忘れることはないだろう。

「ごめんね、こんなんじゃないからね！」

僕は言葉を失った。

人望の厚い彼が、あのナイフをいつも所持していたと思うと……。

僕は怖くて仕方なかったんだ……。

家では親に耳にもそれは届いていた。

散々叱られた。

親まで僕を信じようとしなかった。

早く自白して謝りなさい、だとかそればっかだった。

僕は母の間違った説教に腹をたて、ドアを強く閉め部屋から出て行った。

その姿も、僕が変わってしまったと、母は悟ったのだろうか？
母は声を荒げ泣き出した。

学校に着く僕。

いつもは10分前には登校していたが

今日に限っては席に就いたとたんチャイムになる始末だった。
俺の隣りはいつもと変わらず都宮だった。

「おはよう、今日は遅かったね！」

「ああ、うん。」

「ねえねえ・・・あの事件だけどさ・・・本当のどこどうなの・・・？」

彼女は僕を信じてくれた。

そして真剣に話してくれた。

彼女が、心の支えとなってくれた。

「そうなんだ・・・でもきつとみんな分かってくれるよ！」

「おーい都宮。」

だれかが都宮を呼んで僕と都宮の会話は中断された。

また独りになった僕の前にまた一人やって来た人がいた。

そう、水沢令治。

「お前どうしたんだよ、あれ、嘘だろ？」

こいつもだ・・・こいつも僕を信じてくれる・・・。

「ああ、あれは鈴科がさ・・・」

「俺、先生に言ってくるよ・・・。」

「やめたほうがいい。お前もいじめられるだけだ。」

少し腫れている頬を強調して見せた。

「・・・何も言わない方がいいな・・・。」

「僕たちは・・・彼らに何もすることができないんだ・・・。」
「あのさ・・・。」

水沢が話しかけた途端に授業のチャイムが鳴り響く。

国語の授業の始まりだ。

「教科書を開いてください。」

机から無造作にあさる僕。

ああ・・・

僕は軽くため息をつく。

あいつ、どこまでやる気なんだ・・・？

そつと後ろの方の席を向く。

教科書を読みながらこつちを向き不気味に笑う鈴科が視界に入った。

僕の教科書は、どこにも見当たらなかった。

ここぞと僕は先生にこのことを告げる。

優しいことで有名な先生だったのでこれはチャンスだった。
だけど・・・

「先生、教科書がありません。」

「家に忘れたんじゃないのか？はい・・・56ページ・・・。」

どの先生にもこのことは伝わってるみたいだった・・・。

間違った情報が、先生達の間流れてしまった。

授業終わった後国語の先生が僕にこういう。

「何で自分のあやまちを他人のイジメのせいになろうとするのかい

？

・・・ちゃんと謝りなさい・・・。今なら教育委員会も許すだろう・・・。

悪いことは言わない。先生に本当のことを言えば警察は間逃れるんだからな。

分かったかい・・・じゃあね・・・。」

先生は僕に背を向ける。

「待ってくださいつつ！！！」

「何だい・・・？」

「本当に、違うんですつつ・・・先生・・・本当に・・・
つつ・・・違うんです・・・うつ・・・うつ・・・
信じてくださいよつつ・・・うつ・・・。」

・・・みんなが僕を見ている。

同情してるのか？自作自演は恐ろしいと見ているのか？

・・・そこに鈴科の友人である『上前戒[○]』が叫びながらやってくる。

きつと彼も真実をしてっているのだろう・・・。

きつとそいつは鈴科の仲間なんだろう・・・。

「先生つつ、伊藤君の体操着、びりびりに破れてました・・・
つつっ！」

・・・またか・・・。

呪い天使 05 『友人』（後書き）

みなさんは、いじめに対してどのような考えをもっているでしょうか？

呪い天使 06 『不安』（前書き）

物証が初めて現れた・・・

呪い天使 06 『不安』

呪い天使 6 『不安』

・・・またか・・・

また僕の物が切られている。

体操着が、見事無残に切り刻まれている。

今回ははさみのようだった。

これはどう考えてもイジメだ。

こんなにも続けば先生だって信じてくれるはずだ！

さあ先生・・・信じてくれますよね・・・？

僕の予想はそこそこの中した。

ここまですぐと流石に先生も僕のことを多少信じてくれる。

水沢のおかげだった。

彼は朝、僕の体操着を見ていたし、その間ずっと一緒にいたことも証明してくれた。

「じゃあ君のいつていた通り、靴も・・・そうなのか・・・？」

ためらにながら先生は僕を少しだけ信用した。

これを機に僕は一気に自分を主張した。

「はい、そうなんですつつ。このナイフもその日はじめて見たんですつつ」

「そうか・・・すぐに水沢君と一緒に今日校長室へきなさい。」

「はいつつ・・・！！」

当然のことだが無罪が確定された僕は歓喜極まり、同行してくれた水沢の制服にしがみついて、ろうかに座り込み・・・泣いた。

校長室では、僕の意見がすんなり通った。

僕はほとんどの事を詳しく説明した。

だが最も重要な事実が頭にひっかかり、口から出てこようとしない。鈴科のことだ。

今のところ、校長との会話の中で鈴科という名前を一切出してない。

不自然に人の気配さえ感じられない廊下でのあの出来事が、先生・

・否、他人に伝わるのをこの口が拒んでいるのだ。

『こんなじゃないからね』

この意味ありげな言葉、不敵な笑みが脳裏から一切離ようとしない。今後も鈴科は僕へのいじめを続けるだろう。

僕は鈴科が犯人だと公になるうがならまいが、彼が今後誰に対してモイジメをしなくなるようになればいいと思っていた。

しかし、少しでも先生が鈴科を疑わなくては彼の悪行は止まることもないだろう。

だから僕はこう言った。

「・・・別に思い当たる節はないんですけどね・・・うーん・

・あ・・・ええ・・・と・・・人を疑うのは好きじゃないのですが・

・鈴科君が僕を恨んでも仕方無いですよ・・・生徒会のことです・

・あつ・・・も・・・もちろん証拠なんてないですけど・・・」

先生は真剣に聞いてくれた。

そして鈴科君の行動も良く見ているよ、と助言もしてくれた。

「では、伊藤君も水沢君も持ち物には気をつけるように。」
「はい」

そう答えた後ドアを開けて外に出ると同時に妙な胸騒ぎが走った。
人の気配がドアの前にしたのだ。

気のせいなのだろうか？気のせいだと信じたかったが、その気配に
鳥肌を立てていた事実に否定ができなかった。

放課後、僕と水沢と都宮は一緒に帰ることになった。

真相、恐怖、傷の跡・・・全てを話した。

そして二人は僕を助けてくれるといった。

僕はすっごい安心して、家に帰った。

家では僕が先生に頼んだだけあって親には伝わっていた。

母は無言で笑ってくれた。

僕の不安は一気に消えていった。

これ以上心配させる物が・・・。

親が辛い思いなんかしちゃいけないんだ・・・。

バック、教科書ノートを念入りに確認した後床につき目をつぶった。

次の日は、流石に何もおこらなかった。

鈴科は何を考えているのだろうか？

そういう疑問の中はチャイムは鳴り響く。

そつと後ろを向く僕・・・

また僕を見て不適に笑うのだろうか？

先生に問い詰められた彼がそこにはいるのだろうか？

犯行を恐れる気持ちを抱いて、足を震わせているのだろうか？
後ろを向いたまま僕は固まる。

後ろには鈴科がいなかった。

無遅刻無欠席で有名な鈴科だった。

彼は昔、『記録のために頑張らなきゃね』と目を輝かせていた。
なのに何故……。

風邪？いや、誰かから聞いた話だが、彼は風邪をひいたことがない
と言う。

少なくとも多少の熱が出てても学校に遅刻せずに登校していたことは
事実らしい。

では何故……？

もしかして……

また、鈴科の不敵な笑みと僕への暴行が頭のビジョンに映し出され
た。

僕は何かを予感した。

家を荒らそう……とでもしてるのか……？

まさか……

まさか……

今日は親は家にいるんだぞ……！？

何を考えているんだ……！？

朝の会は終わり、僕は職員室に走った。

「先生つつ！ちょっと電話かしてください……！」

……プルル……プルル……

……プルル……プルル……

・プルル・・・プルル・・・
・・・・・プルル・・・プルル
・・・・・プルル・・・プルル・
・・・・・プルル・・・

電話は同じ音を繰り返し流すだけだった。

呪い天使 06 『不安』（後書き）

不安が募る・・・

呪い天使 07 『感情』（前書き）

鈴科が・・・母に・・・

呪い天使 07 『感情』

呪い天使 7 『感情』

．．．．プルルル．．．．プルル．．．．

いつも学校を休むことのないあの鈴科が学校を欠席している。
僕はとっさにいやな予感がしたんだ。

鈴科は、僕の母、家を荒らそうとでもしているのか．．．？
様々なことを予測したがやはり答えはこれしかなかった。

．．．．．プルルル．．．．プルル．．．．

早く出てくれ！お願いだ！

．．プルルル．．．．プルルルル．．．．

大切な思い出が詰まった家、部屋、家具、写真．．

そして何よりも大切な母．．．．

そして．．．たつたひとつしかない．．

．．．．．父が残してくれた物．．．．

鈴科つつつ！僕の全てを奪わないでくれ！

プルルルル．．．．．

．．．ガチャ．．．．．

え・・・？

『留守番サービスセンターに・・・・・・・・・・』

ダメだ・・・・・・・・・・終わった・・・・・・・・・・。

僕は職員室から出て行き、教室に戻ろうとした。

泣きながら、泣きじゃくって、今すぐにでも家に帰ろうと思った。

視界がぼやけていて階段に幾度とつまづく僕・・・

生きている心地がしなかった。

落ち着いて考えれば、全ては想像の範囲のことなのに・・・

教室に戻る前に涙はふいておいた。

だけど何も見えていない。

真っ暗な闇の中に並んでる机があるだけだった。

目を真っ赤にしている僕の目には驚くべき光景が映ってしまった。

鈴科がここにいたのだ。

僕は再び目に涙をためながら彼の腕を握りしめた。

少し感情的になったのか。

もう既に被害妄想を事実だと無意識のうちに頭が仕立てていたのだ。

そしてその抑えきれない感情を鈴科にぶつけた。

家のこと、母のこと・・・彼が犯罪者だということ・・・

何か手を出したのか、何かしたのか・・・？

色々なことを鈴科に言う。

僕はここで落ち着けばよかったのだ。

周りも見えない、被害妄想が爆発、犯罪者への怒り。落ち着けば良かったと後から思う後悔もよくよく考えればこの時点で落ち着くなんて不可能だった。

それほどにまで僕の心は暴走していた。

冷静さを失った僕は鈴科にあしらわれた上で払われた。途中で先生も参加し、先生も僕を止めに入っていた。

「気持ち悪いんだよ・・・勝手に決め付けるなよ・・・今日は偶然寝坊しただけだよ。」

俺を犯罪者なんかにするんじゃないやねえーよ、生徒会長さんつつ」

「おーい！鈴科ー！伊藤ー！先生ー！」

誰かが僕たちを呼ぶ。

まただ。

また起きた。

僕は声の方を向いて顔が青ざめていくのを感じた。

「伊藤君の教科書が！や、やぶられていますつつ」！」

いじめは楽しいのだろうか？

苦痛を味わいさせて何になるともいうのか？

こんなことしても利にならないじゃないか。

そこまでして僕を陥れたいのだろうか？

先生が教科書を見ているとき僕は後ろをそっと向く。

鈴科がまた不敵な笑みで笑っている。

いや、いつもとは違う笑みだった。

いつもより深く、濃く、そして悪に満ちた、そんな笑み。

いつも以上に恐怖感が増したその笑みの理由は、先生が言った言葉で氣付いた。

「教科書がこんなにも・・・ひどいな・・・伊藤君・・・、

・・・でも、時間的に遅刻してきた鈴科くんには不可能だな。」

それを狙って遅刻をしたのか・・・

呪い天使 07 『感情』（後書き）

感情むき出しの態度は・・・

呪い天使 08 『追憶』（前書き）

鈴科は自分を無罪に仕立て上げた・・・

呪い天使 08 『追憶』

呪い天使8 『追憶』

そう、鈴科が遅刻した理由はここにあった。

鈴科がいない間に鈴科の仲間が僕の教科書を切り刻む。

せつかくここ最近、先生も鈴科に疑いの目をかけていたのに、
・・・鈴科が疑われることがなくなっただんだ・・・。

しかも僕は強い感情をむきだしにしてしまった。

クラス中の全員が僕を細い目で見ている。

先生も、再度僕を疑い始めようとしている。

・・・もう・・・信じてくれるのは水沢と都宮だけとなった。
他は、全員敵だ。

家に帰る・・・。

なんで帰り道はこんなにも遠く感じるのだろう・・・。

過ぎ去るアスファルトの景色を見ながら、ゆっくりと・・・ゆっく
りと・・・。

・・・灯りのついた玄関について、僕はホッとした。

「ただいま。」

「おかえりなさい。」

ボタン・・・

何もいわずに、部屋に入った。
机の奥底を無造作にあさる僕。

何かの感触に気付き、僕はそれをそつと取り出した。
それを手にとり、ハンドルを回した・・・。

タラララララ・・・ラララ・・・

・・・オルゴールだった。

そしてそのフタの内側には、僕たち3人家族の写真がある・・・
唯一残った父の写真、唯一父が渡した僕へのプレゼント・・・
このオルゴールの曲名は分からないけど・・・
すごく暖かくて・・・
そのひとは僕を安心にさせた。

「お父さん・・・会えないかもしれないよ・・・もう一度だけ・・・
会いたいよ・・・」

僕はそういいながら手に持っているオルゴールに滴が落ちるのを見てあわてて服で拭いた。

そして父さんの言葉をふと思い返した。

父さんの温かい言葉は、一つしか記憶にない。

だが、その一つは、背景から父さんの表情から、喋り方まで、全て鮮明に覚えている。

・・・

【お父さん・・・なんでっ・・・一緒にっ、暮ら、せないのっ・・・
・・・？】

小さな頃の僕はわけも分からず泣いていた。

離婚の原因は子どもの僕にも理解が出来ていた。
性格の不一致。

僕は母さんも父さんも大好きだった。

しかし、ある日突然父さんと母さんは喧嘩をし始めた。

その喧嘩はあまりにも大きく、父さんと母さんは一生会わないような間柄になるまでお互いを嫌いあった。

・・・いや、どちらかといえば母さんの方が離れたい思いが強かったのだろう。

嫌でも聞こえてくる会話を密封された部屋で聞いていた僕にもどちらが攻め手なのかくらい知れた。

だが母さんも嫌いでなければ、父さんも嫌いでない。そして大好きだ。

僕はどちらの味方もできずに、子供を養うという面で母さんにひきとられたのだ。

【絶対、この子や私に会っちゃだめよ。】

そういった母さんは引越しの手続きを全て自分で行い、済ませた。もちろん父さんは住所さえ教えてもらえなかったのだろう。

だから最後の日、母さんがトイレに入った隙に父さんはたった一つの言葉だけを僕に託した。

【雄・・・もうお別れだ・・・一生会えないかもしれない・・・

だが、それは嫌だ・・・我慢できない・・・

まだ少し先のことだが・・・高校生になったら生徒会長になりなさい・・・

お前の性格によく合っているし、たくさんの経験ができるはずだから。

そして会長になって県に名前を登録されてくれ・・・。

そうすればお前の居場所を突き止めることができる・・・。

高校に向いて、お前にそこで再開だ。

分かったか？・・・お願いだ・・・俺は・・・それまでずっと待ち続けているからな・・・。

ごめんな・・・雄・・・こんなんでよ・・・

信じてるからな・・・じゃあな・・・【

・・・

オルゴールを再び僕は回した。

そして知らない間に僕は深い眠りについていた。

呪い天使 08 『追憶』（後書き）

父さんとの再会のため・・・僕は・・・

呪い天使 09 『目撃』 (前書き)

たった一言が僕を変えた。

呪い天使 09 『目撃』

呪い天使 09 『目撃』

再開するために、父さんとの約束を守るために・・・
僕は生徒会長がしたい。

良い経験ができる・・・とも父さんは言っていた。

そうだ・・・僕はすぐにでも先生から無罪を主張しなければ・・・
！

父さんこの思い出に浸った僕はすぐに眠りについていた。

次の日、僕は誰とも話さず一日を終えようとしていた。

都宮も水沢も、この状況はなしづららしい。

軽いアイコンタクトで会話して終わった。

そんな放課後だった・・・。

ある女子の高い声が廊下に響き渡り、僕の耳には更に大きく鳴り響いた。

思わず足を止め、そちらに目をやった。

少し興奮気味のその声は先生に向けられていて、どうやら講義をしている様子だった。

・・・そして彼女は、たしかに僕の名前を発していたのだ。

「先生、私見てましたっ！伊藤君の教科書を鈴科の友達、上前が切り刻むのをっ！」

本当ですっ。見たんです・・・。あれは全部鈴科君の陰謀ですよ

っ！」

しばらくの間瞬きすることさえも忘れていた。

この事件を解決に導くために首を突っ込んだのはこの人が初めてだった。

名前は思い出せない・・・というより分らない。

この女子と会うのは廊下ですれ違う程度で会うというよりは見かけるだ。

いつも大人しめで謙虚な感じだ。

もちろん今のような大声を聞いたことがない。

むしろ話声も聞こえたことがないだろう。

そんな彼女が、僕のために声を張り上げてくれている。

「おっ、伊藤君ー！私、見たんだからっっっ！」

目撃情報提供者

「伊藤君、今、三日月さんから聞いたよ。上前君がやったらしいな。」

これだけですべてが変わろうとしている。

「そうだったんですか・・・。」

三日月 由奈（みかづき ゆな）

名前はやはり初めて聞く。

改めて彼女の顔を見てもやはり大人しそうな人だ。

実はこの件に関して、目撃者が0というのはおかしいと思っていた。誰かしら目撃したけどみんなこの件に関わりたくないがために口を閉じている、と僕は予測していたのだ。

そう予想してたものだから目撃者には全く期待をしていなかった。
だが三日月は違かった。

廊下で堂々と先生に抗議していたのだ。

先生も完全に三日月の姿に圧迫され、三日月の言葉を信じていた。

「伊藤君・・・本当に鈴科君が・・・」

「・・・いや・・・僕の口からは何も言えません・・・すみません・・・」

「分かった。なにか言いたくない理由でもあるのだろう。」

よし。じゃあ、今日から色々調べるよ。気をつけて帰りなさいね。
さようなら」

僕はこのとき笑顔になったと思う。

すっごい笑顔で・・・素の笑顔だった。

「伊藤、帰ろう!」

「ああ、うん。」

大人しいと思っていが、それは偏見であつた。

初対面の人・・・ましてや僕なんかの味方につき、さらには一緒に帰ろうと誘ってくれた。

そして何よりも、三日月は明るかった。

「あのさあー、本当に見ていたの?」

「うん。私隣のクラスだけど見てたんだよ。」

「ありがとう。これで僕の無実が・・・証明されたよ・・・」

「まったく先生も先生よね。普通は自作自演だなんて疑わないもん
つ」

「そつだよ。普通は鈴科を一番に疑うでしょ。」

「ねっ! ははっ! 本当に鈴科、これ以上こういう悪さをしないとい

「いね！」

「うんっ！」

三日月とは自然と話があった。

ツボも多少重なり、会話が絶えることがなかった。

暗い夜道だったけど、僕たち二人の周りだけは輝いてたと思う・・・。

今日が一番・・・楽しい日だ・・・

明日はもっと楽しくなりそうだな・・・。

「じゃあね！」

「じゃあねえー！」

僕はすぐに布団に入って、すぐに眠りについた。

呪い天使 09 『目撃』（後書き）

親友が増えた。

呪い天使 10 『挨拶』（前書き）

もう、終わりが見えてくるはずだ・・・

呪い天使 10 『挨拶』

呪い天使 10 『挨拶』

忘れもしない夜となった。

やっと僕の無罪が確定された。

あの三日月っていう人のおかげで、僕は助かったんだ。

三日月が目撃したのは鈴科の友人の上前戒。

先生はまずは上前に目を付けて色々調べられ、上前はすぐにでも先生に呼ばれるだろう。

そうすれば鈴科がこの件に関する真の計画者だということが出てくるはずだ。

鈴科も、これにこりてイジメをしなくなればいいなあ……。

すぐに眠りについたあと、すぐに朝はやってきて、久し振りに水沢と登校することが出来た。

僕は水沢に全て語った。

両手を使って、分かりやすく、大きく語った。

そんな僕を水沢は笑ってくれた。

途中で都宮とも合流し、いつも通りの仲良い3人組になった。

朝、ほぼ一番のりで学校に来た僕たち3人は同時にドアを開け、誰もいないだろう教室に向かって大声で

挨拶をした。

ドアを開けると何も変わらぬ教室が目に入りカーテンが開かれたま

ま日差しが教室を照らしている。

都宮と水沢は

「朝早くに学校来るっていいねー」など話している。

だが・・・僕だけは会話に声が出なかった。

二人とも互いに話していて視線がずれ、そこを見てなかったらしい。しかし僕の目には教室に入った瞬間映し出された。

水沢も都宮も、途中で気付いて、大きな挨拶をしたことを悔やんだ。

同時に朝早くから学校に来なければよかったとも後悔した。

そこには、上前の胸倉をつかむ鈴科がいた。

鈴科は僕たちにこの現場を見られたことに動じず、冷静な表情のまま僕たちの方に寄ってきた。

そしてたった一言、こういう。

チクったら殺すからな・・・

動じたのは僕たちだった。

鈴科の変わり果てた形相に体が固まってしまった。

教室から鈴科が出て行った後、僕たちは上前の方へ歩き寄り添った。今ではこの教室のすがすがしさが感じられない。

上前との距離が長く感じる。

ようやく上前に話しかけられる程度に近づいた僕らは上前に声をかけてみた。

上前の体に異常はなかった。

何故鈴科に脅されていたかを訪ねると、上前は何度も躊躇ったあと体を震わしながら答えた。

単純に三日目に目撃された失態が原因だった。

この失敗により、鈴科が先生に疑われる羽目になるのだ。

しかし実行したのは上前戒だ。

鈴科は口封じのため、上前を脅したのだった。

「伊藤・・・・・・・・ごめんな・・・・・・・・」

上前はそう言ったまま顔をあげることはなかった。

僕は気にするなよ、と言ってあげた。

更に話を聞けば上前は最初から鈴科に脅されていたらしい。
結局、上前も被害者だった。

「上前・・・・あのさ・・・・先生に言おうよっ！ねっ！？」

「えっ・・・・でも・・・・」

「なんで・・・・。全員で先生に言えば怖くないよ・・・・！」

「伊藤・・・・お前・・・・あいつの恐ろしさ知らないだろ？」

「え・・・・？」

「あいつ、生徒会の一次審査で落ちたとき、刃物持ってたよな。

・・・・あんなのすぐに用意できるもんじゃないよ・・・・。

つまりだな・・・・鈴科は、もともとそういうやつなんだ・・・・。

あいつの後ろには・・・・暴力団がついているんだ・・・・。」

僕は言葉を失った。

鈴科は口先だけで先生、生徒からの信頼を得ていたのだ。

人はこんなにも簡単に仮面をかぶることができるのだろうか？

しかし鈴科は仮面を被り。仮面の中では僕たちを見下していたのだ。

鈴科の、存在が・・・・恐ろしくなっていた。

ふとあることを思い出した。

「……別に思い当たる節はないんですけどね……うーん……」

あ……ええ……と……人を疑うのは好きじゃないのですが……」

……鈴科君が僕を恨んでも仕方無いですよ……生徒会のことです……」

あつ……も……もちろん証拠なんてないですけど……」

僕は少なくとも先生に鈴科が怪しいと言っていた。

そして校長室のドアの前でいた人の気配……」

あれは絶対……鈴科だ……」。

鈴科は全て聞いていたんだ……」。

大変な奴を……敵にしまった……」。

呪い天使 10 『挨拶』（後書き）

『読んでくれてありがとうございます。評価感想お待ちしております。』

『

呪い天使 11 『教室』（前書き）

鈴科と僕の関係をふと思い出していた・・・

呪い天使 11 『教室』

呪い天使 11 『教室』

ふと、僕は思い出していた。

事は突然起きた

僕が生徒会長に立候補し、同様に鈴科も立候補してしまった。
しかし一次審査では僕が勝ち、僕はほとんどの可能性で生徒会長になろうとしていた。

それに逆切れした鈴科は僕の靴を切り刻んだ。

翌朝、僕のげた箱に置き残してしまったナイフをクラスの全員は見
ていた。

僕はクラスが騒いでいることに気付かず、その日先生に呼びとめら
れた。

そうしてその帰りに僕は鈴科に暴行を与えられたのだ。

非は完全に鈴科にある。

僕は何もしていない。

しかし生徒、教員には違う情報が与えられていたのだ。

誰も僕の切り刻まれた靴を見ていない。

危険物を所持していたものとして世間から僕は見つめられた。

新しい同じ種類の靴のことの僕の発言と現物の矛盾。

僕が主張した事実は言い訳と塗り替えられ、僕は今までの信頼を失
ったのだ。

そして僕への嫌がらせはさらに増していく。

教科書がない。

もちろん誰も信じようとしないうころか自作自演と信じられた。

だけでも鈴科は大きなミスをした。

体操着。

はさみでビリビリに切られた僕の体操着が発見されたのだ。

僕が嫌がらせにあっているという事実を告げる初めての物証だった。

運良く水沢が朝は切られていない体操着を見ていたためそれは確実なものとしてとられた。

しかし、次の日はまた教科書がやぶられている。
だがいつもと違うことがあった。

ちょうどその日鈴科が遅刻していたのだ。

物理的に鈴科の犯行は不可能を見なされた。

よく考えてみれば鈴科の仲間がしたことなのに。

そしてその日、僕は感情を乱していた。

その行動により、クラスからは細い視線を浴び、先生の固まった信頼もまた崩れかけた。

僕の自作自演。

この説がまた教員の頭に浮かびあがってしまったのだ。

その次の日、三日月由奈という唯一の犯行目撃者が現れた。

犯行は鈴科の仲間の上前戒。

それにより先生はいろいろ調べると、偏見を白紙の状態に戻し考えた。

そして翌朝、鈴科に脅されている上前の姿を発見した。

上前は僕らの仲間なり、鈴科が何もしないことを願うばかりとなった。

でもクラスの目はあまり変わらないだろう。
クラスは噂でしか物事を知っていない。

鈴科はもともと顔が広く、生徒からの人望は抜群であった。
ゆえに僕はあまり信用されていない。

だけでも僕には友達・・・いや、親友がいるから関係のないはずだった。

三日月、水沢、都宮、上前。

でも僕はまだ気づいていない。

彼ら親友がいるのにもかかわらず、周囲の目をまだ気にしていることなんて。

僕は気付くと学校に到着していた。

「おはよう、みんなっ！」

「はよー！」

僕のクラスの前の廊下に、五人組が集まった。

そしていろいろと話します。

くだらない話をもします。

上前を含もこの五人組は偶然にもツボが一致した。

空気など読まなくても、素の自分がその場では出し切れていた。

僕はそれが本当の友達だと悟った。

教室の中では鈴科と僕のどっちが本当なのか、そして生徒会長はど
つちなのか、

などの疑問や審議が影の話題となっていた。

周りを気にせずわいわいと話し合っている僕らの前にそれを質問しにくる野次馬が何人も来た。

「・・・やっぱし、自作自演はよくないんじゃない？」

「何も知らないくせに・・・何をっ！・・・えっ・・・？・・・」

何も知らない人が通りがかりに歩きながら話しかけてくる。

顔を赤くし今にも手を出しそうなまでに興奮した都宮の口を僕は止めた。

「・・・とりあえず、違うから・・・。信じてもらえると嬉しいな。」

そう、僕は受け答えた。

たしかに周囲の目は気になっているのはたしかだ。

でも僕たちにはこの5人がいるじゃないか、と言い聞かせて都宮を止めた。

心の中では周囲の目を気にしているのに・・・。

「ねえ、やめようぜ？生徒会長になるために鈴科を？お前は馬鹿じゃないん？」

「・・・あのさあ・・・鈴科君がそんなことするはずないよう・・・」

「

何をたくらんでるわけ？君は。」

「あのさ・・・鈴科君のこと・・・どうなの？」

クラスはこの話題でもちきりなのであろう。

質問や批評やらが次から次へと来る。

次第に僕たちは嫌な気分になっていった。

最初は大人の受け答えをし続けていたが、次第にその受け答えさえもが嫌になっていった。

周囲の目を気にしている表れなのだろう・・・返答も、強くなっていた。

最終的にはクラスの中で浮いてるような人にまで質問をされて、力チンともきていた。

ただ、今日の流れでいたい分かった。

クラスのみんなは僕たちに対して半信半疑であるが、どちらかというと鈴科を支持している。

まだ、一応は救いようがあるとしてもよいだろうか？

だが、もしもこの先、鈴科の陰謀により僕がまた陥れられたら・・・

何かあれば、きっとだれも信用しないだろう。

もう二度と何も起きないことを願った。

何が起こきようが起きまいがそんなこと、気にする必要がないというのは僕たちは周囲の目だけを気にしていた。

近い未来、僕たちに恐るべき事が起きることなど想像すらせずに廊下で笑い続けていた。

もちろんそれは、周囲など関係のないものだとも知らずに。

呪い天使 11 『教室』（後書き）

親友がいるのに、何故僕たちは周囲を気にしていたのだろうか・・・？

呪い天使 12 『都会』（前書き）

上前の今後を考えた僕は・・・

呪い天使 12 『都会』

呪い天使 12 『都会』

僕と上前は仲直りをし、上前も僕の見方についてくれた。

早く鈴科の悪行を言いたかったが暴力団を後ろに控えている鈴科に手を出せるはずもなく、先生に真実を言うなんて不可能だった。

三日月が目撃した情報は、上前の犯行だけだった。

どうにか上前の犯行を無罪にしてやりたかった。

下手すれば退学の可能性もある。

「どうすればいいかなあ・・・？」

「たしかに考えどころよね・・・。」

試行錯誤の結果、ひとつの結論を導き出すことに成功した。
偽りの情報を先生に提供すればいいのだ。

「これで完璧かな？」

「そうじゃない!？」

「今から先生にこれを出しに行くぞっ!」

「うん! そうだね! あっ・・・私、今日用事あるから帰るね! ごめんっ!」

「・・・あ・・・僕も・・・今日、塾あるから帰るね・・・! ごめん・・・。」

「わかった! じゃあねえ! 都宮、水沢!」

僕と上前は担任の茂木先生を呼び、一枚の紙切れを渡して離れた。

「先生、上前君の机にこんなものがあつたそうなんです。」

『上前、伊藤の私物を切らなければお前も伊藤を同じ羽目にあうかな』

「そうか・・・それは辛かったな」

「先生！僕と上前くんはもう仲直りしてるんです。どうか・・・」

「伊藤君本人がそういうのなら・・・まあいいでしょう」

「ありがとうございますっ」

「ではすぐに、この紙を書いた人を探すでしょう。・・・やはり鈴科君なのかね？」

「それは・・・鈴科君と決め付けるのは早いと思います・・・」

「どうしてだ？」

「やっぱり証拠なしに疑うのはだめですよね」

「・・・そうか。じゃあ一から調べなおそうかな」

これは信じてもらえるかどうか不安だったがすぐに信用してくれた。やはり先生は僕たちが何も言わずとも、鈴科を疑っている様子だった。

これで鈴科が疑われなくて済むし、上前は無罪なんだ。

僕と上前と三日月は、放課後笑いながら帰ることができた。

今日の出来事をたくさん語った。

何人もの人に質問されたり言いがかりをつけられたりしたこと。

先生から信用されていたと改めて知ったこと。

そしてこれからの、鈴科への対策も考えていった。

もちろん、鈴科が何もしなくなるような、平和主義の考えだ。

「僕たちが先生に告げるといふのは厳禁だ。あくまでも鈴科が自ら墓穴を掘り、先生にばれる。これが最高の形だ。」

「そうだね……。でも、何もしなくてこれで終わりってのが一番かも。」

「……だといいよねえー……。無理っばいけど……。」

その後、下らない話から噂話までして僕たちは笑いながら帰り道を歩く。

いつもと同じ帰り道も長く感じる。

そんなひとときもある一瞬の出来事で崩れ去る。

目の前に現れるある集団。

あれは、どう見ても暴力団だろう。

見た目ですぐ分かる。

金属バットやらギラギラした服。

スキンヘッドやらリーゼントなんかもいる。

タバコを透かしたパンチパーマの奴もいる。

小指を切っけていてもおかしくないようなその姿は誰も寄せつけよう
としない。

どおりでここの道で人が少なかったわけだ。

僕たちはすぐに道を変更しようとした彼らが僕の方へと寄っていく
に気付き、僕らの足は知らず知らずに止まっていた。

「伊藤ってお前？」

「……あ……。はい……。」

「鈴科の話だよ。まあ、とりあえず俺たちについてこい。」

「え……。は……。？……。は……。はい……。」

「気にするな、金は払ってやつからよ。」

「……。はい……。」

見た目によらず彼らは落ち着いている様子だった。もちろん彼らの様子などはこの時には気づいていない。今は動かない足をなんとか動かそうと努力するだけ。こんな格好をした人間を見るのは初めてだった。それだけで動揺が隠せない。早く、早く逃げたかった。

「あの・・・僕だけでよろしいでしょうか・・・？」

とっさに出た言葉がこれだった。

この二人だけは暴力団と一緒にいさせたくなかった。被害は自分だけでいいというとっさの判断だった。

「・・・この女はいらねえが、上前。お前はついてこい。」

意外な答えに僕は内心ホッとした。

でも彼らの狙いが高なのか見当がつかなかった。

それでも三日月が助かるのならと彼らとの同行を決意した。

「伊藤・・・私・・・私・・・」

「うん・・・大丈夫。何も心配ないって。」

「ごめん・・・ごめん・・・ごめん・・・ね・・・」

三日月も同じく動揺していた。

足が震えているのも分かった。

じゃあね、と一言言ったあと三日月はためらいながら走って帰ってくれた。

「じゃあ、こい。でも安心しろ。何もしない。」

「・・・え・・・？あ・・・はい・・・」

僕たちは言われるままに電車に乗り、街に出た。

そして僕たちは、ウラの世界を適当に歩かされた。

いかにも、危ない都会、という感じだった。

ギラギラ光ってて、喧嘩がいつどう起こっていてもおかしくない状況だ。

そんな街の中を、ずっとずっと歩かされて、僕たちは帰らされた。

何だったんだ、と不思議に思いながら、少し安心していたんだ。

すぐに駅を下りて・・・また上前と笑いながら一緒に帰った。

・・・街のどこかで、シャッター音が鳴ったことに気付かずに・・・

呪い天使 12 『都会』（後書き）

このシャッター音とは・・・

呪い天使 13 『写真』（前書き）

もつすぐ・・・生徒会の二次審査だ・・・

呪い天使 13 『写真』

呪い天使13 『写真』

僕たちは暴力団の彼らと街を歩いた。
だけでも何もおこらなかつた。

一体何のためだつたのだらう？

しかし、間違いなく鈴科は関係している。

鈴科は何をしようとしているのだろうか？

そもそも、あの強面の暴力団が何もしないというのもおかしい。
移動費のお金まで払ってくれていた。

・・・おかしい。というかむしろ馬鹿げている。

でも僕たちはまだ気付いてなかつた・・・。

その街で僕たちは小さいフラッシュをうけ、シャッター音が鳴った
ことを・・・。

その次の日だつた。

「水沢、都宮おはようー。あつ、三日月もいるじゃん。おはよー！」

僕と上前同時に登校し、明るい返事をした。

だがみんなの返事は昨日のことを心配してなのか、あまり明るくない。

「昨日っ！！！！大丈夫・・・！？」

三日月は一番に心配の声を掛けてくれた。
事情を話すと全員ほっとしていた。
だが僕は何所かホッとできない部分がある。
あの意味はなんだったのだろうか？
一緒に歩く理由が見つからなかった。

だが全ては終わったことだった。

もう僕はみんなと日常的な会話をし、いつもどおりに盛り上がっていた。

僕たちは親友であり、全員で鈴科に立ち向かう・・・そんな仲間。
僕らは完全に信用し合い、完全に信頼されてた。

もうすぐ、忘れかけてた生徒会の二次審査だ。

僕と鈴科は選挙をすることになる。

そんなこともあつて僕は先生に呼ばれたんだ。
だけでも僕は何かを察した。

どこか悪い風が僕の周りで吹いた気がした。

「・・・伊藤君、今日の生徒会選挙のことで・・・。」

「あ・・・はいつつ。」

・・・別に何もおかしくない先生の一言。
でも予感が消えようとしなない。

そして話すたびに一定の何らかの間がある。
その時間がやけに怖く恐ろしかった。

僕は少なからず何かを感じていた。

「伊藤君・・・」

「は・・・はい・・・!？」

・・・

「このときの演説で君はこの立ち位置で・・・。」

なんだ・・・資料を探していて間があつたのか・・・。
気づくと僕の目は先生にしか集中していなかった。

「・・・分かりました。そうですね？」

「そうです。」

「・・・では、失礼しました・・・。」

「ちよつとまちたまえ・・・。」

「はい？」

・・・またなんらかの間がある。
その間には慣れてきそうにもない。

「ちよつとこつちにきなさい。」

・・・

「・・・なんですか・・・？」

さつきから何かの不安を感じる。
人間の勘というものはあくまでも勘でしかないが、今回はそれが的中する。

「伊藤君・・・これは、なんだい・・・？」

顔をしかめている先生が机の上から取り出したものは、僕と暴力団がいかにも仲良さそうに歩く写真だった。

これは僕の高校ではあまり良いとされていない行動だ。

そもそもカラーギャングなど、どこの学校でも禁止されていることだろう。

少なくとも、生徒会長がこんなものでは絶対に無理だろう。

僕の体は完全に硬直しだしていた。

だがこのような状況に慣れてきたためか、口だけはすらすらと動き出す。

「それは、暴力団に無理矢理歩かされたんです。でも何もありませんでしたっ信じてくださいつつ。」

「残念だが・・・私たちは君を信用できない・・・・・・」

鈴科君との件とはまた別に・・・この件で君の事は信用できない・

・・・

先生の表情は強張っている。

希望を探している僕の瞳は静かに細くなるのを感じていた。

取り戻しかけていた信頼が消えた一瞬であった。

「先生・・・本当なんです・・・本当に・・・」

「・・・だが・・・この表情は・・・楽しんでるように見える。」

「彼らがそう仕向けたのです・・・」

「例え君の言っていることが事実でも普通だったら怖くて明るい顔はできないな」

「・・・・・・でも・・・・・・」

「どうやらこれは、生徒会長は・・・・・・」

生徒会長になることが、唯一の父さんと会ったための条件だった。

もちろんそれだけのために、生徒会長をしようなんて思っていない。学校のTOPにたって生徒をまとめていく責任重大な役職、仕事だ。僕は小学3年ごろから学級委員なり、このような仕事は父にも言われたとおり僕に向いている。

そして豊富な経験が出来るのは事実だ。

父さんとの約束があるうがなかるうが、僕は自分の性格的に生徒会長に立候補するだろう人間だ。

父さんのと約束してから、さらに僕は生徒会長に対する気持ちは大きくなっていった。

結局今では父さんとの約束よりも生徒会長になりたいという純粋な理由の方が勝っているのかもしれないほどだ。

なのに・・・

なのに

「・・・失礼しました・・・・・・・・・・」

下を向いたまま僕は教室に戻った。

もう、何も頭をよぎろうとしない。

終わりだ。

その頃、職員室では別の問題が取り上げられていた。

職員室中がざわめく。

先ほどまで僕と話していた先生の周りに、総勢100人ほどの教員が集結した。

100人の手に渡った写真は再びその先生の手に戻ってくる。

「・・・大変だ・・・・・・・・まさか・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

L

呪い天使 13 『写真』(後書き)

写真が僕を揺るがした。

呪い天使 14 『暴風』 (前書き)

写真に隠されたもの・・・

呪い天使 14 『暴風』

呪い天使 14 『暴風』

制服姿の僕と不良が街を歩く写真。

鈴科が僕の信頼をなくすためこんな写真を撮ったに違いない。

その写真は先生に渡され、僕の信頼は一瞬にして崩れた。

もちろん、鈴科との件には関係無いというが、最も重要な事に被害が襲う。

生徒会長の問題だ。

僕は生徒会長にならなくてはいけない。

・・・もう、終わったのだ。

職員室では僕がいなくなった瞬間、もう一つの話題でざわついた。

もちろん僕はざわついたのを耳にただけで、内容は何も聞いてはいない。

「・・・大変だ・・・この写真・・・まさか・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕が落胆の表情を浮かべながらドアを閉めたとき、都宮とばったりと会った。

今、あまり人と会いたくなかった。

「あつ、都宮じゃん・・・」

「ああうん。伊藤、先生からなんか言われた？」

「・・・もうダメみたい・・・・・・・・・・」

「えっ！？なんで!？」

「あとで話すね……………」

「あ…………そうか…………。どんまい……………」

そこで会話が詰まる。

間も長すぎると悪いので僕は適当に話題を振る。

「で、都宮はどうしたの？」

「ああ…………コレ。勉強よ。分からないところあってさ」

「そうか。ん、じゃあね!。」

「ばいばーい」

すぐに都宮は先生の方に向かった。

「先生!。この問題教えてもらえませんかあー?」

「ああ…………都宮か。丁度いいところに来た。」

都宮が首をかしげながら待っていると、先生は机にある一枚の写真を
をつきつけた。

「なあ、都宮。…………この写真で何かわかることあるか?」

「あ…………伊藤君じゃん…………。でもこれは不良の嫌がらせだと……………」

……………

都宮は言葉を失っていた。

そして目線も体も動くことなく、震えていた。
それでも開き続けているその瞳に映し出される景色。
総勢100人と言える教師軍が自分の姿に集中している。

「・・・何かわかることあるか？」

「・・・は・・・はい・・・」

時計の針は都宮が入ってから一周し終えていた。

都宮は薄汚れた廊下のタイルばかり見ながら職員室のドアに手をかけた。

ドアを開く。

いつものように『失礼しました』の一言がその口から出てくる気配はない。

そして部屋を退室する。

ドアを開けると自分の前に影ができているのに気づいた。

そしてその影で人の存在を知り、初めてその顔を上にあげた。

目の前には鈴科が立っていた。

無気味に笑いながら都宮に話しかけた。

「・・・都宮か・・・。はははっ!!!!!!」

「・・・あなたね・・・あの写真を撮ったのは・・・」
「・・・」

鈴科は滑稽な物を見るような間抜けな顔をし、一方都宮は鬼の形相だった。

そしてその形相は鈴科を今にも殴りかかろうとしていた。

そうしてさらに鈴科の表情は笑みが強くなっていったのだ。

「それが違うんだな。教えてやろう。あの写真は・・・伊藤が俺に撮ってくれと頼んだんだよ。」

「・・・伊藤が・・・？・・・意味わからない嘘はやめて。」

都宮は表情を少し変えていた。

ただ、いつもの元気はすっかりなかった。

そして・・・誰かを恨み憎む、そんな顔・・・。

「ああ、そうだ。前から俺と伊藤は組んでたんだよ。まんまと騙されたな。」

「・・・嘘はやめてね・・・。」

「嘘じゃない。それが真実だ。」

「やめてつつつ！ふざけないでよ！」

それでも鈴科は口を止めようとしなない。

「そして――」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

鈴科は長々と都宮に話していった。

結局鈴科との会話で都宮が職員室に入ってから二時間が過ぎてしまった。

話し終わると都宮は何も言わずに女子トイレの方に走っていき、便座のあるトイレのカギを閉めた。

その日都宮は授業にひとつも参加しなかったという。

「伊藤・・・伊藤・・・・・・・・・・・・・・・・」

誰もいないところで鈴科は外を見つめていた。

風が鳴り響き、雲は覆い被さり、雨が今にも降りそうだった。
風になびく髪を戻しながら鈴科は一向に動こうとしない。

「・・・都宮もバカだな・・・。あんな嘘にひっかかるなんて・・・」

鈴科は口を少し開き、笑ってみせた。

ひとつだけ空いた窓によって風は職員室に吹き荒れた。

あわてて一人の教師がそれに気づき閉めたが、一枚の写真が風で机から落ちた。

誰にも拾われることなく、それはそつと先生の机の真下に落ちていく。

その写真の奥にはホストクラブから出て、頬を赤くした都宮がいた。

呪い天使 14 『暴風』(後書き)

都宮が鈴科を信じることになったその言葉は一体・・・

呪い天使 15 『憎悪』（前書き）

都宮が鈴科を信じたその理由・・・

呪い天使 15 『憎悪』

呪い天使 15 『憎悪』

トイレに入った都宮はチャイムが鳴るのを無視して、頭を抱え込んでいた。

都宮は総計二時間の出来事・・・職員室、鈴科、との会話を思い出す。

写真がわたされた。

一見、どっからどう見ても伊藤と上前が暴力団と歩いているような写真にしか見えない。

だが、その写真の奥にはそれよりも重要な問題が写されていたのだ。伊藤と不良が歩いているあの写真には都宮の姿が写っていた。

「都宮さん・・・何か知っていることはありませんか？」

「・・・は・・・はい・・・」

「これはどこですか？」

「・・・ホストクラブです・・・」

「未成年が飲酒していると思っっているのですか？」

「・・・ダメです・・・」

「・・・下手すれば退学の可能性もあります。校長先生と話してみますから。」

「あつ・・・退学だけは・・・退学だけはやめてください・・・」

「それは校長先生の判断によります。」

都宮は下ばかり向いていた。

職員室から出るときも、ずっとずっと。

そして職員室のドアの前にいたアイツにも、最初気がついていなかった。

あと少しでぶつかりそうになときアイツは都宮に話し掛けてきた。

「都宮か・・・はははっ！」

都宮はその声に気付き、表情を変えた。

地獄を一望し落胆している顔から何かを恨もうとする顔に変化してしまった。

「鈴科・・・あなたね・・・写真を撮ったのは・・・」

「

鈴科はそこで都宮にこういう。

あの写真は伊藤が鈴科に撮ってくれと頼んでいたものだった、伊藤はもとも鈴科と組んでいて、都宮を裏で嫌っていた・・・と。

都宮は今この瞬間、感情が乱れていた。

もちろん最初は疑いを持ち、伊藤を当然のように信じていた。

「今、伊藤は三日月と仲がいいだろ？」

すべて俺が操作したことだ。三日月に上前の犯行を見せたのも、何もかも。

そして伊藤は三日月を手に入れた。友達のお前を捨ててな。

まあ・・・捨てられたのはお前だけじゃないがな。」

伊藤は、三日月を手に入れた今、まとわりつく都宮を自分の目の前からはずすため、
事前に鈴科が暴力団の情報から仕入れた都宮の秘密を写真という物的証拠に現像して職員室に提出したのだ。
つまり、良い女友だちを手に入れた伊藤が旧友の都宮が邪魔となり捨てた。という内容であった。

感情が乱れていたためか、単純な嘘にも都宮は耳を貸してしまった。
女としてのプライドも失った都宮だからこそ、信じてしまった嘘なのでもあろうか。

そして都宮は鈴科を振り払い、女子トイレに走りこんだ。
トイレの中である人の名前をつぶやく。

強く、小さく、そして恐ろしく……。

「伊藤………伊藤………」

都宮はトイレの壁を殴りつけた。
その日、都宮は授業に参加しなかった。

そんな次の日も、都宮は学校に来なかった。
僕と水沢、上前、そして三日月は一日中心配し続けていた。
その放課後。

水沢が一人で自宅に帰ると家に都宮が待っていた。

「都宮ー！どうしてここに・・・？・・・みんな心配してたんだよ？・・・大丈夫・・・！？」

純粹に安心し、ニコツと笑う水沢に都宮は冷たくこういい返す。

「表の顔ではね・・・。」

水沢はその言葉に一瞬ためらう。

明らかに、今までの明るく心優しい都宮じゃない。

「水沢・・・ごめんね・・・私・・・知っちゃったのよ・・・。」

都宮も一瞬ためらいを作りながら切り出した。

「ど・・・どうしたの・・・？・・・。」

「それがね・・・。」

伊藤が本当に心から都宮のことを仲間だと思っていることを都宮は知る余地もなく、

伊藤を、突き落とそうと都宮は決心した。

「ねえ、水沢？あんね、伊藤って水沢のこと嫌いだったんだよ？

もともと、伊藤と鈴科・・・組んでね、伊藤、水沢のことも裏で嫌っていたの・・・。」

わたしも同じよ・・・。」

私たち、伊藤と鈴科にハメられてたんだよ・・・。」

「・・・嘘でしょ・・・？」

ああ、嘘だ。

そう都宮は心の中でそう笑ってやった。

自分が嫌われただけで水沢は嫌われていない。

だけでも伊藤がすべて納得いく形で終わらせるわけにはいかない。

水沢と伊藤の親友という関係を、今ここで断ち切ろうと決意したのだ。

伊藤の交友関係を、踏みにじってやろう。

今まで私をコケにしゃがって……。

そう、都宮は憎悪を深め、感情のままに水沢に話した。

何が起きたかを全て熱弁した。

もちろん事実ではないことも入っている。

話すたびに涙はあふれ、口が詰まっていくな。

この涙は本物なのだろうか？

都宮はそれすらも気付けないうちに話を進めていた。

続けて水沢は同じ発言を繰り返した。

あえて都宮は返事をせず下を向いた。

その芝居は説得力にあふれていた。

水沢は都宮を見つづけた。

「由奈ちゃん……三日月はね、このことまだ知らないの……。

私さ、由奈ちゃんとは仲良い今までいたいから一応伊藤とは一緒にいるね。」

不本意だけど、由奈ちゃんとはさ……友達でいたいから……

水沢……。私と水沢は友達だよ……。!!」

くさいセリフだったが大丈夫であることは都宮は知っていた。

ここまできたらすべて押し切るしかない。

少なくとも自分と水沢は親友のはずだった。

親友が嘆き悲しんでいるのを見れば水沢の心は揺らされる。

涙を流す都宮のセリフはやはりどこか説得力があった。

水沢は何も言わず強くうなづいた。

そして彼は決して目を見せようとしなかった。

都宮はそこで涙を流そうと目をこすった。

目がだんだんと潤いでいった。

そんな都宮に返す言葉もなく、水沢は何もない空ばかり見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれほど深かった信頼関係はこの瞬間、崩れ落ちていった。

呪い天使 16 『信頼』 (前書き)

水沢、都宮・・・

呪い天使 16 『信頼』

呪い天使 16 『信頼』

「ねえ、水沢？あんね、伊藤って水沢のこと嫌いだったんだよ？」

水沢も都宮の演技に騙された。

そして水沢は伊藤の存在が怖くなっていく。

ほんの少し前までは唯一の男の親友であつた伊藤が悪魔に見えてしまった。

親友が二人いる状態で、一人の親友がもう一人の親友の事を話してくれたこの状況。

水沢は話してくれた親友・・・都宮を信じることになったのだ。

ある日・・・先生が朝の学活を始めた。

またいつもと変わらぬ朝の学活。

例にならって誰も先生の顔さえ見ようとしない。

それに慣れたのか先生もそのまま学活を始める。

僕はいつも通り先生の方を向いていた。

「今日は、上前君は休みかね？」

いつも朝一番にくるような上前の突然の欠席。

みんながみんなの顔を見つめる。

そして再び前を向き、下を向いた。

僕だけは上前の席の影を見つづけていた。

机がどこか空っぽになったような感じだった。

先生が出席簿に記入しようとしていたそのとき、彼はやってきた。

「おっ、おはようございます……。」

上前が慌ててドアを開いた。

「遅刻だぞ。ほら、席につきなさい。」

「はい……。」

先生は話を続けた。

「そうだ。この前の生徒会選挙で勝った人が決まった……。」

一瞬、クラスが固まった。

緊張が解け、みんなは先生やら鈴科やら伊藤を見る。

僕は、先生の手を見つめ続けていた。

「当選したのは、鈴科君です。」

クラス中が驚きの顔を隠し切れない。

なんせ一次審査で負けたにもかかわらず二次審査で当選したからだ。

生徒審査でそこまでの差をつけて鈴科がかったのだから？

僕の目線はずれることがなかった。

見つめているのではない。

睨みつけているのだ。

心臓に重いものがのしかかったような感覚に襲われた。

視界が暗闇に包まれていくのも分かった。

初めから写真の件で無理だと知っていたものの、この告知は僕にとつて酷だった。

「鈴科君、これから頑張つて下さいね。」

「ああ・・・はい。」

先生がなにか話しているのが分かった。

しかし耳は耳としての役割を果たしてくれようとしない。

「では、終わりだ。」

チャイムがそつと鳴り響く。

と、同時に三日月の声が聞こえる。大きな足音も聞こえる。

「ねえつつつつ！伊藤——！！なんでっ！？なんでっ！？」

「・・・鈴科に僕と暴力団が歩く姿の写真を撮られ、先生に渡された。」

完全に信頼は消えたみたいなんだ・・・よね・・・ははっ・・・」

僕は下を向いたまま笑って見せた。
もう、終わったことだ。

今さら悔やんだって意味がない。
人にあたるのだけはよそう。

都宮もそこに入ってくる。

都宮と三日月が話し始めた。

音は耳に入り、耳から抜け、それが繰り返された。
目を開けて、やっと音が声となり、僕は口を開いた。

「いいよ。終わったことだしさ。授業の準備、授業の準備。」

震えながらでこつちを見つづける水沢の顔が目映った。
目が合いそうであわなかった。

いや、この状況だ。

むしろ僕は背けるように目をずらした。

結局水沢はこつちに來てくれなかった。

別にどうでもいいや、と思ってまた下を向いた。

そんなとき先生がやって來た。

同時に都宮はトイレに行ったのが分かった。

逃げたような感じだったがこれも関係のないことだった。

先生はそんな都宮の姿を細い目で見ていたのも、今の僕にはもちろん関係なかった。

「伝えた通りだ。残念だな。とりあえず生徒には教頭の圧倒的支持
とでも言いなさい。」

学校で一番エライ人は普通校長だ。

しかしこの学校の校長より教頭の方が実績も高く人望が厚い。
そんな教頭はこの学校を牛耳っていた。

それを理由にするって・・・
あまりにひどい話じゃないのか。

先生が教室から出て行く。

都宮もトイレから出てくる。

都宮は安心した表情で戻ってきた。

「（今のところ退学じゃあないんだ・・・。）伊藤ー、どんまいだよ。」

・・・水沢は僕が目線を背けたことに気づいていたそうだった。
そして水沢は思い出していた。

都宮の一言を。

水沢は震える足を抑え、席を立った。

伊藤たちのほうに行こうとした瞬間・・・

ずっと大人しくしていた上前が都宮達の方へよってきた。

水沢は大人しく席に座った。

もちろん僕の目には、彼の行動は全く映っていなかった。

「なあ・・・伊藤・・・」

みんなが

「ん？」と上前のほうを優しく見つめる。

「俺さ、実は明日転校することになったんだよね・・・ははは・・・」

呪い天使 16 『信頼』 (後書き)

水沢、都宮、上前・・・

呪い天使 17 『離間』 (前書き)

上前の突然の告知・・・

呪い天使 17 『離間』

呪い天使 17 『離間』

「俺さ、実は明日転向することになったんだよね……ははは……」

上前が作り笑いをしながらそういった。

全員、何の反応もすることができなかった。

これから鈴科の悪行から闘おうというときだったのに……。

「……まじで……?」

僕は口を開く。

そして開きっぱなしになった。

上前は床を見ながらうなづいていた。

「ごめんな：ははっ……」

「でも……高校生なのになんで転校なの……?」

「理由は転勤ってやつだよ……親の仕事とかでね。」

「そうなんだ……。」

「ああ、まあ、もう会えないわけでもないしさっ！気楽にさっ！」

「じゃあさっ、じゃあさっ！パーティーでもないっ！？」

都宮が手を広げて言った。

みんな相槌をうつ。

僕はただただうなづいただけだった。
パーティーはすぐに決まった。

僕はこの会話の返答に答えを出せずにいた。
何と言っても生徒会長のことがある。

・・・父さんと会う可能性が今ここで消えた。
副会長になれば一応は県に登録されるだろう。
だが・・・約束は守れなかった。
経験を得ることもできなくなった。
もしかしたら父さんは会長の項目しか調べないかもしれない。
どん底である。

人員不足のために、おそらく僕は副会長にはなれるだろう。
県登録でもされておくか・・・。
もう、何年も経った今だ。

父さんは忘れているかもしれない。
僕は生徒会のことは強引に割り切らせた。
・・・副会長でいいだろう。

「任せておいて！全部私が組むからっ！伊藤は行くよね？」
「あ・・・うん・・・。」

そう言っただけで都宮は走りながら去っていった。

ここから先は僕はまだそのとき知らないことだ。
僕たちの前からいなくなった都宮は水沢の方へよってきた。

「・・・やっぱり伊藤、水沢のこと嫌ってるよ・・・」

水沢は、何も驚いていない自分に気付いていた。

知っていたかのようにそのことを落ち着いて聞いていた。
やはり、伊藤は嫌っていたんだ。・・・やはり。」

「伊藤、『水沢は誘わないでくれ』っていったんだよ・・・」

水沢は適当な相槌を打った。

そして他人事のように席を立て廊下に出て行った。

都宮はそのとき気味悪く笑っていたという。

その放課後、都宮は先生に呼ばれる。

きつとあの写真のことだろう。

都宮は覚悟を決め、会議室のドアをあける。

雰囲気はまるで面接会場だった。

担任と教頭が席で腕を組みながら待っている。

机の上には書類とペン。

都宮は言われるがままに椅子に座った。

「話すことはまあ言わなくても分かるだろう。」

「あ・・・はい・・・。」

「退学の話だが、取消しとなった。ありがたく思え。」

都宮は少し顔をあげる。

「退学処分ではないのですか!？」

「そういうことになる。高校のイメージもあるしな。
だからそのことについていくつか質問がある。」

「はい・・・。」

「あのような場所に行くのは初めてかい？」

都宮はうなづく。

もちろん心の中では舌を出して小馬鹿にしている。

別に自分のことなのだから何故そんな堅苦しい掟にしばられなくてはいけないのだろうか？

たくさん化粧すれば高校生には見えないほどにまで大人になったのに。

法律を全て守り生き抜く人なんてなかなかいないんだから。

都宮はあらゆる嘘を使った。

都宮の演技は、あたかも相談にのる可哀想な被害者のようだった。

先生達は、すっかり都宮の言うことに耳を貸してしまった。

「脅されたとはいえ、そういったことはこれから止めてくださいね。

そしてこれからはちゃんと先生に相談して下さいね。」

「はいっ！」

会議室を出た後、都宮はメールを送ろうとしていた。

『退学にならずにすんだよ。これであの通りにすればいいね。』

送信ボタンを押し終わった後、また口元がつりあがっていた。

もちろん、普段の都宮からかけ離れているその形相を見た人は誰ひとりいない。

その日の放課後、都宮の家でパーティーは行なわれた。

僕は少し遅れてマフラーをつけて都宮の家に入った。

「あれ？水沢は？」

いつも一緒にいた友達がそこにはいない。
当然いると思っていた僕は首をかしげた。

「なんか水沢、行かないって……。」

都宮の重い一言にみんなは軽く驚いていた。
そして三日月がとうとう口を滑らせた。
僕は相槌を打つことに戸惑った。

「ここ最近、そういえば水沢……見ないよね……。」

それに相槌をうつかのように上前がさらに口を滑らせた。
もちろん僕は相槌を必死に試行錯誤していた。

「ひどいな……もう会えないかもしれないって言うのによ……。」

そして次々と、ここ最近の水沢への不満がこぼれる。

ここ最近話さないだとか、寄ってこないだとか、暗いとか。

僕は何も言わないでいた。

その理由は友達を侮辱したくないからという正義を貫く意思があつたからではない。

ただひたすらに相槌を探し続けていたのだ。

だが何かおかしい。

唯一の男子の親友が仲間から不満の声をあげられているのにも関わらず、

僕の心は苦しみうとはしてくれなかったのだ。

それはまるで彼への愛想が尽きてしまったかのように。
ふと考えて分かることがある。

上前がいなくなるのはこの上ない辛さであることだ。

自分の中で一番消えてはいけない親友が今消えようとしていることに、心が耐えかねているような気持さえた。

今の自分の本当の親友は実は・・・

自分でも気づかぬ間に、この3人に限定されていたのかもしれない。

そして一番の親友は・・・

「まあさ、今日は楽しみましょうよ!」

三日月が明るく振舞ってクラッカーをひいた。

パンッ

この夜、僕たち4人は何もかも忘れ、騒いだ。
食べて、飲んで、遊んで・・・・。

・・・明日上前は転校する。

僕に非は全くないのに、

三日月以外の水沢、都宮、上前は全員僕の前から離れてしまった。

僕はそのことにまだ気付いていなかったんだ……。

呪い天使 17 『離間』(後書き)

『次話から波乱の展開につ!』

呪い天使 18 『送信』（前書き）

上前さえもいなくなつた。

呪い天使 18 『送信』

呪い天使 18 『送信』

パーティーは終わり、上前は去っていった。

飛行機が僕達の上を飛び去り、だんだん小さくなっていくように離れていった。

くつきり残る飛行機雲を眺めていれば、雲は少しずつ消えていく。飛行機雲も消え、僕達は一人一人空港から自宅に帰った。

おおよそ一週間経った頃の僕たち。

水沢は席から動かず、都宮と三日月は仲良く普通に話し、僕と三日月はさらに仲良くなった。

都宮とも僕は仲よくなっていった。

そつえば鈴科も何の行動も見せない。

都宮と三日月も不思議に思っていたが同時に安心もしてくれていた。すべての事件は終わったんだな、と3人で笑い合った時さえあった。忙しい日々は終わりを告げて、近頃は何か抜けている毎日を過ごした。

何もないのが一番。

暇、退屈というのが最高なのだ。

そしてそれは安らぎであることを僕に教えてくれた。

放課後

三日月と僕はたった二人で帰っていた。

三日月がそつと僕に話かけてきた。

「水沢、もう見なくなっちゃったね。なんでだろうね？」
「分からない……。でも、あんまし未練ないのが不思議なんだよね……。。」

このとき僕の意味はすでに決められていた。
意識的はない。無意識的にそう決断していた。

「……。昔はあんなに仲良かったのにね……。。」

「……。今は……。三日月と仲良くなれたからいいよつ……。！
ははっ……。。」

「ありがと！私も都宮と仲良くなれてよかった！もちろん伊藤ともね！」

三日月がそつと笑いかける。

僕はその笑顔に笑顔で答えた。

僕はここであることをひらめいた。

確かに、この時間は最高のひとときだった。

「そうだつ！今度俺の大切にしてる物を見せるよ。」

「え？なにになにつ？」

「まだ言わないよつ」

無論それはオルゴールである。

過去誰にも見せたことがない。

母さんにもだ。

だが、今この帰り道に右を歩いている少女には見せられる。
むしろ見せたい。

そして分かち合いたい。

僕の今の言葉を素直に喜んでいる彼女の横顔が僕の右目に映った。

信号が見える。

信号が青く光る。

同時に僕は足を遅くした。

「今日の授業でさ・・・茂木先・・・」

街燈に照らされた僕たち二人は優しく笑う。

赤信号に引っかけかり、二人は近くのベンチに座る。

耐えない笑いだった。

互いに話題を出し、互いに笑い合った。

本当に尽きそうにない。

「じゃあね！明日、それをもってくるよっ！」

「うん！楽しみにしてるよ！じゃーねー！」

次の日

三日月に見せる日がやってきた。

そばには都宮もいた。

都宮を払おうとすると友人関係が崩れそうだし、

都宮には見せても大丈夫かなと思ったので、僕は二人にそれをだした。

「見て。これね、オルゴールなんだ。」

僕は全てを話した。

父さんとの思い出、楽しかったこと、辛かったことも全部語りつくした。

傍から見ればとても痛々しい少年だっただろう。

だが僕は恥ずかしいや照れくさい、といった感情さえでなかった。
満足までしている。

「きれいな音だね」

「うんうん。」

「すごいねえー！」

二人とも目を輝かせながらそれを見た。
耳を済ませ、何回もハンドルを回した。

いい雰囲気だった。針は毎秒すすんでいき、チャイムが鳴れば授業
の始まりだった。

「授業だ。号令。」

「・・・あ・・・トイレ行ってきます。」

都宮がお腹をかかえトイレに駆け込んだ。

バタツ・・・

教室のドアが閉まる

ガチャ・・・

トイレの入り口が開く

コンコン・・・ガチャ・・・

トイレの個室のドアが開く

ガチャ・・・シャツ・・・

鍵がかかる

・・・カチッ

都宮はポケットから何かを取り出した。

ピピピピ・・・ピピピ・・・

小さい画面に文字が書かれていく。
そつと都宮は笑った。

『送信』

都宮の親指が真ん中のボタンに触れた。

・
・
・

「はい、授業だ。これは微分積分といたしましたね。今日はそこから・
・
」

クラス中がノートを取り始める。
みんな集中している。

僕も、ノートを取りはじめた。
僕は黒板しか見なかった。

鈴科の机の中がかるく光った。

一番後ろの席で、鈴科は画面を覗く。

鈴科の口元がゆがむ。

鈴科は画面を閉じ、ノートを取り始めた。

『伊藤の宝物のオルゴール、壊せば？次体育だし（、
、）ケラケ
ラ』

呪い天使 18 『送信』（後書き）

都宮と鈴科に関係があつた・・・！？

呪い天使 19 『合流』（前書き）

鈴科と都宮が組んでいた理由は・・・

呪い天使 19 『合流』

呪い天使19 『合流』

『伊藤の宝物のオルゴール、壊せば？次体育だし（、（ケラケ
ラ』

都宮は鈴科にメールを打った。

手を石鹸で洗いながら都宮はふと何日か前のことを思い出していた。

・
・
・
・

「この写真を撮ったのは伊藤本人だ。俺と伊藤はもともと組んでいたんだよ」

都宮はこの言葉で失望した。

怒りの矛先は伊藤に向かっていた。

もちろん、組んでいた鈴科に対しても同じだった。

日にちは覚えていないがその日からすぐのことであった。
鈴科が都宮に話し掛ける。

「都宮……。お前、水沢に言ったんだって？デタラメを。」

デタラメとは、もちろん『伊藤が水沢を嫌っている』ということ。鈴科には全てを見抜かれていた。

都宮は後ろを向こうとしたが足が動いてくれず、低く小さな声を出しうるたえた。

鈴科はそのまま話を続ける。

都宮は鈴科の口元しか見ることが出来なかった。

「まあ一応礼を言おう。伊藤から人が離れていくんだからな。」

その一言で都宮が何かに気付いた。はっと目を開き、動かなかった口を開かせた。

「じゃあ、あの写真を撮ったのが伊藤ってのは嘘だったの？私と伊藤を離すために……………」

「いや違う。まあ信じられないと思うが聞け。」

「誰が信じるものか。」

都宮がむっとして睨みつけた。

そして背を向けて教室に戻ろうとした。

もちろん向うべきところは伊藤のもと、水沢のもと。

許してもらえないだろうが、嫌われるかもしれないが謝ろうと決意したのだ。

しかし鈴科は強引に都宮の両肩をつかんだ。

かすかに聞こえる叫び声もうるさい廊下では響かなかった。

鈴科が長々と都宮に話す。

「そもそも何で伊藤が俺と組んだかだ。というか仲はそこそ良かったか

ったんだ。

二年に進級したその日、伊藤は隣クラスの三日月に一目惚れをした。

だが全然三日月と話せない伊藤は生徒会選挙の日、俺に相談をしたんだ。

どんな手を使ってでも彼女と仲良くするキツカケを作ってくれ、と。

最初は俺だって友人の言ったことだ。それくらい承諾した。

そのキツカケが狂言イジメをし、上前の犯行を三日月が目撃する、というものだった。

そして要望通り伊藤は三日月を手に入れた。

そこでだ。邪魔になった人間がたった一人だけいたんだ。

都宮。それがお前だ。

いつもまとわりつくお前を自分の目の前から消そうとした。

そこであいつは俺にこういった。

『都宮が何か悪いことをしているのを証拠に残して先生に渡してくれ！』

俺はその通りにしてやった。

だが俺はその写真に伊藤の暴力団と歩く姿のオマケを付けてやった。

そして伊藤は生徒会長の権限を失ったのさ。

その理由は簡単だ。

同時に伊藤は俺のことまで嫌い始めたんだよ。

三日月だけいいというのがあいつの思考だろう。

俺はそれに腹が立ち、伊藤を嫌い始め、狂言イジメを本物のイジメに変えようと決意した。」

「・・・・・・・・・・」

都宮は頭の中で考えた。

「じゃあ・・・なんで今私に話しかけたのよ・・・？」

「そこだ。一緒によ、伊藤をつぶさねえか？」

まったく想像もしていなかった。

鈴科とはずっと敵の関係のままだと思ってた。

「由奈ちゃんもはめるってこと？それは嫌よ。」

「図々しい奴だな。水沢はどうでもよかったのかよ？」

「だからなによ。」

「水沢に全ての事を言えば終わりだ。お前は独りになる。」

「・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・」

「伊藤は結局お前を嫌ったんだぞ？」

「伊藤は本当に憎いよ……。でも由奈ちゃんが・・・・・・・・。」

「その三日月が、親友伊藤をお前から奪った。」

「・・・・・・・・」

「三日月も、きつとおまえのことが邪魔だと思ってるよ。もう既に付き合ってるんじゃないか？」

鈴科の言葉にはどこか説得力があった。

不確かな情報も、確かなものに聞こえてくる。

・・・三日月は嫌なやつかもしれない・・・。

「今、伊藤と鈴科の状況はどうなの？」

「俺は最近伊藤に何もしていないが、伊藤も気づき始めたのだろう。いじめられると。」

「写真のこともあって今頃震えてるでしょうね……。で、今度またいじめを再開するわけね。」

「そういつことだ。どうだ？」

都宮はにやりと笑いながらうなづいた。

鈴科がはじめて都宮の素顔を見た人となった。

そして都宮は鈴科と裏で会うようにしていた。

全ては伊藤をつぶすため。

もちろん鈴科が都宮に告げた狂言イジメなどは全て嘘だとも知らずに。

人はどこまで人を信じることができるのだろうか？

表では上前とパーティーをした。

三日月とも仲良い素振りを見せていた。

オルゴールとかも見た。

実は都宮も鈴科も考えてみれば、もう何の被害もない。

生徒会では受かった。

退学処分も下されなかった。

しかし鈴科は屈辱をくらった。

都宮は伊藤に嫌われ、騙されていると思っている。体育の時間が始まり、鈴科以外の全員が外に出た。

呪い天使 20 『憤慨』（前書き）

オルゴールに忍び寄る鈴科の手・・・！

呪い天使 20 『憤慨』

呪い天使 20 『憤慨』

『伊藤の宝物のオルゴール、壊せば？次体育だし（、（ケラケラ』

体育の時間が始まり、鈴科以外の全員が外に出た。

鈴科はあたりを見回した。

廊下も見渡した。

あと二分で授業が始まる。

奇麗に並んだ机の列。

鈴科はゆっくりと伊藤の机の方に向かっていった。

コツコツと音が響き渡る。

伊藤の机の前に立った鈴科はイスを下げ、机の中を見た。目を見開き、ノートを取り出し、ガツガツと調べだした。

．．．．．あつた．．．．．。

鈴科はその小さい箱のようなものを取り出した。

タツ、タツ、タツ．．．．．

それを見つめて口元をにやかせていた鈴科は近づいてくる足音に気付いていなかったようだ。

鈴科が伊藤のオルゴールを下に投げつける。
と同時にドアが開く。

ガッシャンツツツ!!!

ガッ——ガララララ——

・・・

ドアを開けた人間・・・それが僕だった。

時は止まった。

しばらくのあいだ沈黙が続く。

チャイムは鳴り生徒が走る音が上から聞こえるが、授業が始まったのか、音はすぐに消えていった。

中身の取れたオルゴールが、さらに僕らを沈黙の世界へと包み込んだ。

鈴科が後ろを向こうとした。

そして、ドアに向かって走り出す。

そのとき僕の口は初めて開かれる。

「おいつつつ・・・・・・」

鈴科は返事することなく、消えていった。
やがてその音もさえも消えていった。
教室はカーテンの影で暗くなっていた。
僕はふいに視線を下げ、近寄った。

オルゴールは、中身と箱が分かれていた。
本体と父さんとの写真が貼ってある蓋も分かれていた。
ハンドルと音を出す金属の部分もはずれていた。

自然と目から出る何かが口に入る。
直そうとしても、とても自分の手では直せそうになかった。
修理できるだろうか……。

直るかどうか、不安になっていった。
ゆらいでいる心臓と頭が僕を無の空間に投げ飛ばした。

しばらくして、ゆっくり立ちがった。
体操着をきたまま、僕は安定しないその目を必死に拭きながら校門
を出て行った。

いつも使わない体力をここで使った。
偶然にも近くに修理屋があった記憶がある。
そこに、早く行きたい。
その一心で僕は走りつづけた。

修理屋は記憶通りあった。
僕は少ないお金をすてそこに費やすことにした。
「直らないことはないが分からない」……とあいまいなことを言
わた。

だけでもその言葉は少し僕を安心にさせた。
素人から見れば

「もう直らない」の一言以外考えられないような壊れようだったからだ。

・・・鈴科・・・・・・・・

そして店員からは

「いつになるか分からない」と言われ、僕は店を出た。

教室では三日月や都宮が待っていた。

どうしたの？と言われるが 別に、としか答えられなかった。もちろん二人の表情は僕には分からなかった。

いつのまにか放課後になっていた。

都宮は先に帰ったのか、僕と三日月は二人で帰っていた。

「伊藤・・・どうしたの・・・？」

「別に・・・」

「・・・嘘・・・つかないで・・・何かあったんでしょ・・・」

僕はとうとうその重い口を開けた。

三日月はとても僕の気持ちを分かってくれた。

「・・・・・・・・ひどい・・・・・・・・ひどすぎるよ・・・・・・・・」

「

次第に僕は口数が増えていった。

三日月が励ましてくれたおかげで、しゃべれるようになってきた。

「・・・・・・・・最低だよ・・・・・・・・あいつ・・・・・・・・もしもオルゴール直らなかつたら・・・」

「・・・人間として最低だよ・・・。あんなやつ・・・呪われればいいのに・・・」

「いじめっ子はどうして損をしないんだろうね・・・。」

「・・・待つて・・・。そうよ・・・。そうよ・・・。」

「ん？」

「鈴科・・・。そもそも何でオルゴールのこと知ってるの？」

「・・・。たしかにあのとき3人でしか見てなかったし・・・。」

「しかも鈴科本人はいなかったよ・・・？ちゃんと確認したもん・・・。」

「なんで知ってるんだろ・・・。オルゴールのこと・・・。」

「分からない・・・。あつ・・・じゃあね。」

いつのまにか信号をわたり、僕と三日月は道を変えた。

僕は、また下を向いてしまった。

三日月は、その頃ひとりですつと考えていた。

たくさんのありとあらゆる仮説を立てていった。

当然、都宮とは親友だと思っていた。

仮説をたてたものの全く疑っていなかった。

オレンジ色に染まる景色の奥には、ある二人が映し出された。

三日月は目を疑った。

頭の中が真っ白になった。

目が震え、手には冷汗まででてきた。

目をつぶり、現実を受け入れようとしたが次は足が震えてきた。どうしようもない恐怖に襲われ、三日月は涙を流し始めた。

三日月は曲がり角に隠れてこっそり顔を出して見続けた。

笑い合う二人の顔があった。

話の内容も聞き取れた。

それが三日月のある仮説を確実なものにしていった。

都宮と鈴科が、オルゴールについて、笑いながら話していた。

呪い天使 20 『憤慨』（後書き）

三日月が見たものは裏切りだった

呪い天使 21 『計画』 (前書き)

都宮は友達ではなかった・・・

呪い天使 21 『計画』

呪い天使21 『計画』

三日月は曲がり角に隠れながら足を震わせていた。

夕日がバックとなりオレンジ色に輝きながらゆらいでいる視野の奥には、

都宮と鈴科が、オルゴールについて、笑いながら話していたからだ。

都宮と鈴科はしばらくして手を振って離れた。

鈴科は反対方向に行き、都宮は三日月の方に近づいていてきた。

三日月はとつさに曲がり角の奥へ走った。

影が近付いてくるのが分かった三日月は後ろを向いて目をつぶった。コツコツと靴が地面を蹴る音が大きくなり、そして小さくなっていった。

聴覚のみで状況判断する三日月の耳はその音を必死にとらえていた。数分後、その音は消えていった。

三日月の足は崩れ落ち、その場で倒れこむかのように座り込んだ。

三日月の目はどこも向いていなかった。

ふと下を向き、ほどけた靴の紐を直した後、家に帰った。

次の日

僕は何も知らずに学校に来た。

僕と三日月はそれぞれの教室に入り、三日月はバックを置いて僕の

教室に来た。

三日月は明るく、ずっと笑っていた。

そして傍から見ればいつもと同じ光景が僕の机に広がっていた。僕はいつもと違うことに気付いている。

三日月は笑い続けている。

笑顔なのにちつとも笑えていないのが判断できるほどだった。どこかひきつっている。

だけど僕はあえてその点を突っ込まずに三日月の笑いに笑顔で答えるしかなかったが、

三日月はその理由を昼休みに自ら打ち明けてくれた。

「昨日、見ちゃったんだよ。」

体育の時間足をひねり、保健室でのんびりしていた僕の表情は凍て付いた。

時計の針さえも止まる気がした。

視野は三日月を中心に広がっているが目に映ったのは窓の奥にいるカラスくらいだっただろう。

電気もつかず、誰もいないその部屋はどこか冷えていて、僕は一番奥のベッドに靴を履いたまま寝そべった。

ずっと、ひっそりと生えた木しか映さない窓に現るカラスのことばかり気にかけるようになっていた。

時計の針が一周し、チャイムが鳴った。

相変わらず誰も居ない部屋だったが、三日月が保健室に来てくれた。

「伊藤……。こんなの……。ひどすぎだよ……」

オルゴールまで壊して……。鈴科に情報提供してただなんて……

・
私・・・騙されてたんだ・・・。。影で二人して笑ってたんだ・・・。
ずっと友達だと思ってたのにさ・・・
都宮・・・私のこと嫌ってたんだ・・・
鈴科が何かしたのよ・・・。。ひどすぎるよ・・・。。。。。。」

三日月がたくさん話し掛けてくるが、僕は何の反応もしなかった。

心臓が激しく鼓動してくる。

頭に笑っている鈴科と都宮の顔がよぎる。

その映像を叩き崩したがまた奴らの顔が浮かんでくる。

それをまた消し潰す。

しかしまた現われてくる。

髪の毛をかきむしりながら歯をギシギシならしたが、あいつらはまた現われてくる。

目線の向こうには三日月がいるはずなのに、僕の目には三日月はまったく映っていないかった。

次の一言までは。

次の一言までは僕は何も見えていなかった。

しかし、次のたった一言で僕の目に三日月が映ることになる。

「．．．．．私たちも．．．．．仕返しするべきだよ．．．．．」

僕の目は青色に光り、三日月の手を握った。

．．．カラスの声が近くで聞こえた。

呪い天使 22 『有言』（前書き）

三日月の一言から全ては始まる・・・

呪い天使 22 『有言』

呪い天使 22 『有言』

僕は都宮にも離れられてしまった。

鈴科に嫌われ、知らない間に水沢は僕の視野から消えていき、

上前も転校していったうえに、都宮は鈴科と仲間になっていた。

しかし保健室で寝ている僕に三日月が言った言葉は僕を目覚めさせてくれた。

「……私たちも………仕返すべきだよ………」
「」

僕の目は青色に光り、三日月の手を握った。

僕と三日月はその放課後、ひとつのノートを古びた文房具屋さんで購入した。

そしてその帰りにファーストフード店に寄り、ジュースのしをそれぞれ買々と二階の窓際の席に腰をおろした。

そして購入したノートをビニール袋から取り出した。
ペンでキュキュツと表紙に文字を書く。

『計画実行ノート』

そして真新しさを感じさせる一枚目が目に映る。
ペンを持った。

消しゴムは用意していない。

つまり普段使うシャープペンシルではなく、ボールペンだ。

一つ一つ項目を考えていく。

『都宮』

部屋に帰った僕はベッドについていた。

そして無造作に机をあさりだした。

・・・そういえば今はないんだった。

オルゴールの音色にこの心を落ち着かせようとしたがそれは不可能なこと。

父との写真も慌てていたせいか修理屋さんに預けたままだった。

横を向いた僕の目に映ったそのノートをとりだして顔の前に持ってきた。

そしてふと思い出したのは生徒会長のことだった。

・・・父に会えない。

あの後、実は副会長にはなれていた。

人員不足だ。

生徒は生徒会に興味を持たないどころか軽蔑の視線さえ送っている。
僕が立候補した大きな理由の中には父との再会という、世間的には不純な理由もあることに違いはないが、

生徒会で経験を得られるということは紛れもない事実だった。

一応調べていた。

会長になることを想定して事前から調べていたのだ。

生徒会室、前回の会長の仕事など。

結果論全て無駄になったが、もしもなれていたら僕は学校を揺るがせただろう。

自信はあった。

ヤル気があったからだ。

そして、人を仕切り、行事を成功させたときの気持ちの良さをも知っているからだ。

もちろん生徒全員が一つになって喜ぶあの顔も。

・・・それが全て消えたのだ。

父にも会えないかもしれないし、仕事の達成感も得られない。

やはりこのことは僕自身を大きく動かしていた。

父に会いたかったのに。

あのときからずっとこの日を思い続けていたのに。

一次審査で勝てると思ったのに。

交友勉強生徒会、全てうまくいくと思っていたのに。

鈴科の行動、すべてが僕の道を閉ざしてくれたのだ。

思えば即答だった。

三日月のあの提案から。

すぐに手を握ってしまった。

そんな手を僕はそっと見た。

その手がどれだけ黒いモノを漂わせているかも知らずに、まだ見続けた。

もちろん視えていない。

心が手を視ようとしていないからだ。

僕が三日月から預かっていたそのノートはすでに真ん中あたりが薄

く汚れていた。

これは手と汗の汚れだろうが気味が悪く感じていた。

次の日の朝

また始まる、僕の席での出来事。

都宮と三日月。そして僕。

「ねえねえ、また今日もどつかで食べにいかない？」

都宮が切り出した。

もちろんこの人間は何も知っていない。

僕と三日月は互いに目と目を合わせてみた。

「ごめん・・・今日はお金がないんだ・・・。」

「あ・・・私もお小遣い止められちゃって・・・。」

いつもはそれくらい持っている。

僕の場合は小遣いなど少ない・・・いや、むしろ無いに等しいと言った方が正しいであろう。

だがお金のやりくりをしている僕にとってお金が無いというのはあり得ない。

そして三日月は親にお小遣いを止められるほど愚かな真似はしない。

そう・・・

「お金がない」・・・これは嘘だ。

「じゃあ・・・今日は私が払うよ！」

都宮はお金持ちである。

以前開かれた上前のお別れパーティーに使った費用は全て彼女が払

ったほどだ。

しかも親は社長。

そんな都宮は以前からジュースなりなんたり奢ってくれていることがよくあった。

「ありがとう!」

僕と都宮は笑いあった。

お金が浮くから喜んでいのではない。

昨日買ったノートに赤いペンで“×マーク”がつけられるから喜べるのだ。

『都宮――』

これに『×マーク』をつけるのだ。

「じゃあ今日はサーティーワンいきたいかも」

「いいよ!」

作戦通り。

また目が合った。

ふと空を見れば重くて今にも落ちてきそうな曇が空を覆い尽くしている。

そのくせに雨は降りそうではない、微妙な天気だ。

これではサーティーワン行く気にならないが……というかむしろ帰りたい。

だけでも……行こう……。

都宮がこうもあっさりと僕たちの言うことを聞き入れることは知っ

ていた。

三日月があのだ陽の空で聞いた鈴科と都宮の言葉がそれを教えてくれたのだ。

...

夕陽を背景に、わずかに感じ取れる風が地面に落ちている葉っぱを浮かせている。

そんな中、いつもと変わらず鈴科は冷静かつ冷徹な表情をしていて、傍にいる都宮も同様だった。

都宮のこの表情は見たこともない。

【ははっ！それでこれからどうするの？オルゴール壊して気持ちいいんだけど！】

【もっと・・・もっともっとだ・・・。こんなのは序章に過ぎない・・・というくらいに。】

【冷徹ね】

【まあいいじゃねえかよ。・・・最終的には三日月と伊藤を離したい】

【難しいと思うよ？】

【三日月の物もなくしたり壊したりすればいい。そうすれば三日月だって暗くなっていく。

そして・・・お前にやってほしいことはだな・・・】

【・・・何？】

【いつも通りあいつらと接してほしい。そしてあいつらが無くしたくないものを探れ。】

【それを壊したりするわけね？】

【そうだ。まあ今日はお疲れ様だ。】

...

そうして僕たちはサードティーンに向かったのだ。

呪い天使 23 『実行』（前書き）

僕たちの行動は・・・

呪い天使 23 『実行』

呪い天使 23 『実行』

僕たちは予定通りにサーティーワンに行った。
雲行きが怪しくなってきた。

店内に入るまでは雨は感じさせない空なのに、今ここで窓越しに見る空は雨を抱えているようだった。

アイスの味なんて何でもいい。

僕たちは調子に乗って

「おまかせ」を注文した。

シュガーコーンが好きなのでそれだけは選択したくせに。
そして

「悪いねえ」の一言を都宮に告げて先に席をとっていたのだ。
空を見上げた後は三日月を見つめた。

そして見つめ合っていた。

少し口元を浮かせながら。

都宮が来るのを心待ちにしていた。

・・・来た。

「ごめーん、待たせたー？」

「いや、全然！てかありがとうね！」

「アイスくらい食べてればよかったのに・・・。」

「あっ・・・本当だっ！忘れてたよ」

・・・棒読みになっていたかなくなっていなかったか不安だっただが三

日月の顔を見て安心した。

今、別にアイスを食べたいわけではなかったのだから食べてないだけなのだから。

「あつ！見てみてー！！！」

三日月がとっさに切りだしてくる。

ピンク色でジャラジャラとキーホルダーが付いている都宮のバックとは対照的に、

あまりキーホルダーが付いていなく、学校指定されてたような革の黒いバックからファイルを取り出した。
漫画である。

「これさー。これ今度、応募しようと思っているの。」

素人から見ても上手に見えた。

コマの位置から人の骨格や角度、展開や描写・・・もちろん内容まですべて完璧に思えたほどだ。

別に友達だからベタ褒めしているわけではない。

今まで絵の上手い人を幾多と見てきたが、三日月は別格だった。
間違いない将来の漫画家にはなれるだろうと思った。

「・・・面白いよ！由奈つつつ！」

都宮が叫び出した。

でも心の叫びは違う意味を持っていただろう。

鈴科に届けるのだ。

この、僕らにとって大切なものを――

――無くせばいいんだろう？

「これさあ、まだちょっと未完成でさ。明日ちょっといじってその日に投稿しようと思うの!」

エサだ。

三日月は無邪気に笑って見せた。

これをわざと机に置いて鈴科にチャンスを与えるのだ。

そうすれば都宮は私たちに喰いついてくる。

そして『都宮——』に赤の“×マーク”をつけてやるのだ。

アイスが次第に減っていき、残りのアイスはほとんど溶けているのでスプーンですくうようにして食べた。

いつも都宮に奢ってもらってるときは身が小さくなる思いでそれを口にしていたが、今回は違う。

僕たちは満足気に腹を満たした。

「ありがとう!」

「どーも!」

「本当に助かったよぉー!」

「いえいえ! お役に立てて光栄です!」

——僕たちにとってこの光景は少なくとも友人関係に繕っていたつもりだが……

この光景は周りから見て、どう思われたのだろうか?—

店を出ると僕たちは頭をバックで覆いながら走って帰って行った。

そして・・・

都宮と僕たちの時は立っていく。

僕たちの手の中で。

それはビー玉のごとく。

都宮も僕たちも、互いに“自分が手のひら”で“相手がビー玉”と認識している日が続く。

サーティーワンの次の日だった。

まさに予想通りに都宮の漫画に落書きやら足跡やら付けられている。

もちろん・・・それはエサにしかすぎない。

実はそれはコピーであり、その上からホワイトやベタをしたので、鈴科はそのダミーに気付いていない。

もちろん、よく見ればすぐに分かる。

だけでも人目を気にしながら行動する鈴科にとってそんな余裕などないに等しい。

だが僕たちも事を着々と進めていった。

まずは簡単だ。

都宮の物を隠したりした。

バックの中の水筒を零して教科書を台無しにしてやった。

——当然お金のある都宮は一日でそれを入れ替えるという荒業を僕たちに見せてくれた。

それでも水筒でちよくちよくと教科書を消していく。

小さいけど。

例え今僕たちがやっていることが小さいことだろうと・・・あることわざのように、これが続けば大ダメージへとつながる。

もちろん都宮の経済力は限度を知らないが、交友費やいつものホスト代、そして教科書代――。

僕たちも次第に交友費にお金を使わせていく。

全て都宮の奢りで焼き肉を食べたり、ゲーセンで一日を費やしたり・・・。

そうしてその日々の最後には必ずある一言を付け足す。

『ごめんね』

これで都宮は安心したのだろうか？

増え続ける僕たちの要求に応え続けていった。

もちろん僕たちは犠牲を惜しまなかった。

情報提供に勤しむのだ。

僕たちが気に入っているノート、落書き、小物、アクセサリ・・・など。

全て僕たちがそのために作ったものだとも知らずに。

そんな中で僕たちは都宮と過した。

――・・・だから・・・これは・・・本物の
関係に見えていただろうか――

ある日のこと。

ごそごそ・・・

授業が終わり、汗で濡れた体操着を着ている僕と三日月は誰もいない教室にいた。

茂木先生が出張のため、体育の時間の終わりに帰りのホームルームを済ませたのでもう帰れるこの状況で、

僕たちは帰ろうとせずにある机の中を何回もチェックしていた。

ドアの前で伊藤が念入りに外を見渡す。

伊藤の合図で三日月は机から離れた。

大丈夫、するべきことはもうした。

都宮だ。

「時雨！見てー！今度こそ鈴科にやられないようにするよっ！マンガ書き直した！」

明日月刊誌に出すよっ！うん！」

「やっぱり由奈ちゃん上手いよ！漫画家だよ！これっ！」

「あっ・・・今日もどこかにいかない・・・？」

いつもの即答が来ない。

・・・きたか・・・？

「ごめん・・・実は・・・お金がね・・・使い過ぎて・・・」

表情をこらえるのに全神経を使った。

待ちに待ったその言葉・・・

「お父さんに・・・これ以上は使っなって・・・お小遣い止められちゃって・・・」

止められた程度か・・・

だが——いつも捨てるようにお金を使っていたコイツにとってこれは大きな打撃になったのではないだろうか。
もう・・・隠す必要も無い。

「はははつつつ！ははっ！きゃははっ！」

しばらく僕たちの笑い声は絶えることを知らなかった。

都宮の顔を潤っている眼で見たが、最初はキョトンとしていたが・

・
もう・・・気づいただろう・・・。

自分だって最初から僕たちのことを友達として見ていなかったのだから、すぐに気づけたのだろう。
激しい憎悪が顔に表れている。

「じゃあ、お別れだ！今までありがとな。」

お金と遊べた。

そして落とすべき人物を、今落とせたのだ。
至福の幸せを感じていた。

「金を返せ・・・！教科書・・・ふざけるなよっ・・・！」

もう彼女は負け犬だった。
僕らはそれを背に笑いながら教室を出て行った。

呪い天使 23 『実行』（後書き）

満足げに僕たちは出て行った。

呪い天使 24 『信否』（前書き）

まずは都宮に仕返すことができた・・・

呪い天使 24 『信否』

呪い天使24 『信否』

僕と三日月は都宮を突き落とすため、都宮の金を利用しようとした。
ある日だった。

「お父さんに……これ以上は使っなくなって……お小遣い止められちゃって……」

それは僕たちが生唾を飲んで待ち焦がれていた言葉だった。
笑いが絶えられなくなった。

隠す必要もなくなった僕たちはその結果に満足して甲高く笑った。
「金を返せ」と吠え続ける都宮を背に、僕らは笑いながら教室を出て行った。

「長い付き合いだったね。」

「まあそこそこ楽しめたんじゃない？」

「ね。いつもは全然あんなにお金つかえないもんね。」

「そう……。元をたどれば都宮が悪いんだ。」

「うんうん。気にすること無いよね。都宮が自分で払ったんだから。」

「うん。……そして……鈴科も……」

「もう、準備はできてるんでしょ？」

「ああ。できてる。」

すでに外に出ていた。ふとあちこちで下校する生徒が見える。

都宮が今どうしてるのかを考えると心がウズウズして歩きがスキップになっていた。

都宮と僕はその話ばかりした。

僕と都宮は昔の暖かな笑いから、黒い笑いになっていた。

それを友情と確かめ合ってしまった。

最初に三日月と一緒に帰ったときの笑いと今の笑いの変化に僕たちは知る余地もなく、笑うことをやめなかった。

外でバックから表紙に『計画実行ノート』と書かれているノートを一冊出した。

手には赤いペン。

とうとうこの日がやってきた。

僕と三日月はノートを見た後向き合って笑った。

わざとらしくペンを二人で持ってみた。

馬鹿らしい行動だったが僕たちは今有頂点にいるからそんなことは気にしない。

『都宮のお金を利用して遊び、さらに都宮のお金を無くす』

×

そろそろ辺りは薄っすら暗くなってきた。

空を見上げれば電柱に乗っている鳥が影となって見える。

ハトなのかスズメなのかそれともカラスなのか、そんなのはどうでもよかった。

でも目に映った鳥を見つめてしばらく立ち尽くしていた。

それらが飛び立つまで僕たちはそこにいた。

そして手元にある時計を確認した後、向いていた方向と真逆の方向に歩き出した。

学校が見える。

上履きしか見えない下駄箱から靴を取り出した。

そしてまた二人で歩き出した。

誰もいない、教室の方へ。

都宮はというと、学校の教室の中にいた。

そこにもう一人、鈴科がいた。

「鈴科つつつ……やられた……くそつつつ！」

「……あいつらも、動き出してたか。」

「何……それ？」

「まあ……何となくわかってたんだよ。じゃあ、いつも通りネタとかあるか？」

「ええ……。この漫画……。これは賞とりそうな力作だよ……」

「今さら罪悪感に襲われたか？」

「まさか。破り甲斐がありそうだね……。って。」

「じゃあ先生いるか見張っててくれ。」

「分かった。」

都宮が駆け足で廊下に出て行った。

恐る恐る都宮は階段を調べにきた。

……— つつつつつ！！！！！！

僕たちが都宮を捕まえた。

叫ぼつとするその口を押さえつけ、都宮が咳をしたところで離してやった。

「ふざけるなよ・・・伊藤・・・」

「ふざけてるのはどっちだ・・・？」

「何よ・・・ふざけるなっつっ！！！！」

三日月が都宮の口を再度ふさいだ。

そして伊藤が都宮の目の前にこぶしを作って見せた。

そしてごめんね、と言言って笑うと、都宮は大きく開いた目を戻し、動きを止めた。

「予想通りに事がすすむな・・・。」

「うん・・・。あと・・・ちよつと・・・。」

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

どこからか音が聞こえてくる。

反対側の階段だ。

今の時間、いるのはおそらく僕と三日月と都宮と鈴科だけ・・・。

鈴科はおそらくその音は都宮だと思うだろう。

鈴科は今もずっと三日月の机をあさっているだろう。

あと少し・・・あと少し・・・。

コツ・・・コツ・・・コツ・・・

バサバサと机をあさる鈴科の目の前に、茂木先生がやって来た。

たった今、会議が終了したのだ。

鈴科は驚きを隠せずにいた。

茂木先生は落ち着いた威厳のある顔に変えていたが怒りを隠しきれないでいた。

そんな光景を僕たちは階段の影から見張っていた。

都宮は、目線だけ向けていて、まぶたは重くのしかかっていた。

「鈴科君・・・・・・・・。まさか・・・・いや・・・・やはり君だったとは・・・・」

・・・・信じられない・・・・。騙していたのか・・・・
伊藤君のこと・・・・全て・・・・。」「

「いえ、違いますよ、先生。三日月さんに悪戯されたと噂を聞いたので。」

「なんだと？」

「今日風の噂で聞いたんです。三日月さんが僕の私物を取ってるという・・・・」

「まさか・・・・。何が無いんだね？」

「数学2のノートです。」

「じゃあ私が三日月さんの机を調べる。君は自分の机をもう一度・・・・」

無論デタラメだ。

それに反応した三日月の顔が引きつっているのが分かった。

鈴科は自分の机を調べるふりをした。

茂木先生は念入りに三日月の机を探していたが、何も見つからなかった。

無論、鈴科の数学2のノートは無ければ、三日月の漫画も見つからなかった。

バダバダッ

鈴科が手を滑らせ奇麗に整頓された机の中身を全て落としてしまった。

茂木先生はすかさず鈴科に寄り添って机に戻そうとした。

膝を床につけながらゴミのように重なるノートを拾い上げた。手際よくノートの大きさを揃え一冊ずつノートを手に重ねた。手を伸ばしながらノートを一冊手に持ち上げたときだった。

茂木先生は手にあるノートの山を捨てた。

ノートはページがめくれて羽ばたきながら落ちていった。

一冊一冊が床にたたきつけられ、ノートはさらに散らかった。

茂木先生はすぐにノートの下にあったものに手を伸ばす。

鈴科の湿った手と重なり合いそうになる。

それを先に取った茂木先生は、鈴科を睨みつけた。

「……………これは三日月さんの漫画ですよ……………」

鈴科の机の中に自分がまだ盗ってないものが入っているからだ。

鈴科は言葉を失った。

確かに先生が来る前、この漫画を三日月の机から探し出そうとしていたはずだ。

だがそれは三日月の机ではなく自分の机に入っている。

訳が分からなかった。

鈴科の口はかすかに動いていたが音となって伝わらなかった。

やっとでる声も、内容は伝わらないほどであった。

最後の最後に出た『違います』は全く意味の無いものだった。

「…………生徒会の君が…………やはり伊藤君を…………最初の上履きも…………全部…………君が……………」

「違うんだっ、それは違うっつつ俺じゃないっつつ！」

「……………調子に乗るなよ、鈴科。これは犯罪だ。」

「違っつ！これは伊藤の罠だっ！騙されるんじゃないよ。」

「…………調子に乗るなといったのだが聞こえなかったのか？君を信

用していた我々が愚かだった。今日校長に告げよう。」
「ふざけるなっ！なんで信じねーんだよ！クソがつ！」

茂木先生はその太い腕で鈴科の首元を掴んだ。

鈴科は必死に目で抵抗した。

茂木先生の手が鈴科を突き飛ばした。

大きな音とともに鈴科は倒れこみ、教室に響き渡る。

「君はそう言う人だったんだ……。……。見損なった。」

「……。信じろよ……。ざけんじゃねえよ……。」

茂木先生は僕たちの目の前を通り過ぎ、職員室に戻った。

相変わらずどこを見てるのかわからない都宮は、その場に座り込んだ。

しばらく僕たちはその場に立ち尽くしたが、物音一つとせず、廊下の光は消えていった。

呪い天使 24 『信否』（後書き）

『評価感想お待ちしております。これからも引き続きお楽しみください』
い

呪い天使 25 『同然』（前書き）

自分に非がないのに責められる気分はどうだ？

呪い天使 25 『同然』

呪い天使25 『同然』

鈴科の机の中には三日月の漫画があった。

確かにこの漫画を先生が来る前に盗もうと企んでいたものに違いがないが、鈴科には身の覚えのないもの。

それを茂木先生に見られた鈴科は誤解を解こうと必死になっていた。

もちろんそれをまったく茂木先生は聞き入れようとしない。

体育が終わった後、僕たちが三日月の漫画を鈴科の机に入れて置いたのだ。

もちろん都宮に見せたあの漫画は、ただの情報のネタであってそれは今手元にある。

だから三日月の教室の机には漫画なんて入っていない。

鈴科を陥れるためにだけに描かれた漫画が鈴科の机に入ってるだけ。

その漫画を帰りに郵便局に出した。

夢が叶うことを、心から臨んだ。

『悪に染まる天使』

そんな題名の少女漫画を出した。

次の日の放課後だった。

鈴科は授業に参加していたものの、ずっと下を向いていた。

生徒会室にも行かず、仕事に手をつけなかった。

噂はクラス中に広がり、いつのまにか鈴科のまわりに人は消えてい

た。

都宮の机には誰もいなかった。

都宮さえもない。

下駄箱を見たが、来ている様子がなかった。

そんな様子を、僕と三日月は心から喜んでいた。

何度かハイタッチを試してみたりした。

今日も笑いが耐えない。

お楽しみはここからで、やっぱりいつもの放課後だった。

下駄箱で鈴科が青ざめる。

偶然そこを通りかかる生徒は驚いた。

全く一緒であつた。

全く一緒の光景だった。

鈴科の靴は履けなくらいボロボロになっていて、そばにはあまり見ないようなナイフが置いてあつたからだ。

職員室に走り出す生徒が現われたが、鈴科は止めるに止められていなかった。

啞然として下駄箱の前で立ち尽くす鈴科の口が静止しているのが分かった。

僕たちは野次馬に混ざって一番後ろの列に並んで、それを観覧した。

口元をつりあげて、僕と三日月は手をつないだ。

二人とも汗をかいていたが、それを感じさせなかった。

先生が小走りでくる。

「帰りなさい、帰りなさい。」

定番の言葉で生徒を帰らそうとする。

僕たちも、すんなり帰ることができた。

でも僕たちは帰った振りをして、植木鉢の後ろでひっそり観覧することになった。

激しい心臓の鼓動が止まらない。

「先生つ、違うんです。」

鈴科のようやくでた一言であつた。
もちろん相手にされない。

「どうせ君が・・・自作自演したんだろ？昨日の後にまたこれだ。信じられるはずが無い。」

この学校は自作自演が好きだなあ。

「全部、違うんです・・・昨日も・・・今日の靴も・・・」

「ふざけるな。そうやって伊藤を苦しめたのか。生徒会長を変えなくてはな。」

「そんな・・・違うんです・・・本当に・・・違うんです・・・」

さすがに鈴科は泣くにまでいたらなかった。

だが当初の強い声と権限、それらを微塵も感じさせてくれないそのしゃべりは、

鈴科を別人じゃないかと疑わせるほどのものであつた。

「違うんです」と繰り返しつつづけても先生は疑い続ける。

鈴科はとうとう逃げ出した。

また先生が

「待て」という。

そのあと先生はボロボロになった靴を軍手をつけた手で持ち、職員室に運んだ。

僕たちも同時に帰った。

大丈夫、ちゃんと指紋はふきとったから。

僕は三日月の家にお邪魔した。

「初めてだね……。」

「ああ、うん。」

部屋にはテーブルが出され、ノートを取り出した。

そして始めに二人で握る赤のボールペン。

また“×マーク”をつける。

『鈴科の靴をボロボロにして、僕と同じ状況にしてやる』

×

といつても鈴科を廊下で殴る、という無茶はしないことにしていた。

その後黒いボールペンを僕は握り、必死になって書きつづけた。

数分経ち、ノートは汗で滲んだ黒い文字で埋め尽くされた。

「……これで、いいんじゃないのかな？」

「うん。すっごくいいと思う。」

また二人は笑い合った。

同じ事を何回も話した。

でもそれだけで面白く感じた。

そしてたった一言がこぼれる。

「楽しいね。」

「うん。」

呪い天使 25 『同然』（後書き）

『物語は折り返し地点にたどり着いたようです。これからもどろどろよろしく願います。』

呪い天使 26 『陰謀』（前書き）

さらにエスカレートする僕たち。

呪い天使 26 『陰謀』

呪い天使 26 『陰謀』

いつもと変わらぬ朝だった。

僕の席には隣のクラスの三日月が堂々と横にいた。

また『計画実行ノート』を開いては二人で薄く笑いあう。

『都宮のお金を利用して遊び、さらに都宮のお金を無くす』
『鈴科の靴をボロボロにして、僕と同じ状況にしてやる』

これらにはすでに赤ペンで“×マーク”がつけられている。
まだまだ黒のボールペンの行は続く。

「・・・よし。今日はこれでよし・・・と。」

ざわざわと人が教室に入ってくる。

時計の長針が真下を指そうとしている。

三日月に「じゃあね」とひとこと声をかけて手を振った後まだ僕は
そのノートを凝視した。

秒刻みに細かに動く針は、ついに12の方向を指しだした。
教室を出入りする人が増えている。

僕はその光景をちらっと見た後、すぐに目を下にやった。

いつものチャイムが鳴り、先生が教室に入ってくる。

「はい、学活を始めます。欠席は・・・無しと・・・。では次だが・
・・・」

ノートに目を奪われていたせいか、学活はすぐに終わった。
そのノートを閉じ、何も入っていない机にしまった。
さて、国語の時間だ。

・・・楽しみだ。

しかし授業が始まる、何分か前に事が起きた。
鈴科が僕の目の前にやって来た。

「俺の国語の教科書を返せよ。」

やはり来たか。

そう思いながらため息をついて、目の色を変えて見せた。

「人を疑うのは良くないんじゃないのかなあ。」

「今さら何言ってるんだよ。お前しかいないだろ？盗むのは。」

「人聞き悪いこと言わないでもらえますか？家に忘れた可能性はないのですか？」

わざと敬語にしてやった。

鈴科の形相がさらにひどくなる。

おいおい、そんなんじゃないのかのルックスが台無しだよ。

僕は至って冷静であった。

「俺が家に忘れるはずが無い。」

「その自信はどこから湧いてくるのですか？自尊心高すぎかと思いますが。」

「ふざけんじゃないぞ？」

いたつつつ……

思わず苦痛の声が漏れる。

鈴科が僕の顔を殴りかかった。

なにか変な味がする液体が流れ込んできた。

……手も赤く染まつてる。

当たり所が悪かったのだろう。

こんなのは生まれて初めてだった。

だが僕は顔は歪んでいても、心の中でそうあざけ笑ってやっていた。

暴力を公の場にして披露しているのだ。

……あいつ、人間いかれたな。

痛うつ……やっぱり痛い……

気付けば人だかりがきている。

全ての人間が僕の周りにいる。

全て。

このクラスの人全員こちらを向いている。

他クラスからの侵入なんて気づいていないだろう。

予定通りだった。

少し早めに先生がやってきた。

これも予定通り。

先生は叫びながら僕を背に仲介に入ってきた。

「皆さん！席に戻りなさい！誰かは保健の先生を呼んで！」

ほとんどの生徒が自分の席に戻り、先生は鈴科を抑えかかった。

やみくもに体を動かす鈴科も、先生の前では無意味な行動だった。

落ち着いた様子で先生が鈴科に状況を聞き入れる。

「俺の教科書が無いんだ。コイツしかありえない。あの靴もあの漫画も全て・・・全てコイツが・・・」

当然先生は僕がさっき言っただけと同じことを言う。

鈴科の討論は無力にも朽ちた。

そこでクラスの誰か——いや、鈴科の席に近い人が・・・トドメをさしてくれた。

このタイミングも完璧だ。

先生が来て一段落、落ち着いてから・・・予定通りだ。

「先生？ 鈴科君の机に国語の教科書入ってますよ？」

鈴科が慌てて机に走って向かった。

今までは誰もこの事件に手を出そうとしていなかったのに。もうクラスは僕の味方だと確信した。

クラスの人氣がほとんど無く、浮き者の僕だったからこそ一昔前までは誰も目撃情報を提供してくれなかったのだ。今では違う。

鈴科の悪行が世間に浸透していつている。

それが例え僕と三日月がつくった偽りの情報だとしても。

「・・・・・・ははっ！ ははっっ！ 伊藤、ばっかじゃねーの!？」

鈴科が陰気に笑い出す。

みんなの目が細くなってるのが分かった。
むしろ怖がっている者さえいた。

「俺に恥をかかせるために？俺に手を振わせるために？
そんなために殴られるのを覚悟したのか。
そんなことのために、血い流してんのか？ははっ！」

鈴科の肩に先生の手が寄り添い、廊下のほうへ歩き出した。
もう、鈴科影斗は鈴科影斗ではなくなっていた。
さようならって、心の中で笑ってやった。

そんな僕も保健の先生に背負われながら保健室に向かった。

ざわめいてる中、たった一人、違う行動をする影があった。
僕の机の中にあるノートをじっと見つめていた。

その行動に、僕も誰も気付かなかったという。

そしてその手はノートへと伸び、表紙をめくった。

後にその行動が、僕たちを狂わすことになる。

『都宮のお金を利用して遊び、さらに都宮のお金を無くす』

『鈴科の靴をボロボロにして、僕と同じ状況にしてやる』

『鈴科の机から教科書を取り出し、鈴科が僕の所へ寄って激怒して
いるときに三日月がこっそり教科書を戻す。』

赤いインクが滲んだ先にある言葉は

『鈴科のアドレスをネットに流す』

『都宮と鈴科の物を無くし続ける』

『そして鈴科——』

行はそこで途切れている。

それを見たそいつは、慌てて机の中にしまい、必死に震えを止めていたそうだ。

呪い天使 26 『陰謀』(後書き)

この行動が後に

呪い天使 27 『心折』（前書き）

アドレスがネットに撒かれる・・・

呪い天使 27 『心折』

呪い天使 27 『心折』

鈴科からの暴動。

ざわめいてる中、たった一人、違う行動をする影があった。
僕の机の中にあるノートを手に取りそれを読んだ。
後にその行動が、僕たちを狂わすことになる。

・・・赤いインクが滲んだ先にある言葉は

『鈴科のアドレスをネットに流す』

『都宮と鈴科の物を無くし続ける』

『そして鈴科——』

行はそこで途切れている。

それを見たそいつは、慌てて机の中にしまい、必死に震えを止めていたそうだ。

翌日

鈴科の携帯のアドレスはネットに広がった。

全く関係の無い、見たこともない人からメールがきた。

メルマガ、荒らし、サイト紹介など、さらにはチェンメまでまわっていた。

ほんの一瞬で鈴科のメールはいっぱいになった。

しまいには携帯が作動しないまでに溢れてしまった。

学校でそれを確認した鈴科は授業が始まるたびにトイレに駆けてい

った。

知らない間に時間はたつて、すぐに昼食の時間がきた。そのとき鈴科は保健室で昼食を取っていた。

顔は崩れ、目線は途方にくれ、下しか見ていなかった。

鈴科は、心臓が重くなるのを確実に感じていった。

一方僕らは心臓が軽くなっているのを実感していた。

昨日からどんな掲示板にも書き込んだかいがあった。

そして授業中にもずっとコピペ文を張り続けた。

ここまでになるとは想像もしていなかったが、鈴科が苦しんだので完全に花丸ものだ。

もちろん——鈴科が保健室やトイレに駆け込んでいるうちに最後から二行目を実行するため、

鈴科の机をあさりては物を捨てていた。

もちろんバレないようにだ。

人が多いときは水筒を零すだけで十分である。

そして三日月はそのノートのその行に赤い“×マーク”をつけた。

僕と三日月は笑い合った。

あと残すは二行だけ。

というかその一行は今のよういつでも行っていることなので正確に言えばあと一つだけになる。

明日の体育の時間で全てが終わる。

二人とも冷汗がふいに出てきていた。

・・・あと少し・・・あと少しで決まる・・・。

いろんな意味で激しく鳴る心臓の音を沈めた。

僕たちは最後から二行目の都宮と鈴科の物を隠す、無くす、壊すを続けていった。

そろそろ都宮のお金もどうなるもんかと思ったが、僕たちの交友費を無くしているだけあってそこまで被害が大きそう

には見えなかった。

その証拠に都宮の物を無くしてもその次の日あたりで新しいのが買われているのだ。

なんという経済力だろう。

だが引つかかる点がいくつかあった。

鈴科だ。

彼の教科書もまた、一日当たりで新しいものに買い替えられていた。確かに鈴科は一応はお金持ちだが都宮ほどではないし、

水筒で濡らされたが頑張れば使えるような教科書・・・もしも僕だったら絶対使い続けているような教科書まで、

全て新品になっていたからだ。

普通そこまでするのだろうか？

確かに後ろに暴力団がいるとはいえ・・・。

普通ならば、お金よりもまず、時間を惜しむはずだ。

新しいものを買う、その時間が面倒くさいはずだ。

なのに何故だろうか？

その理由は僕たちには解けなかった。

その日の放課後。

僕と三日月はまた一緒に帰っていた。

今回は方向は違かった。

向かう先は、オルゴールの専門店だった。

「こんにちわー。」

「おおっ！オルゴールは直ったよ。」

「わぁ・・・！ありがとございますっつっ！」

オルゴールは完全に直っていた。

匂いも音も変わらず、昔と同様に輝いていた。
お金を取り出し、オルゴールを手にした。

「オルゴール直ってよかったね。」

「ああ。うん。壊された時はどうしようかと思ったよ。」

「でも直ってよかった。」

「ほんとほんと。」

僕たちは変わらぬ景色を觀賞し、毎日のように同じ道でお別れの手を振った。

「あ……。オルゴールのお釣り間違えてる……………はあ……
……」

クルッと一回転して足の向きを変えた。

三日月が歩く姿が遠くに見えたが、流石に迷惑だろうと僕は独りオルゴール店に戻ることにした。

オルゴール店についた僕は店につくなり手を膝に置き、乱れた息を戻していた。

体力的にもあるが精神的にもだ。

独りで時間を過ごすことの辛さを知った気分になった。

「あ……店員さん……お釣り……間違えていて……」

「おっ、伊藤君か。悪い悪いっ！ごめんな！」

「いえいえ。」

「そうそう……さっきの可愛い子はアレかい？」

店員はやさしい目つきで僕に笑いかけた。

「アレ・・・ですか・・・？」

「悪い悪いっ」

「いえ、いえ・・・。」

「話が変わるけどもよ、君は家族思いだねえ」

「え・・・なんでですか・・・！？」

別に否定したいわけではないが、なんとなくこっ恥ずかしいものがあつたのでこんな返答になった。

「いや、家族写真らしいものがあつたし、その写真の裏に手紙みたいなものがあつてな。ま、読んでないけどな。」

一瞬固まった。

鳥肌が立ったのに気づいた。

今、何と言つたのだらうか？

『手紙』と言いはしなかったか？

・・・初見だ。

この何年かの間それに気付かなかつた。

写真は貼りっぱなしで大切にしていたから気付かなかつたのだらう。

僕は店員の言葉を完全に無視してバックを店内で広げだした。

そして手にしたオルゴール。

僕はその写真をめくつた。

呪い天使 27 『心折』（後書き）

『評価感想お待ちしております。』

呪い天使 28 『呪殺』(前書き)

写真の裏

呪い天使 28 『呪殺』

呪い天使28 『呪殺』

店員の言葉で僕は鳥肌を立てることになる。
そして時が一瞬止まるのである。

「いや、家族写真らしいものがあつたし、その写真の裏に手紙みたいなものがあつてな。ま、読んでないけどな。」

今まで僕はそれに気付いていない。

だが——何か希望を見つけたような気がしてならなかった。

僕は他の客のことを気にせずにバックを店内で広げだした。

そして手にしたオルゴール。

僕はその写真をめくった。

写真の裏には一枚の紙がノリで貼られていた。

紙は黄色く汚れている。

小さな字・・・おそらく万年筆だろう。

その文字で書いてあつたのは手紙ではなく・・・

・・・父さんの居場所だった。

そして最後にこう書いてある。

『P S 最終手段だ。父さんが雄を迎えに行けなかったとき、ここ

まで来てくれ。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・・・」

僕は慌てた。

足が震えている。

どうするべきなんだろう・・・？

場所は近くもなく遠くもない距離であり、行こうと思えばいつでも行けるような距離だ。

だが母さんもいる。

普段外にあまり出ない僕が電車でどこかに行こうとするならば間違いないある程度は感づかれるだろう。

会いたいけど・・・・・・・・会いたいけど・・・・。

そして・・・明日は待ちに待った鈴科への最後の・・・・・・・・一行。

たしかにとりあえず副会長になったものの想像通り父の気配を感じない。

これは夢にも思っていなかったビックチャンスである。

明日にでも行きたい。

でも何かが僕をひっかけていた。

家に帰った僕は布団に身を投げ捨てるかのように寝そべった。

じっと手紙を見つづけた。

・・・・・・・・・・・・・・・・どうしよう・・・・・・・・・・。

知らず知らずに同じ言葉が口から出てくる。

時が経つのを忘れ見続けてるうちに僕は夢の中に落ちていった。

次の日

僕は結論を出した。

今はいい。やめよう。

今はやるべきことがある。

僕を蹴落とした、あいつを思っ存分潰してやるんだ。

それがまずすべきことだ。

三日月と計画は完璧に考えた。

大丈夫・・・僕なら出来るはずだ・・・。。。

やってみよう・・・いや、やるしかない・・・。

体育の時間が始まった。

鈴科はまだ学校にきている様子だった。

チャイムと同時に体育館の中心にジャージ姿の生徒が集まりだした。

「今日は前日に引き続き、跳び箱だ。気を引き締めて行つように。整列。」

学年カラーの青色の体育館履きのシューズが規則正しく揃う。

そしてラジオ体操だ。

・・・といつても掛け声だけでラジオ放送は無い。

近いうちにテストがあるそうなのでみんな至つてまじめだ。

目をつぶって記憶にまかせて本番の練習をする者もいる。

だがそんな人が決まって体操の順番を間違えるので体操風景はどうか間が抜けているのである。

体操が終わった後は定番のボイスランニングだった。

体育館の中を掛け声とともに永遠を感じさせるほど走り続けるのだ。後ろにいる鈴科の上履きが今日もみんなと違う色だったのが目に映った。

僕は前にいる三日月と目を合わせ、軽く笑った。

何故かこの学校は男女共同体育だ。

それであって2クラス同時に行う。

偶然僕と三日月は同じ体育の授業を受けられるということなのだ。

「個人個人、自分に見合った段の跳び箱を飛べ。」

鈴科は体育も得意だった。

だけでも今日は高い跳び箱を選ぼうとしなかった。

顔が完全に俯いている。

当然先生からの注意を浴びる羽目になっていた。

鈴科と僕は同じ段の列に前後ろで並んだ。

僕はあまり跳び箱が上手でなかった。

鈴科と同じ跳び箱の段ということはなかなかレベル高いところである。

クラスみんなには

「調子のつたな」と笑われながらちやかされる。

「僕だってやればできる」とその笑い声に返答してやった。

僕の番だ。

ふと先生を見れば三日月が先生の熱いアドバイスをうけている。

そして後ろに鈴科が居るのを確認して跳び箱へと走り出し、跳んだ。やはり僕に跳び箱なんて不可能なこと。

全身から激突して、跳び箱が何段か崩れそうになる。

・・・いや、崩れたかもしれない。

さらにはマットも大幅にずれている。

サーカスの大失敗かのような派手な失敗様だ。

必死に僕はそれをうけとめる。

マットも直す。

たくさんの人からの笑い声が聞こえる。

少し聞けば

「美味しい」だとか

「狙ったね。」との声も聞こえる。

でも今回ばかりは言われても嫌な気分にならなかった。

むしろ心臓の鼓動以外聞こえていなかった。

次は鈴科の番だった。

僕の手がだんだんと湿ってくる。

足が震えてきた。

必死に表情を殺すようにつとめた。

しかしどうしても口がにやけてしまう。

鈴科が思い切り踏み台を踏み、跳び箱に手をついた。

同時に僕の目と口も大きく開いた。

ガダガダッッッ！！！！！！

雑談の声は一瞬に消され、僕は走り出したあと悲鳴が鳴り響いた。

跳び箱が鈴科とともに崩れ落ちた。

鈴科は跳び箱に潰されていた。

顔と腕しか見えていなかった。

僕は跳び箱をどかしながら鈴科の方へ寄っていった。

跳び箱の下敷きになった鈴科はマットのない場所で落ちていた。

マットをずらしておいて正解だった……。

同時に近くに転がりそうになっているゴムボールをポケット隠した。

鈴科が僕に気付いたようだった。

鈴科は少々の赤い滴が飛び散っている跳び箱に顔面を押しつぶされている。

そこからかすかに見える口元をゆっくりと開き始めた。

「……………伊藤……………伊藤……………」

「死なない程度に頼むよ。」

僕はゆっくりと小声で言っただけ。

鈴科はまた口を開こうとする。

そして鈴科が言ったあの一言は、僕の一生を変えさせるような気がした。

「……………たとえ死んでも……………呪ってやるから……………絶対……………殺してやる……………」

その声は大きくかすれていて、息も乱れていたもので途切れ途切れになっただけの耳に届いた。

だがそんな弱々しい声でも僕の足をさらに震わさせていた。
さっきまでの震えと違うのは明らかだろう。

再度、目を下に向けては震えだしていた。

そして目の前に先生や生徒が集まっていることにも気付いていなかった。

呪い天使 28 『呪殺』（後書き）

そして

呪い天使 29 『手帳』(前書き)

体育館での悲劇が僕を襲う――

呪い天使 29 『手帳』

呪い天使29 『手帳』

「・・・・・・・・伊藤・・・・・・・・伊藤・・・・・・・・」

「死なない程度に頼むよ。」

僕はゆっくりと小声で言っただけだ。

鈴科はまた口を開こうとする。

そして鈴科が言ったあの一言は、僕の一生を変えさせるような気がした。

「・・・・・・・・たえ死んでも・・・・・・・・呪ってやるからな・・・・・・・・
絶対・・・・・・・・殺してやる・・・・・・・・」

その声はかすれていて、息も乱れていたので途切れ途切れになっていた。

だがそんな弱々しい声に僕は足の震えを止めることができないどころか震えが強くなっているのを感じた。

そして目の前に先生や生徒が集まっていることにも気付かず呆然としてその場に立ち尽くしていた。

他の生徒全員、僕に続けて走り寄ってくる。

先生も寄ってくる。

冷や汗をたっぷりと顔に流す先生の指示で全員が跳び箱をどかした。

「伊藤・・・！どかそ・・・！鈴科が・・・！」

ここで僕はようやく体を動かすことに成功した。
僕もようやく焦りの表情を浮かばせながら跳び箱をどかすことに専念した。

すでに鈴科は苦痛の表情さえもしていなかった。

先生はその後生徒を払い、手元にある電話で他の先生を呼んだ。
体育の授業は中止され、遠くから赤いランプが見えてくる。

鈴科は病院へと運ばれ、生徒全員は教室に帰ってきた。

廊下で三日月が僕の手を取り合おうとする。

「やったね。」

「・・・ああ・・・うん・・・成功だね・・・」

「どうしたの・・・？」

「いや・・・ちよつと鈴科に気を悪くすると言われてね・・・。」

「

「気にしないでよ！もう、終わったんだから！」

「うん・・・あ・・・ノート・・・×つけといて・・・」

「ん・・・？あ・・・うん・・・分かった・・・。」

三日月は自分の教室に戻り僕から受け取ったノートを取り出して赤ペンを握った。

『そして鈴科に体育の時間、怪我を負わせる。』

×

・・・一方都宮はというと――

・・・もちろんこれも今の僕は知らない話だ。

都宮もまた震えを止められない人の一人であった。

そして体育の時間の前に鈴科と話していたことを思い出していた。

・・・

【鈴科？ちよつとさ・・・私・・・嫌になつてきちゃったの・・・】

【何をだ？】

【あなたの教科書代を払うことよ。お金も減つてるし、何と云つても時間がもつたいたいない。】

【ネットで充分だろ？それにお前の父の手で早く仕入れることくらい可能だろ。】

【でもあなたは何もしてないわ。お金も払わなければ労働もない。

――楽よね。】

【だからなんだ？お前が俺から離れても居場所はないし伊藤たちがらこの攻撃が続くだけだぞ？】

【別にかまわない・・・でももうやなの・・・。】

【・・・お前も伊藤と同じように殴られたいのか？】

【・・・やめてっ・・・そういうわけじゃないの・・・！！でも・・・！】

【今日の放課後だ。学校裏の林に来い。来ないようなら俺が強引に連れて行かせる。】

チャイムだった。

神の救い手が降り立ったのだ。

そして体育館へと向かい・・・普通に授業がすすめられ・・・鈴科

が救急車に運ばれたのだ。

・・・

・・・

都宮は頼杖をついて机の上で窓の景色に目をやっていた。
もちろん黄昏ているわけではない。

この“事故”が自分にとって良いものなのかどうか審議しているだけなのだ。

視ているのは外に広がる木々ではなく、心なのである。

確かに鈴科に嫌気がさしていた、丁度そんな頃だった。

だが——クラスメートが救急車で運ばれたのは決して喜んではない……。

あの様子を見る限り・・・かなり危ない状況じゃないかとも思えるのだ。

不安を感じていた。

殴られる、怖い、そう感じてすぐに起きたことだった。

タイミングが良いようで悪いのだ。

そしてふと視線を変えてクラスを見た。

グループごとに鈴科の話題で会話があふれている。

自分の周りには——誰もいない。

鈴科と行動しているのは放課後でクラスの中では行動こそしていなかったからこそ他人から鈴科同様軽蔑視をされずに済んでいたが、そのおかげでいつも一緒にいた三日月と伊藤といることができなかったため、クラスの人との会話は減っていき、今では一人ぼっちの状況である。

鈴科と学校——というか公の場で話してはいなかったが、メールの交換はしていたのだ。

それで孤独に気付きもしなかった。

鈴科がいない今、自分は孤独だということを認識することになった。
複雑な心境に、また目線を窓に移した。

・・・

僕たちは休み時間に廊下で話し合っていた。

「・・・鈴科・・・なんて言ってたの・・・？」

震えも消えてきて、鈴科の話題を出すのも大分慣れてきていた。

「殺す・・・死んでも呪う・・・とかって言ってたよ・・・。どうしよう・・・。」

「死んでも呪う、とかってただの文句だよ。死なないよ。あんな程度で。」

「だといいけど・・・。」

「何おどおどしちゃってるのよ。これで全て無くなったんだから有意義に暮らせるじゃない！」

「・・・そうだねっ！そうだよそうだよ！喜ばなくっちゃっ！ねっ！？」

「うん！」

【楽しいね】

【うん。】

僕は家への道のりを長く感じながら帰宅した。
部屋にこもる。

かけ布団をヒラリと広げ、その中に体を入れた。
そして丸くなる。

その中で僕はやはり震えていた。
後悔なんかではない。

恐怖だ。

罪に対する恐怖ではない。

鈴科の言葉だ。

あの言葉がどうにも気にかかる。

もしも退院してきたらどうするのだろうか？

僕は殺されるのだろうか？

いや……殺されはしないだろう。

さてよ……暴力団の存在があるではないか……！

そうだ……そうだよ……！

いくら鈴科でも自分の人生を棒にふるような真似は、あの性格的に
ありえない。

間違いない。鈴科は暴力団に依頼するだろう――

と、一つの仮説が僕の頭をよぎった。

仮説といっても大げさな推理でもなんでもないが。
むしろ最も安易な答えなのかもしれない。

鈴科はお金を援助している。

鈴科は何故こんな年なのにもかかわらず暴力団を率いているのだろ
うかと、まず考えた。

写真での一件でもそうだ。

何故あんなのをスキンヘッドやらに暴力団は受け入れたのだろうか？

実は鈴科も都宮と同様、お金持ちの域に達していて・・・

それで大幅に援助しているから今まで鈴科はトップに近い位置にいるのでは。

そうなるも以前僕が考えていた、鈴科の教科書についても頷ける。

お金を援助している——だからトップなのだ。

そうなるも鈴科は暴力団の犯罪も責任が問われてくるに違いない。よって鈴科は僕を殺すことなどは容易ではないのかもしれない。

そう結論付けた。

例えばそれが違おうとも、僕はそれを信じた。

気付けば体中汗が濡れていた。

冷や汗ではなく、普通の汗。

思いきりかけ布団を投げ出して扇風機とうちわで涼み始めた。

震えはもうない。

僕は心身ともに安らいでいた。

この先何が起こるかも知らずに。

呪い天使 29 『手帳』(後書き)

『新展開突入・・・なのでしょうか。引き続きお楽しみください』

呪い天使 30 『解放』 (前書き)

呪い天使 30 『解放』

呪い天使 30 『解放』

都宮――

鈴科を嫌がったその矢先に鈴科が怪我で運ばれて動揺している。さらには鈴科を失い孤独になっていた。

僕、伊藤――

鈴科の言葉、

「……たとえ死んでも……呪ってやるからな……
絶対……殺してやる……」

これに恐怖を覚えていた。

だがある仮設を合理化することで僕の心は軽くなった。

『鈴科はトップなのだから暴力団に僕を殺すよう命じ、殺したら、鈴科に大きな責任がかかってくる。』

――だから僕は殺されない。

そう信じていた。

三日月――

彼女はあまり動揺をしていなかった。

そして今まで通り……むしろ喜んでいる。

昔に戻れたと意気揚揚だ。

そして今僕も――意気揚揚に戻った。

三日月と同様。

・・・ある日。

僕は生徒会長の仕事をさせてもらっていた。
理由は鈴科がいないから。

これで僕の願いはすべて叶えられたような気がしていた。

父との再会は最終手段の紙一枚で解決したうえに、生徒会長の仕事で経験を学べる。

三日月も書記の仕事に就くことになり（この学校は生徒会が人気なく、いつでも誰でも書記と会計は入れるのだ）僕たちはますます日々を充実させていった。

しばらく、その生活が続いた。

全ては終わったんだ。

鈴科は消えた。

都宮もここ最近は大変。

僕たちへのイジメの気配がない。

さらに彼女は誰とも話している様子もない。

授業も度々しか出てこないし、顔を出したと思ったらトイレに生き、出たと思ったら目を赤く染めていた。

慰める仲間もいなく、休み時間も下しか向いていない。

ちよつと・・・大人しすぎるような・・・

僕と三日月は、そんな都宮に同情をするようになっていった。

同情という言葉は不向きかも知れない。

彼女がいつしか鈴科に出会い、そうして僕たちをいじめるようになっていった。

だが——それまでの都宮も僕は知っている。

元気で、差別なく誰とも話す事が出来て、ムードメーカーで、クラスを中心のそんな都宮を——僕は知っている。

憧れだつたくらいだ。

だから話しかけられたときはものすごく嬉しかった。

嫌がる気配もなく、僕と話してくれた。

もちろん話題が冷めることなく、都宮によって盛り上げられ、僕は笑い続けることができた。

ねえ・・・なんで今の君はそうなっているの・・・？

三日月も、都宮の良さを知っていた。

そしてある日、僕は思い切って都宮に話し掛けてみた。

「・・・都宮・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・何・・・・・・・・・・？」

「鈴科も消えたんだしさ・・・また、やり直さない・・・ほら、仲良くさ・・・」

仲直りというものだ。

自分たちもあそこまでし返ししといてこんな理不尽な話はないだろう。

だが——僕は戻したい。

鈴科のいないこの環境で一からやりなおしたい。

その言葉に都宮は表情を変えた。

しかしその表情は、良い表情ではなかった。

「今さら何言っただよ。こっちは危うく退学処分されるとこだったんだ。」

そっちが最初に私を裏切っておいて今さら・・・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・？」

『退学処分』という言葉は僕は理解ができなかった。

いつ？何故？まさか僕のせい？

しばらくの沈黙が続いた。

状況を読み取ることが出来なくなっていた。

「どういう意味……？」

「……え………どういう意味って………それは………」

都宮の歪んだ表情が、丸い表情へと変わっていった。
僕には、表情が戻ったとも感じられた。

都宮の説明で、僕と三日月は目を丸くした。
しばらくの間、体全体が固まっていた。

鈴科が全て話を仕組んでいたのだ。

写真をとったのが僕自身だという嘘もつかれていた。
僕と鈴科が仲間だと思いつまされている都宮がいた。

そして写真の後ろに飲酒した都宮がいて、退学処分されそうになっていた。

それからずっと、上前のお別れパーティーの時も都宮は敵だった。
だからオルゴールの情報提供をしていたのか。

「結局………全て鈴科が………」

都宮はふいに泣き出した。

声を荒げ、まわりも気にせず泣き出した。

ハンカチで顔を抑え、また下を向き始めた。

ごめんなさい、と何回も言っていた。

そんな都宮に僕達も謝り続けていた。

しばらくして都宮がようやくハンカチを下ろした。

「ごめんなさい・・・オルゴールのこと言っただりして・・・」
「・・・時雨は、悪くないよ・・・」
「そうだよ・・・直ったしさ・・・!」
「私たちも・・・お金使わせちゃってごめん・・・」
「大丈夫だよ・・・!それくらい・・・!私の方、がつ・・・!」

三日月まで泣いていた。

僕も目頭が熱くなったが必死に堪えた。
クラス全員の姿が消えるまで教室にいた。
最終的には、三人とも泣きつづけていた。

次の朝だった。

三日月がついに水沢に話し掛けた。
上から覗き込むように水沢に手を出した。
三日月は下ばかり向いている水沢に顔を近づけ、話し掛けた。
都宮のときと全く同じセリフだったが、水沢は三日月の手をとった。

「またさ、みんなで仲良くやろうよ。」

水沢の久し振りの笑顔を見た。
その笑顔は大きく上下に振られて

「うん」と叫んだ。

やっと全てが昔に戻った。
やっと終わったんだ。

4人で帰りながら話す様子は、紛れもなく本物の友人だった。
そして全員が本物の親友であると思ってるはずだと思った。
顔を見れば分かる。

全員の顔が昔と全く一緒だ。

水沢がやっとう談話をするようにまでなってくれた。

鈴科さえ居なければ、僕は最高だったんだ！ 心からそう思って空を見上げ、神に感謝した。

勇気をくれてありがとう。

・・・もちろんそのときは気付く余地もない。

都宮が水沢を突き落とすために言った言葉を、訂正してないなんて。

呪い天使 30 『解放』 (後書き)

勇気とは何に使うものだろう

呪い天使 31 『帰還』 (前書き)

元に戻る――

呪い天使 31 『帰還』

呪い天使31 『帰還』

僕達は元に戻った。

仲の良い、あの4人組に戻った。

鈴科が学校から消え、僕達は本当の仲間となることができたんだ。

鈴科は病院にいるそうだ。

骨を折った、と風の噂が耳に入ってきた。

さらにいつ治るかは分からない、というもんだから帰ってくるのは遠い日のことだろう。

罪悪感はない。

これくらい自分はされたのだから鈴科は同じように罰されなければならない。

そして恐怖も消えた。

これで終わったと思ってたんだ。

ある日のこと。

僕たちは久しぶりに4人で遊ぶことにした。

ボーリングやカラオケや、買い物までした。

朝から晩までずっと遊び続け、あっという間に今日が終わる。

「あつ、携帯が鳴ってる……。」

三日月が携帯を開いた。

4人のプリクラ写真の待ち受けには『新着メール一件』と書かれて

いた。

「・・・上前からだつつ!!!」

「えっ!？」

全員がいつせいに小さい画面を覗き込んだ。
同時に笑みがこぼれる。

『三日月から内容は聞いた。やっと4人に戻ったみたいだね！

鈴科は入院したんだって？ははっ傑作だね（笑）

そうそう、本題なんだけど、俺さ、明日そっちの学校にまた戻るんだ。

そんなときはよろしくな！では電車に入るので・・・じゃねー』

「上前戻るんだって!!!」

「やったっ！これで本当に元に戻るんだ！」

全員が全員、喜びの表情を顔に出した。

水沢も、喜びを隠し切れていない様子だった。

というか隠す必要もないから表現的には間違っているのだろうが・・・。

僕も水沢も都宮も、何回もメールを見ようとしていた。

何度見ても変わらないメールを何度も何度も見た。

そんなことで過ぎ去っていく時間も楽しく感じた。

本当の友達というのを知った気がした。

ただ、いるだけで楽しいんだ。

次の日

「今日はだな、嬉しい話があるぞ。」

先生が陽気に話し出す。

おなじみの僕達3人は顔を向き合った。

三日月は隣のクラスでうずうずしていたに違いない。

そして僕達は輝きを放つその目で先生を見てやった。

すでにクラス中が騒いでいる。

それを楽しんでもつたいぶる悪戯な先生。

僕たちの視線を感じたのか、先生はとうとう言葉を吐いた。

「上前が帰ってきたんだ！」

クラス中が騒ぎ始める。

そして喜びの表情になる。

クラスメート、やはりたったそれだけで、みんなが仲間なんだ。
その仲間の帰還。

クラス中がさらに盛り上げた。

「久し振りですー！」

上前がやってきた。

更に盛り上がるクラス。

男子も女子も、上前を仲間と認識していた。

そうでなければこの盛り上がりは無いだろう。

仲間の大切さを直視し、僕は身震いをした。

その時間の終わりには上前の前に人だかりができていた。

僕は波に乗る遅れたために最後列だ。

この身長のために上前が見えるか見えないか、というところだけだ。
気付けば中には都宮も水沢もいた。

後で話せるからいいや、と諦めて僕は席に着いた。

その後。

僕と上前はやっと話せた。

「久しぶり！」

「おう！久しぶりだな！どうだった？あれから。」

「まあ、いろいろあったよ。でも今大丈夫。全て元に戻ったんだ。

僕は運がいいんだ！ははっ！」

もちろん——上前にあのことは話せない。

このことを知っていいのは加害者である僕と三日月と、被害者である都宮と鈴科だけ。

変にこのことは教えない方がいいだろう。

上前は転校中起きていたことを知らない様子だった。

・・・それにしても上前は以前と変わらず明るい。

上前が加わり、5人で合流した。

一日はあっという間に終わっていった。

そして流れるように楽しい日々は過ぎ去っていく。

最近楽しいことばかりである。

自分を含める5人メンバーでいるときは本当に幸せだった。

だから家に帰るのが果てしなくだるい。

そして嫌だった。

寝るに寝付けなく、僕は暇を消そうと努力をした。

家に帰るのが辛くまでなってきた。

早く学校に行きたい……。家なんて……。つまらなさすぎる……。

退屈だ。

気付きたかった。

この『暇』『退屈』というものは『自由』ということだ。

『安らぎ』であり『幸せ』ということだということだ。

『何もない』という日常がどれほど良いかということを知ってればよかった。

いや、知っていたはずだ。

楽しい毎日に、ごく普通に過ぎていく日常が、あたりまえのものと
なり、

この『何もない日常』を辛いものだ勘違いしてしまっているのだ。

そのうち気づくことになる。

この『退屈』『暇』『何もない』がどれほど大切なことなのか。

こんな形で強引に作った幸せは――

呪い天使 31 『帰還』(後書き)

そう、強引に作った幸せなど・・・

呪い天使 32 『病院』（前書き）

毎日が楽しくて仕方なかった。このメンバーといるときは。

呪い天使 32 『病院』

呪い天使 32 『病院』

僕たちの楽しい日々は続いていった。

定期テストを忘れるほど遊びに尽くしていった。

もちろん勉強もしているが。

家で勉強する。

それがたまらなく嫌でたまらなかった。

もちろん家に帰ったら勉強以外なんてしない、なんてことはありえない。

当然のように暇な時間も出てくる。

土日なんてさらにそれが多い。

それがどうしても僕は嫌だった。

早くみんなに会いたい。

依存症、中毒なのであるうか？

自分ではそんな気はしていなかったがそれに近いのかもしれない。

あの4人に会うことが生きる意義であるかのように。

それがいいは生きる意義ではない。

楽しめない。

——早く会いたい。

そろそろ鈴科が復帰するんじゃないのか？とクラスが思い始め、若干騒ぎだしたそんな頃。

そういえば僕と三日月と都宮と水沢と上前・・・おなじみの5人はお見舞いには行っていない。

他の人はどうなのだろう。

恐らく行っているだろうがどこまで定期的に行っているのだろうか？
それとも零なのだろうか？

鈴科の悪行はクラス中に浸透しているから『零』だと思う。

一応病院は知っている。

偶然にも僕はその病院の前を通ることが何度か会った。

1回だけ——1回だけ僕はその病院に入って行った人を見たことがある。

もちろん同じクラスの人だ。

大人しくて、クラスの盛り上がりについていこうと必至の影の薄い人が。

そして彼はある友達と一緒に連れて病院に入っていたのだ。

もう一人が誰かはわからない。

ただ同じ制服を着ているという理由でだ。

そこで鈴科はどのような事を彼らに話したのだろうか？

でもこの状況。

このクラスの景色から見て誰も僕が跳び箱事件の首謀者だとは知らないだろう。

しかし……少しだけ気になる。

僕は先程話に出てきた病院に行った大人しい彼に話しかけてみた。

もちろん影の薄さ故名前も名字も知らない——から、

「ねえ」から問いかけを始めて彼はこちらを振り向く。

「……この前病院に行っていたよね……？鈴科、なんて言っていた？」

優しく話しかけた。

けど返ってくるのは、“何もない言葉”

いや、視線が返ってきている。

鋭く細く、冷やかな目。

「……えっ……何……何何？どうしちゃったの！？ははっ！」

彼は動揺することなくこちらを見続けている。

——睨み続けている。

「……………」

僕は呆れた表情を表現しながら背を向けて、他の人に当たることにした。

でも

答えは一緒だった。

何度も何度も。

何度も僕は人に問いかけて。

無言を返される。

時たま睨まれる。

——鈴科の身に何かあったのだろうか——？

もしかしてその話題はタブーだったのだろうか？
……………何故――

不安を残したまま僕は三日月に話しかけた。

「……………三日月……………なんか鈴科の話題がタブーらしい……………」
「……………」

「そう……………？私のクラスでは普通だけど……………」
「まあ、そっちは隣のクラスだからね。」

「あ、確かにそうかも。伊藤のクラスよりは話題は少ないかなー。」

「でさ、今日。今日見舞いしにいかない？何か嫌な予感が……………」

「え……………今日の予定はたしか……………ないっ！うん……………！行く……………！」

「ありがとう！」

そして放課後になった。

まだ何人もの生徒が教室に残っているため、一人帰る準備を早々進めるのはどこか気が引けそうだ。

だがそんな様子も気にせず僕は隣のクラスに走っていった。

三日月と僕は病院へ向かった。

向かう途中、嫌な予感がしているのに気づいた。

自分の周りに妖怪がへばりついているような気分に襲われた。

三日月の肩に手を乗せたりもして、ヨタヨタと病院へ向かっていた。

病院に着いた。

この予感は偽物ではなかった。
でも、目の前に起きたその事実はそこまで驚くことでもないはずだ
ろう。

だがその事実は僕の心臓を重くしていった。
さらに嫌な予感が体を震わしていく。

この増していく嫌な予感が何故なのかも分からぬまま、僕は立ちす
くんだ。

「・・・・」

呪い天使 32 『病院』（後書き）

—— 嫌な予感。その病院には……

呪い天使 33 『掃除』（前書き）

病院で起きたことは――

呪い天使 33 『掃除』

呪い天使 33 『仕打』

何度でも僕の頭をよぎるのは——鈴科の言葉。

「……たとえ死んでも……呪ってやるからな……
絶対……殺してやる……」

都宮は鈴科を無くしたことで孤独になった。

僕たちはそんな都宮と寄りを戻そうと考えた。

もちろん、図々しい話なのかもしれない。

だが——僕らは明るい都宮を知っていた。

そして誤解があったことを知った僕たちは心から仲直りすることができた。

話さなかった水沢とも……話しかけて仲が戻った。

偶然にしてはできすぎだろうが、上前まで帰還してきた。

つまり、今僕は幸せの絶頂期だ。

今クラスの状態は皆、鈴科に対して良い目を向けていないはずである。

無論僕が跳び箱事件の首謀者だとも知らないだろう。

そんな中僕は鈴科の病院に見舞いに行っただろう人物に話しかけた。

鈴科はどうだった、何と言っていたか？

だが答えは無かった。

それは偶然ではない。

誰に問いかけても同じ返答。
不安が僕を襲った。

鈴科の身に何かあったのだろうか？
その話題は何故クラス内でタブーなのだろうか？

そして放課後になった。

まだ何人もの生徒が教室に残っているため、一人帰る準備を早々進めるのはどこか気が引けそうだ。
だがそんな様子も気にせず僕は隣のクラスに走っていった。

そうして・・・病院に着いたのだ。

・・・

「鈴科影斗という人のお見舞いに来たのですが・・・」

――あまり驚く事実ではないとしても――

「鈴科君ですか？今調べますね。」

――それは悪い予感をさらに大きくする結果になった――

「あの・・・鈴科君ですが・・・今・・・この病院にはいません。」

—— 実際あまり驚くような事ではないが ——

「あの・・・お客様・・・？お客様・・・？」

—— 僕の足は震えた ——

気付けば僕は帰宅しようと震える足を運んでいた。

「伊藤・・・。どうしたの・・・別に、大したことじゃないじゃない・・・。」

「うん・・・そうだよ。でも、何か嫌な予感がしてたまらないんだ。」

「病院にいない理由は、『言えません』の一点張りだったけどさ・・・。」

「僕が知リたかったのが、鈴科がアイツに何を言ったかだ・・・。」
「ああ・・・お見舞いに行った彼ね・・・。」

その彼に鈴科は何を言ったのだろうか？

そもそも言葉を発することはできたのだろうか？

何故クラスの人のはあのような態度をとったのか・・・。

鈴科の容体は一体どうなのであろう・・・？

次の日、僕はチャイムが鳴る二時間前に学校に着いていた。
当然誰も学校に来る気配がない。

部活もまだ始まってないようだ。

寝ようと思った。

机を3列ほど並べ、バックを枕にして準備は整った。
だが、寝れるはずはない。

もうあれこれ24時間以上は寝てないことになる。

まだ震えは止まらない。

暇つぶしをすることにした。

意味もなく教室の掃除をはじめる。

ほうき、ちりとり。

流石に雑巾掛けまではする気は起きないが……。

やはり頭の中では鈴科のことが渦巻いている。

鈴科はこうなることを予測して病院からいなくなったのだろうか。

僕が御見舞いにくることを想定して……。

また怪我させられるとも思っていたのかもしれない。

それとも僕からの脅しが来ると考えた、とも考えられる。

もしくは鈴科が御見舞いに来た人に言ったことを僕に聞かれないうちに消えたのかもしれない。

そうなのならば、御見舞いに来たあいつは何を言われたのだろうか？

まさか僕の犯行が伝えられたのだろうか？

……そんなことは………絶対あつてはならない………。

そろそろ1時間前になりそうだ。

そんなとき。

あいつがやってきた。

病院にやってきたあいつが……あいつがやってきた………。

何と言うチャンスなのだろうか……！

「……っ」

はっ、と彼は引き下がろうとした。
僕はそれを食い止めた。

彼の胸倉を思いきりつかんだ。
少し聞こえる悲鳴。

しかしその悲鳴は口を塞ぐことで解決された。
そしてゆっくりと方向を変え、窓の方へと彼を誘導していった。

「お前・・・鈴科から何を聞いた!？」
「んぐう・・・うう・・・」

僕の手が離れ、彼の口が現れた。
ほんのり赤くなっている。

「何も・・・何も聞いてない・・・何も聞いてない・・・!」
「嘘をつくな・・・どうせ何か聞いたのだろう・・・?まさかクラ
スの人に言っただんじゃねえよな・・・」

「本当に・・・何も聞いてない・・・!」
「じゃああの御見舞いのときのことを詳しく教える。」
「わかった・・・わかったからその手をどかせよ・・・」

ばっ・・・

払うように僕は胸倉から手を離れた。

彼は降り飛ばされるように弾き飛ばされた。

なんて力のない・・・。

まだ55分前。誰も来ないだろう。

「あの日・・・あの日僕は病院に行ったんだ・・・。
もちろん鈴科は君ヘイジメをしていたからよく見られてはいな
かった・・・!」

僕が彼にとつた行動があたかも事件の首謀者かのようなのだったのに彼は何も驚いていないこと。

僕は、鈴科からの被害者でありみんな味方、という設定のつもりであつた。

なのに今の会話はあきらかに、僕は鈴科への加害者である、という内容になつていた。

それを不思議に思わない彼は一体……。

さらに僕がクラスの人々に聞いた質問……

『鈴科の病院での状態は？見舞いに行つた？』

これの返答は全て『零』

その時のクラスの話題は……

【そろそろ鈴科が復帰するんじゃないのか？とクラスが思い始め、若干騒ぎだした。】

そんな頃だつたのだ。

なのに先ほど彼が言つた内容は

【鈴科が病院にいないから、死んだかもしれない。とクラスでは話題だ】

そう言つていた。

食い違いが起きているのだ。

クラスでは何が起きたのだろうか？

まさか彼はとつさのうちに嘘をついたのだろうか？

いや、鈴科が病院にいなかった、という嘘は嘘ならばすぐに見破れる。

今回は彼の発言と僕の病院での実体験が一致していた。

嘘ならばそんなことをとつさに言えないだろう。

それは嘘じゃないから——事実だから……。

この震えは何だろう……

だが——間違いなく鈴科の安否は眼中になかつた。

では何故クラスの中では『鈴科が帰ってくるんじゃないか』と噂していたのだろうか？

それは僕の周りでちよこちよこ聞こえてた噂話である。

ならばそれが　嘘　なのだろうか？

何のため？

ゆっくりと掃除している黒板を見つめた。

手には黒板消し。

綺麗に掃除しようと思ったから気づけたことだ。

ほら・・・また足が震えてくるよ・・・

『伊藤、死ね』

薄っすら黒板にチヨークの跡が残っていた。

呪い天使 33 『掃除』（後書き）

クラスで何が起こきたのだろうか――？

呪い天使 34 『黒板』(前書き)

不安は的中するものか

呪い天使 34 『黒板』

呪い天使 34 『黒板』

鈴科の御見舞いに行った人が、鈴科から何を聞いたか気になっていた。

僕の犯行を鈴科はその人に伝えたのだろうか？

そして感じるこの不安……。

だが不安とは裏腹に鈴科が病院にいないだけであつた。だけでも増していく不安。

朝、御見舞いに来た人と偶然にも教室に居合わせた。

「お前……鈴科から何を聞いた!？」

「何も聞いてない……!」

病院に……鈴科がいなかったんだよ……ホントに……で、僕はみんなに告げたんだった……。いないって……。それで……。みんな……。嫌な予感を感じていたんだ……。! 鈴科が死んだんじゃないかって……。! 本当だ……。!

ふと——僕は気づいた。

彼は、僕の問い詰めた内容に驚いていないこと。たしかにびびってはいはいた。

だが世間一般では僕は鈴科の被害者である。

僕の問い詰めはあたかも加害者のような内容であった。

それに彼は驚いていない。

さらに僕がクラス中の人に聞いた『鈴科の病院に行った？』という質問に、みんな黙りこくっていた。むしろ睨む人も少々いたくらいだ。

それに三日月のクラスでは普通に鈴科の話題があったそうだ。

——僕のクラスだけ……

いや、クラスではその日『鈴科はそろそろ帰ってくるんじゃないの？』と噂していたのだ。

だが僕はその話題に入れなかった。

つまり……——僕だけ。

黒板掃除をしている僕の足は震えだす。

『伊藤、死ね』

薄らとチヨークの跡が見える。

昨日……僕と三日月が病院に行く前……クラスの人ほとんど残っていた。

普段は我先にと廊下に出るそんな連中がこの日だけは……

そしてこの黒板に書いた文字……

何が起きているのだろうか？

僕の頭は混乱しだした。

そして学校が始まる20分前。

都宮がドアを開ける。

僕にとっては当然幸運なことだった。

すぐに僕は黒板を指さす。

眼は見開いたまま。

口は——閉じたまま。

都宮は口を押さえて驚き出した。

「・・・何これ・・・」

「わからない・・・書かれていたんだ・・・昨日・・・」

「昨日はすぐに帰っちゃって・・・でもみんな残ってた・・・」

「・・・何を話していたんだろう・・・」

「伊藤は悪くないのに・・・鈴科が偶然タイミング悪く事故で怪我しただけなのに・・・」

都宮もその事実を知らない。

でも、彼女はこの教室の裏で起きていることも知らないようだ。

否、裏というよりは表なのかもしれない。

そしてあいつが堂々と教室に戻ってくる。

僕は鬼の形相となり彼の元に歩み寄っていった。

「お前・・・今から少しトイレに来い・・・ただ質問したいだけだ・・・」

「う・・・っ・・・うん・・・」

都宮の顔も見ることなく僕はトイレに行った。

「お前・・・本当に鈴科が病院から消えてたのか・・・？」

「ホントだよ・・・それは間違いなく・・・今病院に調べても同じだよ・・・」

「昨日、放課後残っていたか・・・？」

「ううん・・・用事があったからすぐに帰ったんだ・・・。」

「・・・証明できるものは？」

「ある・・・！これ・・・！これだよ・・・！地元の病院・・・！」

病院の診察券には診察時間が書いてある。

その時間から照らし合わせてすぐに帰ったようだ。

僕たちよりも早く。

「じゃあ、クラスは今、鈴科や僕のことをなんと噂している？」

「してないと思うよ・・・！ただ、鈴科がいないのは死んだんじゃないか——ってことくらいで・・・。」

「嘘だ。つい最近、クラスでは鈴科はそろそろ復帰するのでは？と俺の耳に入ってきたが。」

「・・・ありえない・・・！！僕の周りでそんなこと言う人は一人も・・・。」

その後何度も問い詰めたが結果は同じであった。

もう彼からの情報収集は諦めることにした。

どう考えても嘘を吐いているように見えない。

でも今分かることは一つ。

僕はクラスの人に裏から嫌われている。

何故かは分からないが——。

もちろん、すぐ分かることになる。

今日、この日に。

1分前。

30秒前。

10秒前。

5秒前。

3秒前。

1秒前・・・チャイムだ。

変わらぬ様子で先生が教室に入ってくる。

当然黒板消しの罨などの刺激はないので一日は至って静かに始まる。そして先生の話は終わったようだ。

同時に皆立ち、同時に頭を軽く下げた。

そして先生は僕にこういう。

「ちよつと校長室に来なさい。」

不安がピークに達している。

貧乏ゆすりに紙一重、というくらいの震え。

その足をゆつくりと持ち上げる。

校長室までの距離がやたら長く感じる。

「・・・伊藤君。」

「はい・・・」

「昨日・・・クラスのある人から聞いたよ。」

「・・・誰ですか？何をですか・・・？」

「誰かは言えないが・・・、単刀直入に言う。あの跳び箱は君が仕組んだことなのかな？」

「・・・はい？なんですか・・・それ・・・」

「そうある人が言っていたんだ。『間違いなく伊藤君の仕業だ』と。」

「・・・根拠なしに・・・」

「だが、その前に君が跳び箱を崩しているし、マットもずらしている。」

そこから少しバランスを崩させたりできるものじゃないのかな？」

「・・・だから証拠がないと・・・！僕はやってません・・・

！」

「しかし・・・他の人も私の所に来るのだよ。『あれは伊藤君だ』
って。」

「・・・デタラメだつつつ！」

僕は眼を大きくつぶり頭を抱えて下を向いた。

何故・・・ばれているのだ・・・？

何故人々が敵にまわっているのだ・・・？

「とりあえず、お話を聞くためにお母さんにも話させてもらいます。

」

「・・・それは・・・」

「悪いが既に話している。」

「・・・」

「別に君にやましい点がなければそれだけのことだよ。これから調べることにする。」

調べても大丈夫だ・・・。

僕がやったという事実は見つけれないし証明できない・・・。

だが・・・今気にかかるのはクラスメートのことだ・・・。

何故・・・何故・・・くそおつつ・・・！！

クラスに戻ると辺りは急変していた。

もうオープンである。

ひそひそ話のオンパレードであった。

聞こえる。

聞こえないように話しているふりしてるがこれは間違いなく聞こえるように仕掛けている・・・。

『伊藤が鈴科の怪我をさせたんだろ・・・？』

『つい最近まではアイツの前ではばれないようにしていたけどいいのかよ』

『先生に今呼ばれたんだしもういいだろ。』

『わざわざアイツの前で【鈴科はそろそろ治る】とか適当なこと言つてたのにな。』

『鈴科が病院から消えた理由が、伊藤からの怪我があまりにもひどいから——だなんて知らせたくないからな。』

『鈴科、可哀想だよな。きっとその怪我について伊藤にだけは知らされたくないはずだぜ。』

『あいつ・・・最低だよな・・・故意的に人を怪我させるとか・・・』

『あ・・・あいつ戻ってたよ・・・ははは・・・！』

聞こえる。

僕は聞こえて聞こえないふりだ。
聞くふりなどできない。

固まる。

ペンまわしをしようとして落としたペンは拾わない。

紙に絵を描き始める。

消しゴムは使わない。

耳はシャットダウンできない。

嫌でも聞こえてくる。

・・・落としたペンを拾った。

クラス全員が敵になっっているのに僕は気づいた。

再び都宮と上前と水沢は僕に話しかけづらくなったのか、その日は話すことが無かった。

三日月と帰る時・・・。

僕は三日月に相談していた。

今後のこととか、そして・・・

「なんで・・・なんでバレたんだろう・・・」

「わからない・・・それとも・・・推測・・・？」

僕たちは何も知らない。

呪い天使 34 『黒板』（後書き）

『ラストが近づいてきました。これからもどうぞよろしくお願いします。』

呪い天使 35 『天為』 (前書き)

犯行がばれている・・・

呪い天使 35 『天為』

呪い天使 35 『天為』

僕が鈴科に与えた怪我。

違う病院に搬送されたのだから、もしかしたら容態が危険なのかもしれない。

はたまた、鈴科が何かの陰謀を企み姿を暗ました、とも考えられる。病院側の人は『移動の理由はお答えできません』と言っている。

——だが、そこはいい。

今気にかかっているのはクラスの事、噂、情報。

御見舞いに行ったという弱々しい人は嘘をついていないようだった。よって彼が病院に行った時には鈴科がいなくなっていたのだ。

彼の話から察するに、彼が一番最初に御見舞いに訪れた人のようだ。

そして聞こえてきた【鈴科が戻ってくるんじゃない？】という僕への嘘の噂話。

この時にはもう既に僕が犯人だとクラスのみんなが認識していたことになる。

そしてその頃・・・彼が病院に行ったのだ。

・・・・・・つまり――

鈴科は誰にも何も言っていない。

さらには見舞いに来て、鈴科の顔を確認した人さえいない。

ならばどこから僕の犯行がばれたのだろうか？

このことを知っているのは僕と三日月だけだ・・・。

三日月が首謀者・・・？

それはありえない。

そうしてまた一日が始まるうとしている。

クラスでは僕の噂話でもちきり。

そのくせ僕の体を異常なほどにまで反応を示し、避けようとしている。

イジメはされない。

鈴科の仇……などもない。

ただ、噂話をする。

やめて・・・――

やめて・・・やめて・・・

やめて・・・やめて・・・やめて・・・

[illegible]

身体がなんだか痛い上に頭がクラクラしてきた。

——今のせいだ。

だが痛いところを押さえることなく僕は無理やり目を閉じた。
当然眠れるはずもなく——

深夜3時。

その時計を確認した後僕の意識はやっと飛んでくれた。

朝。

部屋を出ると最も見たくない光景が広がっていた。

母さんが倒れている。

原因は不明・・・なのは僕が素人だからだけでも・・・

とりあえず僕は救急車を呼んだ。

心臓は動いているし呼吸もしている。

だが・・・倒れている。

僕は母さんと呼び続けた。

救急車に長い時間待たされた。

全く救急ではない。

こちらは急いでいるのに、何故救急車はこんなにも遅いのだろう？

もしも来ない間に命が止まっていたらどうするのだろう・・・

僕は母さんがタン力で運ばれる横で、隊員をにらみつけていた。

車内に乗っている感覚ではなかった。

ずっと目線が母さんに向けられているからだ。

そして走りながら治療室に走る。

僕は外で待たされた。

不安が募る。

母さんが何故こんな状態になったかも分からない。

数時間後、医者が僕の前に寄ってきた。

「お母さんは胃潰瘍ですね。」

「……え……?」

「ストレスや疲れによるものでしょう。状態が悪いので手術、入院となります。」

ストレスや疲れ――

疲れは言うまでもなく日々の労働だろう。

ほとんど休むことなく、さらに寝る時間を惜しんで仕事を続けていた。

ストレスは……

鈴科……僕……跳び箱……犯人……

僕は涙をこぼし始めた。

病院の中で唸り声をあげた。

その時は手術費のことを考えもしてなかった。

呪い天使 35 『天為』（後書き）

『文章、内容のご指摘があれば気軽に評価感想をしてください。よろしく願います。』

呪い天使 36 『費用』（前書き）

母さん――

呪い天使 36 『費用』

呪い天使 36 『費用』

母は家で倒れた。

救急車が到着し、母はタン力で運ばれた。

「お母さんは胃潰瘍ですね。」

「・・・え・・・?」

「ストレスや疲れによるものでしょう。状態が悪いのでさらに手術、入院となります。」

母はそこじゃそこの主婦とは比べ物にならない労働をしている。

一人で生計を立てているのである。

母はずっとパートの仕事をし続けて、家に帰ったら僕と一緒に内職をする。

寝る時間を惜しんで・・・働いては働いて・・・休むことなく・・・働いていた・・・。

そしてストレス――

僕が跳び箱で鈴科を怪我させた犯人・・・審議・・・。

先生からの知らせ・・・

間違いない。

これが大きな原因だ。

気付けばハンカチで顔を覆っている。

全て鈴科のせいで・・・せつかく幸せを手に入れたと思ったのに・・・
何故・・・何故・・・何故僕だけこんな目に・・・。

医者は僕が落ち着くのを少し待ったあと切り出した。

「・・・手術費のお話ですが・・・」

母はこれからも入院し、治療を長い間うけなくてはならないらしい。その代金が・・・とても家にあるとは思えなかった。仕方なく嘘をつき、払えると言ったものの、僕はどうすることもできなかった。

次の日の朝。

もう学校に出かけても良いような時間。

僕は公衆電話の前に立ち、学校に電話をかけていた。交渉は長くなったが、なんとか大丈夫であった。そして疲れがどつときたのか、僕は久しぶりに眠りについた。

学校に着く時間は——もう遅刻である。

人影さえない、お昼時。

学校の門の前に立った。

とうとう学校の門の目の前に足が付き、その足をゆっくりと校内に入れていく。

冷汗がでてくる。

無意識のうちにズボンでその汗をふきながら教室に向かった。

何も知らない三日月たちが歩み寄ってきて優しく話しかけてきた。そして心配もしてくる。

今、申し訳ないのは分かっていたが、そんな心配を求めていなかった。

た。

何も無い無言がいい。

だが、いざ無言になると聞こえてくるひそひそ話。すぐにチャイムは鳴り、帰りの会が始まった。

「はい、みんな席について下さい。まずは伊藤からお話があるそう
だ。」

ざわつく生徒たち。

先生の顔がどこか暗いと生徒は察していた。

それくらい分かるだろう・・・毎日会っている先生なのだから。
僕は立った。

「理由はいえませんが、僕は今日でこの学校を転校することになります。」

ざわついてくれたことが何より嬉しかった。

だけでもそれが当然寂しくて未練に溢れた。

だが涙は流さなかった。

どうせ皆はイジメに耐えられなくて転校するのか？とも思ったの
だろう。

そんな中で泣くのはあまりにも馬鹿馬鹿しい。

高校に通ってる場合じゃない。

教科書はあるんだ。

自分で勉強ならできる。

一日中バイトをして、その休みに勉強すればいい。
そうすればなんとかなるはずだ。

転校なんて――――嘘に決まっている。
僕は仕事に生きる。

帰りの会が終わり、廊下で話を聞いていた三日月が当然やってくる。

今度は走って来てくれた。

「なんで・・・？ねえ・・・」

すでに三日月は泣いていた。

それを僕は正面から見つめることができなかった。

「どこに行っちゃうの・・・伊藤・・・」

まさか・・・クラスみんなが原因なの・・・ねえ・・・私・・・
ごめん・・・」

僕は嘘をついた罪悪感に襲われた。

どこにも行かない、そんなこといえない。

とりあえず『クラスとか鈴科とかは関係ない』とだけ告げておく。

そしてごめんね、わからない、を繰り返してただただ帰りの身支度を進めた。

この椅子も、今日が最後となる。

この机も、教室も、みんなの笑顔も、全部が全部最後となる。

生徒が完全に下校した後、一人で校門を出る。

そこには三日月がただ一人待っていた。

目を赤く染め、まだその涙は止まろうとしない。

「三日月・・・」

ついに僕の中の何かが吹っ切れた。

感情が込み上げてくる。

未練——それは僕の最高の仲間。

その中でも一番の未練が……三日月だ……。

僕は本当のことを全部打ち上げて、二人一緒に泣いていた。

呪い天使 36 『費用』（後書き）

伊藤の学園生活は終了した

呪い天使 37 『呪縛』 (前書き)

学校とお別れだ。

呪い天使 37 『呪縛』

呪い天使37 『呪縛』

三日月はそこにいてくれて、流そうとしなかった涙が溢れてきた。全て打ち明かして三日月はさらに顔が乱れていった。

翌日

無情にも僕の机は日の当たる教室から薄暗い倉庫に運ばれた。

今日、ぽかんと1つ空いた席の隣りの椅子には誰も座っていなかった。

そんな景色を見たのは未練が故に学校に立ち寄ったからである。

制服姿ではない僕はもちろんすぐに学校を出た。

僕の抜けたいつもと同じメンバーで、どのように学校生活をしたのかはもう知らない。

これから二度と通ることのできない校門の前で僕は自分に喝を入れる。

もうここは自分の行くべき場所はどこではない。

さっそく僕の新しい生活が始まる。

朝は家で勉強をし、昼は店員となり働き、夜は工事現場ではたらいだ。

辛い毎日だったが、耐え切れることが出来た。

しかし入院費を侮っていた。

バイトなどでは全く手につかない。

家の貯金も底をつきる寸前にまで落ちていった。
だけでも僕は必死に働いた。

目に隈が増えるのを実感していった。

日が経つにつれ、鏡の前に立ちたくなくなっていった。

お金が欲しい・・・

もうすでに学校が終わってから相当な日が経っていた。

「毎日のようにずっと会っていいよね。」

そう分かれたはずなのに三日月とは一回も会っていない。

彼女らがどうなったのかさえわからない。

授業も行事も何もかも、何がおきてるか分からなかった。

そろそろ三日月の顔も鮮明に映し出されなくなってきたころだ。

時の合間に写真を月明かりに照らしながらじっと見つめて顔を確かめた。

・・・いつになったら会えるのだろうか・・・。

いつものように無気力な様子で工事現場へと向かう僕。

今日は偶然にも通学路を通ることになった。

少し前には毎日見てきたこの景色も、遥か遠くの過去の模様に見える。
てくる。

いつもと同じだったこの信号。

そしてお決まりだったあのベンチ。

ベンチに座るとき、いつもと反対側の方に腰を下ろした。

ランプが青になるまでずっとその冷たいベンチの暖かさを探し続けた。

この信号、ベンチ、街燈。

何もかもが懐かしい。

信号が青くなると同時に僕は下ろしていた腰を上げた。

ゆっくりと歩く僕。

凍っているかとも思えるこの無力な手を無造作にポケットにしまった。

転ぶといけないから片方だけを外に出しておいた。

数分ごとにポケットの手を入れ替える。

・・・まだだろうか、工事現場は。

学校の奥にあるとはいえ、工事現場はどこか遠く感じて景色さえ眼に写らなくなってきた。

外に出ている片方の手で耳を抑えるようになってきた。

しかしもう片方の耳も寒い。

手は充分に樂をしたはずだ。

両手で耳を覆った。

手も耳も凍る気がした。

寒さに負け、ついに走り出した僕。

タッタッタ・・・

タッタッタ・・・

・・・

タッタッタ・・・

タッタタッタタ・・

タッタッタ・・

タッタタッタ・・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

何故だろう・・。

足音が・・響いている・・

止まれば消え・・歩けば響く・・

当然のことだろうか・・？

ただこの静かな街にこだまして響いているだけのはず・・

・・しかし・・不器用に響いている足音が・・

僕は気になって・・

見てはいけない後ろを振り向いた。

このとき、振り向かず全速力で走ればよかった。

「ネエ・・・ネエ・・・ネエ・・・」

両肩に新しい寒を感じる。

目の前に真つ黒な人影がある。

冷たいしつとりとした二つの手が僕の肩をつかんできた。

「呪ウンダカラネ・・・僕八君ヲ・・・」

僕は激しい悲鳴をあげ、肩にある冷たいものをはじき走り去った。

タッタッタ・・・

タッタッタッタ・・・

タッタッタ・・・

タッタッタッタ・・・

タッタッタ・・・

タッタッタッタ・・・

ダメだ・・・着いてくる・・・。

とても・・・逃げられない・・・！

助けて、と叫ぼうとしたとき、工事現場の明るい光が見えた。

「オオ、伊藤くん！今夜も頑張ってるねえ！」

・・・今、僕は救われたんだ・・・。

工事現場のオジサンの罪のない笑いに僕は救われた。
笑い返して僕は仕事をはじめた。

ふいにかるく振り向く僕。

アレはいなかった。

一本に伸びているこの道のどこにもアレはいなかった。
目を細めて道の奥を見してみるが何もいない。

でもこの肩は全てを物語る。

まだ消えない寒気。

あの冷え切った手。

あの感触を忘れない。

夢では無い・・・。

夢じゃないのだろうか・・・。

夢であってほしい・・・。

夢じゃないと知っても、夢だと願った。

仕事もあまり手につかない。

オジサンに笑いながら

「今日は不調だね」なんて言われるが僕は愛想笑いしかかえすことが出来ない。

それでも笑って話し掛けるオジサンに僕は心を開かせた。

次第に会話も弾み、仕事も快調なペースだ。

年の差も忘れるような会話だった。

話の盛り上げ方が少し昔の人を匂わすが、話が盛り上がっていることに変わりはない。

今さっき起きたことも気軽にはなすことが出来た。

「それですね、さっきなんか人に追いかけれちゃって」

「そりゃあー大変だったなあ。まあSFなわけないしな。安心しなつてなよ！」

そうだ。この世の中にSFなことが起きてたまるもんか。

あつてはならない。

非現実的だ。

きつと誰かが追いかけただけ……

誰かが……追いかけた……だけ……

……誰かが……追いかけた……だけ……

……？

少し経ってから思い出した。

跳び箱に埋もれてたときの鈴科の言葉……。

「……たとえ死んでも……呪ってやるからな……
絶対……殺してやる……」

この後、僕はSFなんかよりも怖いものを知ることになる。

呪い天使 37 『呪縛』(後書き)

『なお、SFとかではありません』

呪い天使 38 『憂鬱』

呪い天使38 『憂鬱』

頭に刻まれた言葉。

「呪ウンダカラネ・・・僕八君ヲ・・・」

「・・・たとえ死んでも・・・呪ってやるからな・・・絶対・
・・・殺してやる・・・・・・・・」

その後に起きる恐怖をまだ僕は知らない。

工事現場を終わる僕。

さっきのアレが怖いのか、工事現場のオジサンと一緒に帰ることにした。

だが、分かれ道は意外と早いもので僕はすぐに一人になっていた。
何の音もない。

こんな夜にはついつい耳を澄まして無の音を感じてしまう。
足音。

そのあと響く足音は・・・ない・・・。

ササッ・・・

何かが聞こえた。

そう感じているときには後ろを見ずに全速力で走りぬけていた。

否、もう前さえも見ていない。

ようやく足を止めた理由は目の前の信号が赤く光っているからだ。
僕はベンチに腰を下して汗を流し続けた。

にやあ・・・

僕に問いかけるようにベンチの下側から何かの鳴き声がした。

僕はベンチから離れて電柱に背中をピタリとつけた。

・・・黒い猫か・・・。

さっきの音も・・・この猫なのだろう・・・。

僕は背中を猫のように曲げながらトボトボと歩きだした。

ようやく電気もついていない一軒家に帰ってくる。

結局家に入っても電気をつけずに家の前にある街燈を鏡で反射させながら、

算盤を片手に毎日の日課ともなる貯金の計算をひっそり行なった。

数えるのは一桁の枚数のみ。

当然日に日に日課の時間は縮小されていく。

貯金も本当に底をつきている。

母さんは今病院で安静に入院してるものの、良いとはいえない状況だ。

いつ何がおきるか分からない。

更にひどくなる場合もあるだろう。

そしてベット費、入院費・・・。

もう・・・お金が・・・。

入院することができなかつたら・・・母さんは間違いなく・・・

・・・間違いなく・・・

僕はそっと喉まで込み上げてきた言葉を飲み込み、そっと目を閉じ

た。

入院費は日に日に払わなければいけない。

・・・もう生活さえもが厳しい・・・。

入院さえ終わってくれれば僕は今までの生活ができるはず・・・。
できるはず・・・できる・・・はず・・・。

部屋に戻り、部屋にお金が落ちていないか、隠されていないか探し求めた。

きっとあるはずだ。

部屋の次にはリビングも探すでしょう・・・。
もしかしたら母さんがコツコツ貯めていた膨大な資金が・・・

少ない可能性を僕は信じてみた。

机、引出し、じゅうたんの下、布団、枕、椅子のカバーの中・・・
冷蔵庫、レンジ、棚・・・机の裏・・・。

・・・何も無い・・・。

お金どころか物という物もガラクタも何も無い。
換金できそうな物さえない。

もう、本当に終わりかもしれない。

・・・母さんも僕も・・・。

寝ることを決心した。

明日目が覚めてしまえば同じ徒労が繰り返されるのだ。
いつそ眠り続けたい。

何もかも忘れて永遠に自分に別れを告げたい。

だが僕が生きている限り、母さんが生きている限り、僕は母さんを
守らなくてはいけない。

助けなくてはいけない。

この生活に喜びを得たことは未だにない……が、退院さえすれば
僕は救われる。

頑張るしかない。

窓から大きなアクセルの音がした。

バイクだろう。

そう認識していたときには僕は布団の中で丸くなっていた。

その布団は小刻みに振動を続けている。

バイクだ。

そうして僕は寝る体制に戻った。

明くる日も明くる日も僕は仕事を続けた。

朝。

仕事はお店で接客だ。

だが——僕は接客の仕事を下りて店の整理等の仕事に携わることに
した。

もうだめだった。

見知らぬ人に声を掛けられる……それだけで僕は少なくとも5歩
以上は遠ざかる。

体がふいに反応してしまう。

——それがたとえ老人だろうと。

店の整理のときも必ず自分の背中の後ろには壁だった。

もしくはダンボールの山。そうやって仕事をこなしていく。

だがここ最近ダンボールさえもだめになってきた。

以前ダンボールが崩れたのだ。

フラッシュバックのように僕の頭に“あの事故”がよぎったのだ。

数分間僕は震え続けていた。
もちろん——気付かないうちにだ。

夜。

また工事現場に向かう。

「あのう……道を教えてくれないかのう………?」

「う……うわああつつつつ!」

僕はまた走り出していた。

道も定まらないままに暴走し、行き止まりに直面しては何故か絶望していた。

そして工事現場に向かう途中で起こる……アレ……定期的にくる……アレ……

「ネエ……ネエ……」

北極で凍らせてきたようなその手が僕の肩に乗っ掛かる。

僕は後ろのモノに手を一回振り、逃げ去った。

その手は顔に当たっていたと思う。

だが、またアレはやってくる。

「痛いヨ……痛いヨ……君ミタイナ人ハ死ヌベキダヨ……」

工事現場の明かりが見えるまで走り切った。

そしてアレはいなくなる。

これも毎度のこと。

家に帰ると僕は再度お金を探していた。

ついには隠した記憶がない自分の部屋にまで手をだしていた。

僕は机を探った。

ガサゴソと音をたてながら手を忍ばせていく。

何かが手に引つかかった。

それを手にとり顔の前にもってきて、顔は久しぶりに笑みへと変わった。

僕はお金よりも大切に、希望のある物を見つけてしまった。

オルゴールだった。

フラッシュバックのように記憶が蘇る。

そうだった・・・

・・・

・・・

【話が変わるけどもよ、君は家族思いだねえ】

・・・

【いや、家族写真らしいものがあつたし、その写真の裏に手紙みたいなものがあってな。ま、読んでないけどな。】

・・・

【『P S 最終手段だ。父さんが雄を迎えに行けなかったとき、こ

「こまで来てくれ。』」

・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

そうだった。

このオルゴールの裏側には・・・

父さんの手紙が・・・

父さんの居場所が・・・

そして父さんからお金を・・・

父さん・・・

父さんなら・・・母さんを助けることができるかもしれない・・・

僕は気付いたら身支度を済ませ、外に出て駅を目指していた。

呪い天使 38 『憂鬱』（後書き）

僕はどこまで父さんに期待しているのだろう

呪い天使 39 『遠出』

呪い天使39 『遠出』

オルゴールには、父さんの居場所が書いてあった。

父さんなら・・・母さんを助けることができるかもしれない・・・
僕は気付いたら身支度を済ませ、外に出て駅を目指していた。

駅に向かうはずなのに暗くなっていく道のりは既になれていた。

そんな街を踏みしめ、街燈に照らされながらゆっくり歩いてゆく。

田舎なのか都会なのか分からないこの街は、住宅街という言葉がピッタリだった。

駅に向かうのは久し振りだ。

タッタッタ・・・

やがて街は静かになり、僕の足音も響くようになっていった。

前と・・・同じ。

同じシチュエーション。

そんな夜は必ずやってくる、慣れてきそつで慣れてこない、あの・・・

・アイツが追いかけてきた。

タッタッタ・・・

タッタッタ・・・

タッタッタッタ・・・

やつは突然現われる。

雰囲気で気付いていたがやはりアイツはやってきた。
全速力で駆け抜けてもソイツは僕を追いかける。

タッタッタ・・・
タッタッタッタ・・・

手が・・・手が僕の肩に忍び寄る・・・
だめだ・・・。。足で負ける・・・。

タッタッタ・・・
タッタッタッタ・・・

一瞬にして体中が鳥肌を立てる。
肩が冷たい・・・

タツ・・・。。。。。。。。

また・・・あのときと同じことを言う・・・
だめだ・・・。怖い・・・。。。
でも・・・ここは・・・。。。。。。。。！！！！

僕はふいに後ろを振り返りながら叫んでみた。
もうコイツがどんな奴かは見当がついている。
僕並に足が速いやつといえは・・・そして・・・

こんなことをするのは・・・

「鈴科ー！」

後ろを見たが、変わらぬ景色が広がるだけだった。
もう、肩から伝わる冷たさは無い。

恐らく鈴科は退院したんだ。

こう考えると恐れるものはただの鈴科・・・。

そう考えることにしよう。

今まで関係のない物音、人にさえ怯えていた。
得体も知れぬ不気味なあの冷たさに僕はやられていた。
もちろんあれが幽霊だなんて考えたことは一度もなかった。
ただ怖かった。

追われている、プライベートを知られている、襲われる・・・

今後の身に何が起きるかも予測ができない……。

そう、僕は怯えていたんだ。

だがあれは“鈴科”という敵の行動だと考えれば気が楽だ。彼はそこまで馬鹿じゃない。

僕を殺すことはまず間違いなく無い。

することができるのは今のが限界だろう。

割と、子ども騙しだ。

たしかにあの冷たさと声には震えてしまうのは事実。

もちろん追われている、見られているのは怖い。

だけでも気を楽にしよう。

その一心だった。

何も出来ない鈴科の限界の行動がコレ。

被害はない。

それくらい我慢できる。

僕はずっと思っていた。

これくらいならオバケが怖い、と同等のものだ。

そんなのはすぐに慣れるし、たいしたことはない。

実際のところ安心していったんだ。

そう……父のいる駅に着くまでは……。

この鈴科が僕の後ろを着いてきていることなど知らずに。

ようやく父さんのいる駅に着いたようだった。

もうこの旅でお金を全て使い切ることになる。

残りのお金は母さんの入院費、約一週間分だ。

それまでの間に父さんを探し、お金をもらい……

母さんを、救わなければならぬ……。

そして・・・夢にまでみたほどの・・・僕の夢・・・

もう一度家族3人で・・・

僕は切符が出る場所を目にやりながら改札口を出た。
あとは住所を見ながら細かく調べ上げるだけ。

この場所は一言で言うと広い。

真つ暗な時がそう感じさせているのかもしれないだろうが、少し目を凝らせば遠くまで見える。

だが都会というわけでもない。

しかしながら会社はいくつかあるようなそんな場所。

緑は少しだけある。

きっと朝は会社員が大勢、電車に乗るに違いない。

ゆつくりと僕は住所を調べていった。

どうやらマンションのようだ。

この夜遅く、人の姿は見られない。

車もない。

信号機は気にする必要もないが僕は念のため止まっておく。

信号待ちの僕の指は、歩行者のための黄色くて押す部分が赤いボタ
ンに触れていた。

すぐに信号が黄色へと変わり、赤になる。

歩き出した。

もう少しで見つかりそうなところで僕の足は止まってしまい、住所
とのにらめっこが始まった。

父のマンションはなかなか見つからない。

途方にくれ、僕は意味もなく住宅街の中を歩いていった。
そんなとき事件はおきてしまった。

僕は、本当の恐怖を知ることになる。

ガ
ア

ツ
ツ
ツ
!
!
!
!

大型トラックが僕に目掛けて走行してきた。

呪い天使 39 『遠出』（後書き）

襲いかかる恐怖。そして希望。

呪い天使 40 『危機』(前書き)

トラックが僕に向かって・・・

呪い天使 40 『危機』

呪い天使 40 『危機』

父のいる街を目指す途中、アイツにまた襲われる。
でも僕はずっと思っていた。

これくらいならオバケに対する恐怖程度のこと。
そんなのはすぐに慣れるし、鈴科の行動だと思えば大したことない。

実際のところ安心していた・・・その一瞬までは。

父さんのいる駅に着いた僕は歩き続けた。
が——見つからない。

僕自身地図を見慣れていないからだろう。
完全に途方に暮れている。

そんなとき事件はおきてしまった。

僕は、本当の恐怖を知ることになる。

ガア————
ツツツ!!!!

大型トラックが僕に目掛けて走行してきた。

危機に直面したとき、人間は体が固まると思った。
こんなのは走って逃げればいい。
それなら逃れられる。

だがこの恐怖・・・
どうしても体が動こうとしない・・・
そもそも動くということも忘れている・・・

トラックが見える

トラックがこっちを向かって走ってくる

風の音が聞こえる

光が完全にこっちを向き、眩しいのに何故かトラックを見つづけている

トラックの速度があがる

僕の足は固まっている

トラックがこっちにやってくる

僕が・・・・・・・・・・飛ばされる・・・・・・・・・・

情景が描写され、宙を舞っている瞬間も、景色が写真のように見えてくる。

後ろには植物が生えている

前には電柱が3本ある

トラックはブレーキもせず前を進む

ミラー越しに運転手と目が会う

トラックの運転手は・・・

運転手は・・・・・・・・・・

以前・・・僕が上前と一緒に都会を歩き・・・
鈴科に写真を撮られ先生からの信用を失う結果になった・・・
そんな写真の・・・
一緒に歩くことになったあのスキンヘッドの悪い奴だ・・・
何故こんなところで・・・

僕は気を失う。

誰も僕に気付こうとしない。

誰も助けを呼ぼうとしない。

誰も寄り添ってくれない。

むしろ・・・誰も通っていないのだろう。

そんなのは気を失っていた僕にも分かる。

僕が目をさめたとき、そこには誰もいないし、同じ場所にいたから。
植物が少し前に見え、その奥。

すぐに壁になっていたからそこに激突していたのだ。

だが今ここで意識があつたのは強運だった。

普通ならば死んでいただろう。

当たり所も良かったみたいだ。

引きづられて手足、腕、膝から血が出ている。

何も無い。

ハンカチもなければ救急車がきたとも思えない。

何より時間が経っていて、既に時は深夜で、明けを迎えようとまで
していた。

何故あのスキンヘッドの奴が・・・僕を・・・

．．．つつつ！！！！！

．．．鈴科か――。

「．．．たとえ死んでも．．．呪ってやるからな．．．絶対．．．殺してやる．．．．．」

――殺してやる．．．．．

鈴科は、それを遂行しようとしているのだろうか．．．．。
きっと金持ちの息子の鈴科のことだ。

僕を殺したら莫大な資金を受け渡すと言ってあるのだろうか？
そこまで僕が憎いのだろうか．．．
人を殺そうとしてまで．．．．

僕の予想はずれたと言っている。
鈴科は僕を殺すことは絶対に無い。

僕を殺したら自分にまで被害が来るからだ。
それが例え暴力団の仲間にやらせたとしても。
さっきのスキンヘッドは明らかに僕たちよりも年が上である。
そんな人を操れるということは、確実に鈴科はトップに近い存在だ。
もちろんそのお金で。

実は都宮なんかより資産家なのかもしれない。

僕は鈴科の名前をいいつづけた。

心からある人間を殺したいとまで思えてきた。

僕の人生をめちやくちやにしゃがったアイツを、今ココで殺したい。

これ以上あんな人間が生きてたまるか。

あんな人間は社会悪だ。

人をココまで追い詰めて。

・・・最低だ・・・。。。。。。

どれくらいか歩き、気付けば僕の目の前には大きな社宅が広がっていた。

間違いない。

ここが僕の父さんの住んでる場所だ。

僕はボロボロになったこの体で飛び跳ねようと必死にもがいていた。

父さんが、ちゃんと働いていたから・・・。

ホームレスなぞ、辛い思いをしていないのだと思うと、僕は感極まっていたんだ。

呪い天使 40 『危機』（後書き）

『あと十話です。よろしくお願いします。』

呪い天使 41 『社宅』（前書き）

ついに見つけた。

呪い天使 41 『社宅』

呪い天使 41 『社宅』

そこには大きな社宅があった。
完全に住所と一致する。

父さんは今、この会社で働いていて、真面目に生きている。
・・・この社宅の大きさから見て、きっと父さんはお金を持っているはずだ。

すぐに・・・すぐに会って・・・母さんを・・・！

早速入口から『伊藤』の名前を探し始めた。

・・・

・・・

“伊藤”・・・珍しい苗字ではない。

何人もこの苗字があり、一人一人探すのに一苦労すると僕は考えていた。

おかしい。

これで三回目になる。

最初から最後まで読み返したのが、
無い。

父の苗字がない。

この社宅には『伊藤さん』が一人もいない。
再度住所と照らし合わせてみる。

部屋番号。

『403』

そこには“大泉”さんが住んでいる。

社員らしき人が来てオートロックのドアが開き、僕も社宅の中へと入っていった。

エレベーターが下りてきた。

4階。

閉めるボタンと4階ボタンを押し続けた。

エレベーターが動き出す・・・が、まだ押し続ける。

ゆっくり開くドアを両手で開かせて走って行った。

403号室。

深夜だが関係ない。

僕は呼び鈴を押した。

遅い。

当然だろう。

時間が分らないが、普通ならば人は寝ている時間だろう。
大人の生活習慣なんて知ったこっちゃない。

僕は今、この地球が滅びようとも知りたいことがあるのだ。

気付くと呼び鈴は連打されていた。
やっと来た。

パジャマ姿の、サラリーマン。

臉を重そうにしている。

・・・当たり前か。

運が良いことにその人は優しい雰囲気である。

僕を怒鳴り散らそうとしない。

逆に、こんな夜遅くに呼び鈴しているので心配までしてくれている。だが、そんな様子を悟っているときには口が開いていた。

「この会社に『伊藤さん』はいませんか！？前までここに住んでいた伊藤さん！」

「ああ・・・伊藤課長か・・・。」

「・・・知っているのですかっ！？」

自然と僕の口調は強くなっていた。

それにしてもこの男、全く怒る気配がない。

「ああ、知っているとも。どうしたんだい？」

「その人は今、どこにいるのですかっ！？」

「・・・この前社宅から引っ越したんだよ。つい最近にね。」

「どこですか！？教えてくださいっ！」

「それは・・・ちよっ・・・。」

僕は彼の話が終わる前に同じ質問を続けた。

繰り返されること数回。

気迫に負けたのだろうか・・・彼はこういった。

「明日の８時にここに来なさい。伊藤課長をよんであげるよ。」

「ありがとうございました・・・。」

僕はその場で座り込み、日が昇るのを待った。

朝・・・。

僕はその会社員に起こされた。
眼鏡を掛けていて、背広を着こなしている。

「こつちだ。着いてきなさい。」

僕は着いていった。

社宅のすぐ近くにビルがあった。

そう・・・ここが父さんの働く場所。

この大きさなら・・・母さんを救うことができるお金くらい・・・。

そして待つこと10分。

来た。

背広の男が二人、入口から出てきた。

さっきの男と、どこか懐かしさを感じる男。

それが・・・それが・・・。

「と・・・父さんですか・・・!？」

そう呼ばれた男は背を向け、社内に戻っていった。

呪い天使 41 『社宅』（後書き）

『引き続きお楽しみください。』

呪い天使 42 『父上』

呪い天使 42 『父上』

社宅のすぐ近くにビルがあった。

そう・・・ここが父さんの働く場所。

この大きさなら・・・母さんを救うことができるお金くらい・・・。

背広の男が二人、入口から出てきた。

さっきの男と、どこか懐かしさを感じる男。

それが・・・それが・・・。

「と・・・父さんですか・・・！？」

そう呼ばれた男は背を向け、社内に戻っていった。

僕はその態度に焦っていた。

意味も分からず、ただ立ち尽くしていた。

そして自動ドアが閉まり、僕はやっとその方へ向かい走り出した。

「父さん！父さんー！！！」

会社の中で僕は叫び出した。
朝っぱらから。

社員全員、今日も頑張るぞ、と意気込んでいるそんな時。

もしかしたら、今日もまた同じ徒労が始まる、とため息をついているのかもしれない。

・・・そんなの関係無い。

僕は大人の囲まれながら僕は必死に叫び続けた。

その中に父さんはいない。

一人姿をくりましたあの人は父さんのはずだろうが、何かが起きたのだろう。

何故背を向くの・・・？

なんで・・・

「くっそあっ・・・放せっ・・・！父さんー！おいっっっ！」

「一回、落ち着きなさい。今、伊藤課長を呼びますから。」

「早く・・・早く・・・早くしろっー！」

ふと思い出していた。

昔の僕はこんな発言をしていただろうか？

社会の中で、この狂ったような口調で、行動で、発言を。

公共の場所でも、どんな場所でも僕は落ち着いて行動していたはずだ。

どちらかといえばクラスの中では謙虚な方だった。

いや、どんな時でも謙虚だった。

やっと来た。

人ごみの中を堂々歩いてきた。

彼が——伊藤課長か・・・。

そして・・・父さんだろうか・・・。

「雄か。少し外に出なさい。」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・・・・・・・」

夢だった父さんに出会えた。

でも、会う前から願っていた希望はない。

様々な展開が頭をよぎる。

それは全て悪い方向にある。

いつから・・・・愛想つかしたのだろうか？

「父さん・・・・あの・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前の話は、聞くつもりはない。」

「母さんが・・・・病・・・・」

「だから聞くつもりはないと言っただろ！？」

一番の目的さえも聞いてもらえない様子だった。

父さんは父さんでないようだった。

覚えていたはずの優しい父なんかではない。

「じゃあ、一つ聞かせて下さい。何故そんな態度なんですか？社員に恥をかかされたからですか？」

嫌味をつけたしておいたのは当然、希望を失っているからである。
もうこの男に頼ろうと思っていなかった。

「・・・・お前、副会長になっただってな？」

「悪いですね、そんなに息子は会長がよかったのですか。とんだ自

己満足主義者ですね。」

「……………副会長でも県登録はされる。すぐに分かったさ。お前のことくらい。」

「でも会いに来なかったじゃないですか。」

「お前の目の前には来てない。だがお前のクラスメートには会っていたんだよ、ついこの前にな。」

そうして父は続けた。

僕が相槌を打つこともできない程、間を空けずに話し続けた。

この間がなかりうと僕は相槌さえ打てないだろうと思っていた。確実に心臓が重たくのしかかっているからだ。

「クラスメートが言っていたんだよ、何人も……」

『伊藤雄くんは生徒会長になれなかった、という理由だけで生徒会長の人をいじめたあげく怪我をさせた。』

つてな……………。

絶望だよ…………、まさかお前がそんな人間に変わり果ててたなんてな。

悪い、会議が入っている。もう俺の前には現れないでくれ。」

父が再び消えていく。

ここで普通ならば『母さんの治療費だけでも下さい』と言えただろう。

今、普通ではない状況なのは言うまでもない。

まさか・・・まさかそんな理由で夢だった父を失うなんて思ってもなかったからだ。

もちろん正確には少し内容が間違っている。

僕が鈴科を怪我させたのは、単に鈴科にいじめられたからだ。その仕返し。

だが、僕がし返しさえしてなければ・・・。

間違いなく僕と父さんは昔の関係のまま続けられていただろう。後悔が僕を襲う。

理由は・・・自分が原因なのだ。

ふと、また考えていた。

昔の僕はとうだったのだろうか？

鈴科からイジメを受けた時もそうだった。

『鈴科がもうこんなことしなければいいんですけどね』

そう言い、願っていた。

でもあるときを境に僕は鈴科を憎み始め、こうとまで言っていた。

鈴科に仕返しをしているとき、三日月の『楽しいね』という発言に
対し、

『うん』

そう答えているのだ。

明らかにあのときは楽しんでた。

そして、鈴科が苦痛を味わうのに快感を得ていた。

行動が——過激になってきている。

僕は確実に・・・変わってしまったている・・・。

もう、穏やかな自分はいない。

先生を騙し、三日月と二人で裏を操作し・・・

そんな自分がここにいる・・・。

僕はゆっくりとその足を前に運び出した。

背は曲がっている。

手は下に垂れさがっている。

前は見えていないに等しい。

いつしかまた夜になっていた。

呪い天使 43 『再度』

呪い天使 43 『再度』

『伊藤雄くんは生徒会長になれなかった、という理由だけで生徒会長の人をいじめたあげく怪我をさせた。』

僕のクラスメイトが父に告げた言葉だった。

父はそれに大きく絶望した。

僕との関係を零にしようと、この瞬間決めていたらしい。

母さんの治療費について話す隙さえも与えてくれなかった。

この言葉、実際には間違っている。

僕は鈴科に対し“いじめ”をしてはいない。

ただ“仕返し”をしたただけだ。

さらに言えば理由も全く異なる。

生徒会長になれそうにないから、という理由でいじめたのは僕ではなく鈴科。

そのあまりにも酷く残酷ないじめに僕と三日月は仕返しを考えたのだ。

全て鈴科の自業自得なのだ。

だが——良心を思い出せば・・・

結局仕返しなぞしなけなよかった、の結論に至る。

理由はどうであれ、僕は鈴科を怪我させた。

その結果は変わらない。

父が僕の前から消えた。
その結果も変わらない。
僕のせいである。

良心に振りかえっているとき、僕は次第に仕返しを楽しんでいた。
鈴科の苦しむ様子をあざけ笑っていたのだ。
昔の僕だったら考えられない行動。
もう、僕は変わってしまったているのだ。

何かかが心につまり、息苦しく、歩くのも遅くなっていく。
ため息については深呼吸をした。
疲れも早くなっている。

そして——信じるあてがいなかった。

僕はこの時絶望していた。
誰もかも信じられなかった。

一度割りきった、鈴科の『呪う、殺す』だとかの脅しも、どうやら本気のようなのだ。

トラックが僕に突進してきた。

自分はタフだな・・・とつくづく思った。

よく生きていたものだ。

だが二度目はないだろう。

ここから先は完全に逃げなければならない。

さらにはいつも夜遅くに襲ってくる鈴科からもより注意を払わなければならない。

もしも鈴科がナイフをポケットにでも忍ばせていたのならどうだろうか？

後ろから追われて首をすっ・・・と切るだけで僕は天に昇る羽目になる。

母さんが生きている限り、母さんを助けなければならぬ。今は終わらない限り、

僕は死んではいけない。

次に頭をよぎったのはお金だった。

お金のあては、もう他人しかない。

借りるしか、手がなかった。

危険なこととは知っていても、それしか道がなかった。

もちろん闇には手を出さないつもりだ。

あくまでも有名で安全な普通の金融機関に行く他ないのだ。

あたりが暗くなりはじめたのは、自宅の最寄り駅に着いた頃だった。

暗くなりはじめると、というよりはいきなり暗くなった感じがした。

だからまだ真つ暗とはいえない。

空の色は見ていなかった。

ただ目線の先にあるアスファルトに日がないだけだ。

なんとなく暗いのだろう。

夕暮れではないが夕方だろう。

ふと、いつも視界にある地面に映った影を見ると、左右にユラユラと揺れている。

また、今日もまた鈴科が僕を襲ってくるのだろうか？

・・・少し早いか。

猫の声にも脅え、道を聞いてこようとするおばあさんにも脅え、物音立つたびに、僕は疲れきったその足を走らせた。

昔と同じに戻っていた。

何もかもが怖い。

恐くないものなどない。

「いたっ・・・」

父のいる駅に着いたばかりに、交通事故にあったことを思い出していた。

実際は事故じゃないから言い間違えか。

そう・・・僕は命さえも狙われている身なんだ・・・。

鈴科、不良、そして神。

すべてを敵に回してしまったようだ。

身を縮め、体を震わせながら偶然通りかけた公園で僕は体を寝かせ、休めることに決めた。

また、猫の声が聞こえたが、僕は冷たいベンチの上で強引に目を閉じた。

目が覚めるとそこは真つ暗な世界だった。

景観も、音も、雰囲気も。

全て闇。

鳥肌が瞬時に立つ気がした。

また棒になった足を動かし始めた。

やっとこ見えてくる、大きな金融会社。

CMでも見たことがある。

そこで母さんを救える分だけのお金をもらおう。

貯金はもう、あとほんの少しの日の入院費しかないんだ。

「伊藤ー！！！！」

やっぱり下を向いている僕の耳に、懐かしい声が聞こえた。

一瞬脅え、逃げようとしたが・・・

・・・それは・・・一番聞きたい声で、その顔は一番見たかった・・・。

そう・・・そこには三日月がいた。

「伊藤！伊藤だよね・・・！？」

「三日月・・・？久し振り・・・」

「・・・うん・・・、久しぶり・・・。お母さんは・・・どう・・・？」

「ああ・・・」

これでも元気に接したつもりだ。

だがやつれている感が三日月に伝わってしまったようだった。

さらに三日月の気を落とさないためにと

「今からお金を借りに行く」とだけ伝えて他のことは何も話さなかった。

しかし、多少の世間話をすればするほど、僕の心は開き始めていた。

「でさ、学校はどうなの？」

当然僕の質問である。

だが、理由の知らぬ沈黙が流れた。

明らかに三日月は下を向いている。

僕の顔はまた凍ってしまふ。

・・・何故返答に困るのだろうか？

「実はね・・・私・・・学校やめたんだ・・・。。。。。」

凍った表情が溶けそうになかった。

顔どころじゃなく、体全体が動こうとしない。

震えることさえない。

影を見た僕はそれを確信していた。

理由を聞いたのはその数分後だった。

「理由は二つあるんだ……。驚かないでね……」

前ふりが何か危ないものを後ろに控えてる気がした。

たまった唾を一度にのみこんで、僕は三日月の言葉に全神経を集中させた。

「学校で、鈴科の怪我は伊藤がやったんじゃないかって、噂されてるのは知ってるよね……？」

他にも……アドレスを捲いたこと、上履き、教科書とか全部……
・何故かばれてるの……。

でね……同様に、私も疑いの目が掛かっちゃってね……。
都宮も水沢も、私に話しかけづらくなっちゃって……。

……私……一人になっちゃたんだよ……。

┐

三日月は想像以上に重いものを抱えているようだった。

自分のせいで三日月がこんなにも辛い思いをしている。

そう思うと、聞いたその瞬間に涙が出てしまった。

ただただ謝りたかったが、その口が完全に閉ざされた。

同時に自分もショックだった。

バレるはずがないと思っていたが、実際には失敗していた。

……自分が……凶悪な人間に見られている……。

きつと先生にもバレているのだろうか？

いや、三日月は噂と言っていたはずだ。

だが先生に噂が届かないとはい切り切れない・・・

終わった・・・

例えば証拠がなかつと、僕が地元で生きる希望が消えている・・・

状況は最悪だ。

僕は眉さえも動かさなかった。

そんな僕を見て、安心させようとしたのだろうか？

三日月はが明るくふるまって会話をつなごうとした。

「でもね、やめた原因はそれだけじゃないんだよ・・・！？」

僕は三日月の顔を見上げた。

三日月がバックから何やらファイルのようなものを出している。

表情は、完全な笑みだった。

「私ね、この前の少女コミックで、入選しちゃったんだよ・・・！」

僕の体にまとわりついている氷が完全に溶けた。

もちろん自然と笑顔になっていた。

「でね、この前編集部に行つてさ、本格的にまた入選しちゃってね・

・
今度から連載始まるんだ！！で、今その編集室へ行く途中なんだ！」

こんなに生き生きした三日月をみるのは初めてだった。

これほどにまで若いこの子が、もう連載が始まる。

よほど実力があつたのだろう。

以前見せてもらった時も絵は上手だしストーリー構成も緊迫のある内容だった。

夢が叶ったんだね、と僕はトーンのあがった声で言った。

「じゃあ、今から編集室行こう！そのあとお金借りに行くから！」

「ありがと！でもちよつと遠いよ・・・？電車賃は私が出すから・・・！」

「そんなくらい着いてくよ！お金は・・・よろしくねっ・・・ははっ・・・」

「うん！じゃあまたいろいろ話そっか？」

「うん！」

二人並んで歩いた夜道。

その後ろの電信柱には、それを見つめる影が一つ。

呪い天使 43 『再度』（後書き）

『作者自身、三日月がようやく書けて嬉しい次第です』

呪い天使 44 『惨事』（前書き）

『44話です。不吉ですがどうぞよろしくお願いします。』
0 〽マル〽 BY

呪い天使 44 『惨事』

呪い天使 44 『惨事』

母さんを救うためにお金を借りる道の途中、そこには三日月がいた。

学校での状況は最悪だった。

僕と三日月が鈴科にしたことが全てバレているという。

そして三日月は独りになってしまい・・・

自ら退学した、という。

しかし、辞める理由は他にもあった。

「私ね、この前の少女コミックで、入選しちゃったんだよ・・・！」

連載が決定したと告げる彼女の顔は紛れもなく輝いていて、僕は閉ざした心が開きそうになるを感じていた。

二人並んで歩いた夜道。

その後ろの電信柱には、それを見つめる影が一つ。

「でさでさ、どんな漫画をかくの？」

「ちよつとドロドロしてるかなあー？」

「少女コミックってそんななのかよっ！」

「うーん・・・。私のはちよつとジャンルが違つかも。」

「でも期待してるよ・・・！絶対にお金あったら全巻買いそろえる

から・・・！」

「・・・ありがとう・・・・・・・・！今から・・・お金借りに行くんだよね・・・」

そうだった・・・僕は今お金を借りる最中なんだ・・・そう改めて気づかされた。

もちろん計画的なプランをたてるつもりだ。

CMやらドキュメントやらでそういうのは嫌というほど見てきたはずだ。

返せる分だけ借りればいい。

母さんの病気さえ治れば・・・そう、なんとかするはずなんだ。

そんな夜道、僕と三日月の足がそろい始めた。

まるで足音がひとつしかないような、そんなシンクロを感じた。どうやら雰囲気はこの闇夜のように暗く沈んでしまったらしい。さっきの会話から一転、僕たちは黙りこくってしまったている。さらには互いに自分の影を見始めた。

街灯に照らされ、伸びたり縮んだり、前へいたり後ろへいたり。

目ではそんな影を見つめ、耳では一体化するその足音を聞いていた。

足音が一つしか聞こえない、そんな夜。

いつも決まって起きることがたった一つあった。

それを気付くのはそう遠くない。

否、もう間近にまで迫っていた。

僕たちの足はきれいにそろっていた。

もちろん同様に足音も同時に聞こえてくるはず。

互いに影を見ていたが足も見ていたんだ。

自分たちとは違う足音が聞こえてくることに僕は過剰な反応を見せ

た。

「ちよつと．．．走つてくれる．．．!?!」

「えっ!?!え．．．!?!何．．．!」

「お願い．．．!鈴科だ!」

「えっ!?!」

僕は有無を言わずに三日月の腕を持ち、走りだした。

三日月は片手に持ったバックを揺らし、ひっぱられながら走っている。

「．．．実は．．．ここ最近、鈴科に襲われてるんだ．．．幽霊みたいな感じで．．．手が冷たくて．．．

そう．．．跳び箱のあの事件の時、鈴科が僕に言つたあの言葉、呪う、殺す．．．。．．．これを実行しようとしてるんだ．．．

!

逃げてても逃げてても逃げ切れない．．．。手は本当に．．．本当に冷たい．．．。

この前も．．．鈴科の仲間にトラックで轢かれ殺されそうになつたんだ．．．!」

「．．．．．え．．．．．?」

三日月は僕の腕を引き留めた。

僕は完全に足を止めざる得なかった。

そして、三日月は震えだした。

まさか．．．鈴科は．．．．．。．．．。まさか．．．．．。

時が止まることを覚悟した。

「伊藤……。鈴科……。鈴科はね……。まだ病院よ……。」

想定外の答えに僕は戸惑った。

でも、覚悟したとおり、時が止まっている。

自分の表情が全くもって見えない。

「本当よ……。アレ、実は重症だったの……。

体の到る所が複雑骨折してたの……。

脳にまで被害があつてね……。

スポーツさえもできない体になっちゃったんだって……。

それどころじゃなくて……。

……。一生車イスの生活かもしれないんだつて。」

近頃衝撃が大きすぎるが、これに関しては最大級のトドメ的衝撃だった。

とたんに目まいが僕を襲った。

ふとゆつくりと上を見上げれば雲に隠れた月がある。

星を探す僕。

あつたと思ったら飛行機だったり、なんだったり。

あれ・・・今何を考えているんだっけ・・・。

三日月の顔を見ればすぐに思い出した。
だけでもその事実は受け止めたくない。

そうだ、僕は、恨んでいたとはいえ、一人の人間に、障害を与えたのだ。

一生彼がかかえていく、その障害に。

思い出してみれば鈴科は無遅刻無欠席の健康なやつだった。

さらには運動もできていた。

何部だったっけ？

中学時代には陸上部で関東大会に出たとも聞いたことがある。

そんな彼の人生を・・・

僕は一瞬の血の迷いで、崩してしまった。

例え僕がいじめられていたのだとしても・・・

僕は、鈴科を心の奥底から憎んでいたのだとしても・・・

まさか障害をおわせるとは、全く思ってたなかった。

気付かなかったんだ。加害しているときは。

人を殺したかのように僕の心臓は重くのしかかった。

やってしまった後ではもう遅い。

何故、何故気付かなかったのだろうか・・・？

あれ……？そっだ……じゃあ、今まで僕を襲っていたのは……
一体……

僕は三日月を再度引っ張った。

しかし、進行方向はさっきと逆だ。

すぐ後ろ向きに逃げようとするソイツが見えてくる。

三日月は……どうなっているのなんて気づきもしない。

僕は目の前にいるソイツしか見ていなかった。

近づいてくる、街頭がソイツを照らす。

僕はソイツが照らされた瞬間、その腕をつかんだ。

「……………」

呪い天使 44 『惨事』（後書き）

『本来この“呪い天使”は44話で終わりにする予定でしたが、内容が書いているうちに変更して50話で終わりそうです。』

呪い天使 45 『呪人』

呪い天使45 『呪人』

帰り道、三日月に出会った。

会話の内容は衝撃的なものだった。

「伊藤……。鈴科……。鈴科はね……。まだ病院よ……。。」

鈴科は今病院にいる。

一生抱える障害に毎日おびえながら。

いくら鈴科が僕に卑劣なことをしたと言っても、障害を持たせてしまったのは大きなことだ。

鈴科も背負っていくだろうが、同様に僕もその十字架を背負っていかんだ。

一生外れることのない、大きな鎖に繋がれたその十字架を……。そしてもう一つの不安が胸をよぎる。

今まで僕を襲っていたのは……。一体……

僕は三日月を再度引っ張った。

近づいてくる、街頭がソイツを照らす。

僕はソイツが照らされた瞬間、その腕をつかんだ。

「……………」

この、細い腕。

冷たい体。

後姿で、その顔が頭に映し出されるよう。

・・・コイツの顔は・・・忘れられない・・・。

「・・・な・・・なんで・・・なんでだよっ・・・う・・・
うわあああっつ！」

フサフサしてあと少し伸びればヘルメットになりそうな、その髪。
そして冷たい・・・目。

僕が右手に掴んだ彼女の手は、小さく丸まり、小刻みに震えている。

後ろで震える小さな彼女の顔には、既に涙が流れている。
そして、僕の目にも。

「・・・水沢・・・
」

僕を襲い、追いかけて、精神的にダメージを与え続けたソイツは・・・
親友だと思い続けていた、そんな水沢だった。

彼は、下を向いていない。

こっちを向いている。

眼球に映る月の光がくつきりと見えるほどに、こっちを見ている。
僕がつかんだその腕を、彼は大げさに振りほどいた。

「ははっ・・・はははっ・・・！ははははははっっ！はっははははははっ！」

その声は響いた後、闇に消えていく。

しばらくその声はこだましているかのように繰り返される。

実は顔が水沢に似ているだけの人なのか、とも頭に疑問がよぎる。

足の先から頭部に向けて一瞬の内に鳥肌が立っている。

髪の毛が逆上したように上を向いてるとも錯覚させられた。

「なんで・・・なんで・・・？なっ・・・なんでなんだよっ・・・！？」

月の光が反射した目で下から覗くように僕を見てきた。

別人とは思えない。

「・・・簡単に言えば、お前が最低最悪の人間だということに気付いたからだよ」

「嘘だ！そんなはずがない・・・！またそれも鈴科が嘘についてお前を・・・」

驚きで息が乱れてるのだろうか・・・息が続かない。

息継ぎをしようとした瞬間、水沢は狙ってたかのように口をはさむ。

そして、言葉を並べ始めた。

「・・・」

『計画実行ノート』

『都宮のお金を利用して遊び、さらに都宮のお金を無くす』

『鈴科の靴をボロボロにして、僕と同じ状況にしてやる』

『鈴科の机から教科書を取り出し、鈴科が僕の所へ寄って激怒しているときに三日月がこっそり教科書を戻す。』

『鈴科のアドレスをネットに流す』

『都宮と鈴科の物を無くし続ける』

『そして鈴科に体育の時間、怪我を負わせる。』

・・・何それ？なんて言わせないぞ？

「・・・・・・」

僕と三日月が二人でノートに書いた作戦である。

まさに水沢は僕たちの陰謀を見つめていたのだ。

ということは、跳び箱事件の後、僕と水沢が再び親友関係を戻した

時から知っていたのだろうか？

そうだ・・・騙されていたのだ。

彼はノートに書いてある跳び箱の事も、すべて、何もかも知っていたのだ。

では、三日月が言っていたように僕が犯人という噂は噂ではなく、事実としてクラス中に知れ渡ったのだろうか。

水沢がそのノートを見て、クラスにそのことを告げ、僕と三日月は凶悪犯と見なされ・・・

三日月は転校せざる得ない状況にたたされてしまっただろう。

・ ・ ・ 僕たちのすべては崩されたのだろう。 ・ ・ ・

「俺は知ってる……。お前らが鈴科に対して行った、イジメを」

「イジメじゃない！……し返したただけだ……！」

「・・・さて、鈴科は君に怪我をおわすようなことはしたんだろうか？」

「
・
・
・
最初に
・
・
・
」

「最初に殴られた？それが鈴科が背負うであろう障害とイコールでつながるのか！？」

ダメだ。……言い返せない。……僕は……終わっただ。……。

「そして都宮も言っていたとおり……お前は俺や都宮を裏で嫌ってたんだってな？」

これは初耳だった。

そして身に覚えが無い。

上前が転校する丁度その時、気づけば水沢は知らずに僕らの前から消えていたんだ。

なのに何故・・・！？

これは鈴科の陰謀だと今初めて悟った。

「それは鈴科の陰謀だ・・・！ふざけるな・・・騙されてんじゃないよっ！」

「またまた人のせいにしようと・・・やっぱりお前は最低だよ。でもこの話は本当に事実だよ？ 上前の転校時、僕に告げた後、都宮は同時にこうも言った。

『私さ、由奈ちゃんとは仲良い今までいたから一応伊藤とは一緒にいるね。』

『不本意だけど、由奈ちゃんとはさ・・・友達でいたいから・・・』

ってな。さらにこの前僕たちは表面上で仲良くなった時期あったよな？ 鈴科が病院に運ばれた直後だ。都宮はな、俺にそのことを一回も訂正しなかったんだよ・・・お前、本当に最低だよ。お前みたいなの・・・初めて見た」

都宮にも僕は嫌われていたようだ。

三日月もそうなんじゃないかと僕は被害妄想に襲われた。

三日月を掴んだ手を振り払い、手で体を押さえ始めた。

・・・三日月がどんな反応をとったかなど知らうともしない。

「この行動は、確かに鈴科の意思にそつたものだ。『呪う、殺す』という言葉だ。俺はお前を精神的に追い詰めようと努力した。鈴科の仲間の暴力団一味と手を組んで。勘違いするなよ、俺はこの行動を自らすすんでやったんだ。病室で動くことさえもできない鈴科に俺が提案した。お前が病院に行くことを目撃したという、俺とアイツが病院に行った時より前に御見舞いに行つてたんだよ。鈴科はゆつくりと折れそうな首を振つてうなづいてくれたよ。・・・俺は、人をこんなにも殺したいと思つたのは初めてだよ・・・」

僕が目撃した病院に行く人——クラスでオドオドしているあいつ——と・・・

そのもう一人が——水沢だったのか・・・。

そしてその前から御見舞いに行つていたというのか・・・。

さらに、普通は『死んでほしいと・・・』とまでは、いかないのではないだろうか？

加害者になつてもよいという覚悟さえもあるのだろうか？

もちろん水沢は手にナイフなど用意するはずもなく、僕の心臓は助かったが——

明らかに心は彼の目に押し潰されていて・・・
そして、死んだ。

「じゃあな。」

水沢は消えていく。
闇へと消えていく。

一瞬のうちに彼は消えていった。

視界から消えたが、僕の胸のあたりに彼が居座り続けていた錯覚に襲われた。

ふと後ろを見ると、三日月はこういった。

「私はっ・・・うっ・・・うっ・・・敵じゃないっ・・・から
ゝ・・・ねっ・・・っ・・・？」

呪い天使 45 『呪人』（後書き）

『こんにちわ、〇くマル』です。ここまで読んでくれた皆さん、
本当にありがとうございます。【呪い天使】を最終話までどうぞ
よろしくお願いします。』

呪い天使 46 『闇夜』

呪い天使 46 『闇夜』

闇夜に僕を襲っていたのは水沢だった。

クラスで、鈴科の跳び箱の事故の加害者が僕だと告げたのも水沢だった。

三日月の犯行もクラスに広まり、退学まで陥れられていた。

そうして水沢は消えていった。

ふと後ろを見ると、三日月はこういった。

「私はっ……うつ……うつ……敵じゃないっ……から……
…ねっ……っ……?」

震える声で三日月はそういった。

三日月は、僕が想像する以上に優しかった。

今までその優しさを特別視することなく、それが普通だと思っていた。

もしも彼女が僕の前から消えたらどうなるのだろうか？

きっと僕は死んでいただろう。

生きているとしても、ただただ一日が過ぎるのを待っていたただけだろう。

そんな彼女を僕は水沢との会話で手をふりほどこいだ。

彼女を突き飛ばしたその手を僕は見つめ続けた。

僕は一瞬だろうがなんだろうが、彼女を疑っていたことを思い出していた。

こんなにも僕を理解してくれて味方になってくれた三日月を、僕は水沢との会話中に僕は我を失い、手を激しくふりほどいてしまった。

僕は膝から崩れ落ちて三日月を一瞬見つめた。
そして、居場所を失ったその手を掴んだ。

「……ごめん……一瞬……その手を……ふりほどいて……少し……疑った……でも……今は違う……しかも……僕のせいで……たい……退学に……本当に……ごめん……」

三日月は首を横に振ってくれた。

大丈夫、という意味なのだろうか。

謝らなくてもいいよ、という意味なのだろう。

たびたび僕が言う『ごめん』も彼女はずっと首を横に振っていたことにより確信した。

首を横に振るたびにサラサラした髪が乱れ、彼女の顔を包み込んだ。

僕も三日月も下しか向いていない。

片手に握った手提げの中から少しだけ出ているマンガの原稿が、風が吹くたびにヒラヒラとめくられて僕の眼に留まった。

数分に一回のペースで僕は謝る。

首だけを振る三日月。

そして上を向いたり、横を向く僕。

通行人がいなのが幸いだ。

三日月は何も言わずにただただ涙を流している。
号泣ではない。

うずくまりながら顔を見せようとしな。

表情も見えない。

だから、涙を流している、というのは推測にしか過ぎないのかもしれない。

時間は刻々と過ぎていく。

もう、30分はたったのだろうか？

次第に月の位置も変わってきてる気がする。

・・・もちろんそんな気がするだけだ。

目線の行く先は最終的には髪で顔を隠した三日月へとたどり着き、
僕は謝るしかできなかった。

更に数分たった後だった。

三日月が一言残して帰ろうとした。

「ごめんね・・・」

何故謝るのかわからなかった。

悪いのは全て自分なのに。

それがまた辛くて仕方無かった。

もう既に少し三日月との距離が遠ざかっている。

「ごめん・・・！ごめんね・・・！でも三日月がいてすつ
く嬉しかった・・・」

僕は彼女に叫びかけてみた。

彼女は流していた涙の粒を空中に飛ばしながら振り向いた。

振り向いたその瞬間だった。

三日月も、叫んだ。

表情が強張ったのが感じられた。

そして叫びながらこっちへ走ってくるのだ。

当然僕はその意味が分らなかった。

よく見ると街頭以外の光が三日月を照らしていて、
伸びた僕の影が三日月にまで届いてたのだ。

「危ないっ——！！！！」

何も聞こえていなかった。

後ろからくる、

トラックの音など。

後ろをふと振り向く。

見覚えのある・・・トラックだ・・・。

あのとき、東京に来たばかりの僕を襲った、あのトラック。

窓ガラスに映るのはやはりあのスキンヘッドの暴力団で・・・

・・・助手席に誰がいる・・・

もう、トラックは目の前にある。

動き、逃げることをまたもや僕は忘れていた。

だから窓ガラスに映る二人の男の姿がよくみえた。

ブレーキさえもしないそのトラックがあと1秒もたたない間に僕に
激突しようとしている。

．．．助手席．．．．．なんで上前が乗ってるの．．．．．
．．．？

ダッ！．．．ダダッ．．．．．！ガガガッガッ．．．ギイ．．．
！

僕はフェンスに飛ばされた。

トラックには当たってない。

当たったのは三日月の両手だった。

悲鳴と共に三日月が宙を舞い、地面にたたきつけられ、そして引きずられた。

上前を乗せたトラックはブレーキせずに闇夜に消えていった。

呪い天使 47 『一生』

呪い天使 47 『一生』

数分前の上前はその頃・・・

「・・・離せっ！離せつつっ！」

「ちよっただけ乗るだけだよ！怖がるなよ。拉致しようってんじゃないんだからさあ！」

スキンヘッドのあの男。

上前も写真を撮られたとき、夜の都会を歩いた身だ。

このスキンヘッドの男が鈴科の仲間だということを知っている。

「俺はお前に何もしない」

スキンヘッドの不良は結局いつも、何もしない。

その言葉には信用できたが、何をするかがわからなかった。

そうして上前は『離せ』と言い続けたのである。

トラックに乗り込む上前。

そして、エンジンがかかりだした。

数秒後、運転席の窓からは二人の男女が確認できる。

「おい・・・！おまえ・・・！そこに人がいるんだぞ・・・！やめろよ・・・！」

「悪いな。これが今すべきことなんだ。鈴科も面白いやつだよ。お

金が簡単に手に入る！」

「・・・伊藤・・・！？三日月・・・！？えっ・・・！おい・・・！
ちよっとお前！！」

ブレーキは踏んでいない。

「やめろっっっ！やめろー！ 伊藤！・・・どけっ！はやく逃げろ
！はやく・・・！はやく・・・！」

「これでまたしばらく遊べるなっ、ははっ
」

「危ないっ——！！！」

——・・・

「危ないっ——！！！」

僕は後ろからくる、トラックの音など、全く聞こえていなかった。後ろをふと振り向く。

見覚えのある・・・トラックだ・・・。

あのとき、東京に来たばかりの僕を襲った、あのトラック。

窓ガラスに映るのはやはりあのスキンヘッドの暴力団で・・・

・・・助手席には上前がいた・・・。

彼もまた・・・僕を嫌っていたのだろうか・・・？

もう、トラックは目の前にある。

またもや、動くことを僕は忘れていた。

「伊藤つつつ！危ないっ！！！！」

一瞬のうちに三日月が両手を僕に突き出し、僕は抵抗することなくフェンスにとばされた。

目線が三日月を向いたときには三日月とトラックが接触し合っていた。

眼が見開き、声が出た瞬間には、視界に三日月は映っていなかった。

スピードを上げ、映像がぶれている、トラックの大きな荷台しか見えない。

しかし、耳からは確実に三日月の悲鳴が確認された。

「きゃつつつ！！」

その声は甲高く、暗い夜道を更に怖くさせるものだった。

三日月の声は一瞬のうちに響き、一瞬のうちに消えていった。

「うわあああ——！！！！！！」

僕の声はトラックの騒音さえもかき消した。

三日月が宙を舞ったのは一瞬だった。

すぐに地面に叩きつけられ、トラックの端っこの方で飛ばされ、再度引きずられ、

気づけば30メートル以上先のフェンスに三日月が横たわっていた。

また足が固まったんじゃないか？と不安になった。

だが今回ばかりは違く、足が無意識に三日月の方へ飛んで行った。

「……三日月……！！」

地面は既にドロドロした液体で染まり、小さな水たまりのようになっている。
つていた。

慌てて僕は三日月のポケットから携帯をとりだし、救急車を呼んだ。

そこまでは無意識の行動だった。

救急車を呼び終えた後、朝起きたかのようにパッと目を開き、始めて三日月を直視した。

また、僕は叫んだ。

彼女はゴロゴロと悶え苦しんでいた。

目を強くつむり、歯を食いしばっている。

この表情は、誰がどこからどう見ても、苦痛の表情だった。

ふと目線を変えると左手が手提げを持っている右手を掴んでいる。

血が出ているのは・・・頭と手と足と・・・否・・・体全体だ・・・。

とつさに僕は自分の服をちぎって応急処置をしようとした。

とりあえずまず初めに頭に服をあてたが、一瞬にして服は赤い液体が染み込んでしまった。

ふいに三日月の姿がぼやけてくる。

腕で目をこすり、ハンカチ等を取り出して止血をすすめた。

もう、全く止まりそうにないが、僕はハンカチを当て続けた。

「誰かつ・・・！助・・・助けて・・・助っ、けて下さいっつ・・・！来て下、さい・・・！」

しかし誰もいない。

・・・誰も来ない。

僕は必死に叫び続けた。

数分後、すぐに救急車が来て止血作業を行った。

もちろん車両の中に運びながら。

運良く病院もすぐに決まった。

救急車にいる手の空いた人が警察に電話をかけた。

そういえばこれは事故であり、事件なんだ。

引き逃げなのだから。

車両の中で僕は頑張れ、と安易な声をかけることしかすることができなかった。

何時間も救急車に乗ったつもりだったが時間を見るとほんの数分で、三日月は救急隊員が走りながらタンカで手術室に運ばれた。

ここ近頃、鈴科が言っていたことが当たってきている。僕は確実に呪われている。

でも僕が、神から、悪魔から、天使から呪われようと……三日月が助かれればそれでよかった。

手の形が神頼みで固定している。

時間が一向に立とうとしない。それこそ何時間も待たされた。

時計の針は一秒毎に次へと進むのに、その一秒が一分にも二分にも感じられる。

不思議な気分だったがこれはもう慣れている。

時は深夜を指していたが僕の頭に寝るなどという言葉は全く浮かばれなかった。

赤いランプが消える。

やっと手術が終わったようだ。

「命は助かりましたよ！」

僕は安堵のため息をつく。
大きな深呼吸からの、安堵のため息。

「しかし・・・」

「・・・この手提げ・・・彼女の物ですね・・・？」
「はい・・・」

「・・・一番の重傷は頭部ではありませんでした・・・
右手です・・・。もう2度と、2度と絵が描けないでしょう・・・」

「わあああつつつ——！！！！！！」

病院で僕の声がこだました。

呪い天使 48 『完結』（前書き）

『何故かこの48話のアクセスがやけに多いです。最初からお読みください。よろしくお願いします』

呪い天使 48 『完結』

呪い天使 48 『完結』

「・・・一番の重傷は頭部ではありませんでした・・・
・・・右手です・・・。もう2度と、2度と絵が描けないで
しょう・・・。」

「嘘・・・嘘だ・・・。」

「残念ながら・・・私たちも最善を尽くしましたが・・・治る可能性は、0に近いと言ってもようでしょう・・・。気持ちにはわかります・・・しかし・・・。」

あれほど、漫画家になることを夢に見ていた三日月・・・
実力を認められ、この若さで漫画家になり連載が始まるうとしていて・・・

鈴科のことがあったとはいえ、仕事のために学校をやめたのも事実・・・。
・・・。
・・・そんな三日月の手は、鈴科の手により握りつぶされた。
そういえば事故がおきたとき、三日月は右手をおさえていた・・・。

「・・・うわぁ――！！！！！！」

僕の声は病院内でこだました。

次の日だった。

病室に入ることが認められ、僕は朝から三日月の部屋に入った。
もちろん三日月は下を向いている。

・・・どこも向いていないのかもしれない。

右手にまかれた包帯が、すべてを物語っている。
体の到る所に骨折をした三日月は、ずっと同じ体制で朝の陽ざしを浴びている。

「・・・三日月・・・」
「・・・伊藤・・・」

僕は丁重に断りを入れ、ベッドの近くにある椅子に腰をかけた。
包帯の巻かれていないその左手で、三日月は僕の腕を掴んできた。

「……気にしちゃ、ダメだぞっ……！」

その無理に作った笑顔がまた辛かった。

なんでこの子はこんなにも強いのだろうか？

……夢が消えたというのに、人の心配なんてしている。

僕の瞳はうつすら湿っていった。

「……私がさ、勝手に伊藤を助けたんだよ……！ね。ほら……。
私は、伊藤を守れたんだよ……？それだけでも嬉しいよ……！
今日は早く帰って……お母さんのお金を借りに行きなさいよ……！
ね……！」

返す言葉が見当たらない。

結局僕は三日月の言葉の返答もしなければ相槌もつたず、
自分が言いたいことを言うしかできなくなった。

「……いや……僕の……僕のせいなんだ……！僕が鈴科に
仕返しさえしなければ……しなければっ……！」

「……違うよ……？私が……提案したんじゃない……。仕
返そうつて……」

「……でも……やっぱり……発端は僕で……ごめ……」

「謝らないでっ！」

三日月の怒鳴り口調は、初めて聞いたのかもしれない。

僕の謝りかけようとしたその口は閉ざされた。

普段の三日月は、喜怒哀楽の『怒』の面は全く見せない人だった。

その中での——『怒』

怒鳴った後、当然のようにくる沈黙に、三日月は訂正をし、謝った。

「……ごめんなさい……少し……少し感情的になってた……よ……」

低い声だった。

いつも聞くことのないような低さであった。

「……でも僕は……謝るしかできない……」

「違う．．．．．私が．．．私が自分で自分の夢を．．．断ち切っちゃったんだよ．．．」

その低い声が次第に高くなっていった。

細く、高く、今にも消えてしまいそうな震える声で涙をこらえ始めている。

今気付けば三日月の視線はどこも向いないわけではなく、下を向きながらもずつと右手に向けている。

．．．しかしその右手は動くことも許されていない様子。

本当に、三日月の手は漫画が描けなくなるのだろうか？

「．．私が．．私が．．うつ．．全部．．．．わっ、悪、いんだからあっ．．．」

「．．．．．」

ここでようやく僕の顔を見た。

顔をあげたと同時に溢れた涙が一気に流れ落ちていった。

その後、三日月は体を僕の方へ持って行き、僕の胸に抱きついた。もちろん彼女の右手は形だけで僕の体を全く掴んでいない。

その分左手が僕の服を強くにぎりしめる。
僕も彼女を腕で包み返した。
痛くないように、そっと軽く抱きしめた。

「・・・も・・・もうっ・・・私・・・うつ・・・漫画かけ、・・・
ないんだ、よっ・・・」

・・・夢が幼いうちに、断たれた。
あと一歩で叶うといったところで、断たれたのだ。

どうしてあの時、僕と三日月は夜道で偶然再開してしまったのだろう
う・・・

どうして僕は・・・あのトラックを避けられなかったのだろうか・・・

・

何故、今日、この日に事は起きたのだろうか・・・？

すべて、何もかも偶然だった。

しかし、その偶然で人が毎日死んでいくんだ。

死はいつでも偶然だ。

三日月の前に立ちはだかったのは、死と同様のものだった。

そう、道がない。

彼女が楽しんで生きていく道は、昨日、あの一瞬で閉ざされた。

「ごめん・・・僕が・・・僕が避けていれば・・・！！！」

「……鈴、科っ……うっ……鈴科っ……
うっ……」

もう、自分の力で何もすることができない。

きつと今発している言葉も彼女の意志とは異なるものだろう。

三日月は泣いて涙を流し続けているだけだった。

感情を口で発し続け、何かのせいにしようと逃げることしかできない。

過去など辿ってられない。

自分が過去、誰に何をしようと、今は今。

結局、死んでからでは遅いのだ。

「うっ……うっ……、……っ……つつ……、……っ……
っ……」

もう、三日月は声を出すことが出来ないまでに感情を狂わし、乱してしまった。

その感情は涙となって流れるが、その涙と心は流れるのをやめよう
としない。

僕も、我慢していた涙がどつとあふれてしまった。

・
・
・

数分後、無情にも看護婦が面会時間の終了を告げにやってきた。

・
・
・

僕は再度

「ごめんね」を発したが、やはり三日月は首を横に振ってくれていなかった。

・
・
・

病院を出て、僕は近くにある金融会社を求め歩いた。

・
・
・

歩く途中、過去の出来事が走馬灯のように思い出される。

【あ、僕、生徒会やりますっっっ！立候補します！！！！】

【伊藤君、このナイフは何だい？】

【ごめんね、こんなじゃすまないからね！】

【違うんですっ・・・先生・・・うっ・・・違うんです・・・うぐっ・・・
信じて下さいっ・・・】

【先生、私見てましたっ！伊藤君の教科書を鈴科君の友達が切り刻むのを！】

【伊藤君・・・この写真は何だい・・・？】

【当選したのは、鈴科君です。】

【俺さ、実は明日転校することになったんだよね・・・ははは・・・】

【ここ最近、そういえば水沢・・・見ないよね・・・】

【・・・時雨が・・・鈴科とっ・・・オルゴールについて話してたのっっ・・・！】

【私たちも・・・仕返すべきだよ・・・】

【金を返せ・・・！教科書・・・ふざけるなよっ・・・！】

【俺の教科書がない。伊藤の仕業としか思えない。信じろよ！】

【オルゴールの手紙・・・父さんの居場所だ・・・！でも今は鈴科を・・・】

【死なない程度に頼むよ。】

【たとえ死んでも・・・呪ってやるからな・・・絶対殺してやる・・・】

【都宮・・・？やっぱり・・・友達やりなおさない・・・？】

【水沢・・・。またさ、みんなで仲良くやろうよ。】

【上前が帰ってきたんだ！】

【『伊藤、死ね』】

【単刀直入に言う。あの跳び箱は君が仕組んだことなのかな？】

【母さん！？大丈夫！？今・・・救急車呼ぶから・・・！母さん・・・】

【ストレスや疲れによるものでしょう。状態が悪いのでさらに手術入院となります。】

【伊藤・・・学校違っても毎日のように会おうね・・・！】

【呪ウンダカラネ・・・僕八君ヲ・・・】

【くっそおっ・・・放せっ・・・！父さんー！おいつっ！】

【絶望だよ・・・まさかお前がそんな人間に変わり果ててたなんてな。】

【鈴科の事故のこと、伊藤が犯人って疑われて、私、一人になっちゃって・・・】

【伊藤・・・。鈴科・・・。鈴科はね・・・まだ病院よ・・・。】

【・・・水沢・・・。なんでお前が俺を襲っていたんだ・・・！？】

【伊藤・・・俺は、人をこんなにも殺したいと思ったのは初めてだよ・・・。】

【私はっ・・・うっ・・・うっ・・・敵じゃないっ・・・から・・・ねっ・・・っ・・・？】

【誰かっ・・・！助・・・助けて・・・助っ、けて下さいっ・・・！来て下、さい・・・】

【重傷なのは右手です・・・。もう2度と、2度と絵が描けないでしょう・・・】

【・・・私が・・・私が・・・うっ・・・全部・・・・・・わっ、悪、いんだからあっ・・・】

・・・

お金を借りた僕は、そのある分だけのお金を全て病院に出し、誰にも見られない暗い世界へと歩き出した。

完

番外編に続く

呪い天使 48 『完結』（後書き）

『ブラックエンドが好きな方はこの48話で読むのを切ってもらっても結構です。作者の意思としては50話まで読んでくれると嬉しいです。御観覧ありがとうございました。番外編（2話分）もよろしくお願いします。 B Y O 〽マル〽』

呪い天使 49 エピローグ 『番外』

呪い天使49 エピローグ 『番外』

「三日月先生、連載お疲れ様でした!!」

「いえいえ。これからもよろしくお願いします」

私は三日月由奈。ちなみに24歳。

自分で言うのも変ですが、一気に少女コミックの頂点付近まで辿り着いた話題の新人漫画家です。

8年前のあの絶望的だった事故。

それでも天使が私に舞い降りてくれました。

そうです。私の右手は奇跡的に完治したのです。

もちろん最初はリハビリなどで苦しく、涙を流す日々が続きました。

でも、今こうして漫画家になっています。

2年で怪我は治り、19歳のときから月刊誌で連載デビュー。

すぐに人気が出て、映画化になったり書籍化されたりそれはもうヒット中のヒット。

入院中ストーリーを考え続けたんだからこれくらいしてもらわなきゃ困っちゃうよね。

・・・少し自分の自慢話に花が咲き、過信しちゃいましたが、私は毎日がとても楽しいです。

『私はあなたを探してる』

これだ。

これが全国の少女にヒットしたのです。

題名はベタなのは気にしない。売れたんだから、気にしないの。ストーリー内容が気になる？

そりゃあもう、少女コミックの王道、恋愛ストーリーです。

私が入院してる時から温めた話をふんだんに盛り込めたのです。でもさつき編集長との会話通り、連載は終わっちゃったんだ。

「三日月先生！本当にあの漫画は面白かったよ。新時代の幕開けになるほどだよ」

「まあ、それも打ち切りなのですから皮肉なもんですけど」

「最後がね……。最後は展開がワンパターンになっちゃったからねえ」

「まあ、ヒット作つてのはそんなもんですよ。きっと」

「前向きだねえ！次、次作の連載期待してるよ！じゃあね、気を付けてくださいね！」

「はい。お疲れ様でした！」

口では強がつてるけど、実際は真逆なんです。

最後ワンパターンになったのは、一生悔やむだろう失敗だ。

いや、失敗じゃないかもしれない。

だって、もう思いつかなかったから。

人気な作品だったし、私自身も納得いかなかったから、

一か月に出す一話の量を大幅に増やしていたの。

それこそ週刊誌と同じくらい。

楽なんてしてはいられない！男と同じくらい私も頑張った！

編集長にとってこんなに嬉しい事はないんじゃないのかな？

たしかにページは増えて大変だけど、人気なんだし、その分本誌の売り上げも上がったから。

だから、毎日忙しかったし、ペンを握り続けてた。

そしてネタは次第にそこをつき、最後には展開が切り開けなくなっ
たんです。

仕方無い。自業自得だ。

今言われた、『次作の連載期待してるよ。』の返答は『はい』だったけど、

実際はそんなの無理。

言ったでしょ？私にはもうネタが底をついたって。

・・・はあ・・・どうしよう・・・もう、終わりがあ・・・。

ふと遠くを見ると辺りには春らしく青々とした緑が生い茂っている。

白いたんぽぽの綿毛が一つ、私の少し長い髪の毛に落ちていった。

ゆっくり手をあげ綿毛をとり、風に流して飛ばしてやった。

このたんぽぽの綿毛と違って、私はまた道がなくなったのかもしれないなあ。

あの事故から8年たった今、私はクラスの人たちのほとんどと会っていません。

もちろん私は街に出る暇も無ければ同窓会になんて行く暇はなかったし。

暇があっても行くつもりはなかった。

私は、鈴科の事故の共犯者として一目をおかれた身だ。水沢は『殺したい』とまで怒りを露わにし、伊藤を襲っていた。

でも、上前と都宮にだけは会っていたんだ。

まあその二人に会いさえすれば、いいのかもしれないけど。

私が絶望しながら入院しているとき、彼らはやってきた。

上前は自分が助手席に座らせていたと告げてくれた。

都宮は

「水沢に訂正し忘れていた」と泣きながら謝っていた。

そうして私と上前と都宮はずっと仲良いまま過ごして行けたんだ。

でも私は手術のために外国の病院に行ってから都宮たちとの連絡はさっぱりだったのです。

そういえば鈴科は・・・どうしたんだろう・・・？

兎に角私が今さら同窓会に顔を出して、喜れる身じゃないのはたしか。

否・・・逆に漫画で有名になったからみんなから声がかかるかもしれない。

サインくれ、なんて言われるかもしれない。

少し自信過剰だけど、人間なんてみんな現金な人ばかりだ。

絶対そう来るに決まっただけで、ついでに過去を許してくれるのだろう。

でもなんだか皮肉だ。

それに・・・許されたところで私は何も変わらない。

私は桜のトンネルの中を歩いていた。

風が吹く度心地よくなる。

そして風とともに桜の花びらが宙を舞う。

舞った桜に気を取られてる私は後ろから二度も声を掛けられていた

ことに気付かなかった。

「あのう・・・少し、手伝ってくれませんかあ・・・？」

高校生の男の子だ。

車イスで段差にひっかかっている。

「あつ、ごめんごめん！」

私は彼の車椅子の後ろ側を押してあげた。少し衝撃が大きかったかもしれない。
丁寧に押したつもりが雑に押してしまったようで、その子は「うひゃあつ」と間抜けな声でリアクションをとった。

「うわ！ごめん！大丈夫・・・！？」

「え・・・？全然大丈夫ですよ！・・・ありがとうございます！」

その子は無邪気に笑った。

不器用に、綺麗な靴を上下に振って喜んでいた。

そして「じゃあね、お姉さん」と一言言い、両手でタイヤを回して人ごみに消えていった。

・・・まだ若いのに・・・大変だな・・・

完全に顔が下に向き、肩がぐいっと曲がっている自分に気づいた。

「あつ！荷物編集室に忘れてきちゃったつ！」

自称「うっかりもの」でもある私はすぐに編集室へと走っていった。

「編集長！荷物、バックありあましたあー！？」

「おー！三日月先生！ありますよ。これですこれ」

「すみませんっ。これで何回目でしょうね？ははは・・・」

いつもこの会話だった。

私の中ではこの会話は定着している。

『うっかり私と相槌をする編集長パターン1』　なんて題を付けて暗記までしていた。

もちろん2など存在しないけど。

このパターン1は何度もあり、一字一句、全て覚えてるほどだった。

次の言葉は「どんまいだよ三日月先生。次からは気を付けてくださいね！期待しませんけど！」である。

相槌の言葉を喉のすぐそこまで出して準備する私は次の一声に首をひねらした。

「それよりも、丁度よかった！今ね、先生を探している男の人がいたんだよ」

「へ？・・・あ・・・・・・・・男の人ですか・・・？」

「三日月先生をずっと探していたみたいですすごい焦ってた様子だったね。『ここにいますか!?'』って。　なんだか怪しい雰囲気だったけど、ついさっき来たんだからちよつと追いかけてみるといいよ。少しボロい黒い服とジーパンを着て、手提げを背負っていたよ」

「・・・ええ・・・。。　まあ・・・一応行ってみますよ・・・」

恐らくその男は熱狂的なファンなのだろう。

もちろん追いかける筋合いもない。

でも私は何かを感知した。

すぐにそのにぶった足を走らせ、編集室のドアを大きく開けた。

「先生！バック！バック忘れてますよー！」

本能のように私はただ走り、追いかけた。

何か希望がつかめるような気がして。

何故だろうか？もう既に頭の中ではその人が一定の人物に決まっているほどだ。

妄想でしかないだろうか？

でもこの勘はなんだろう。

漫画家になると足が遅くなるのを日に日に実感していく。

健康のために一週間に一回定期的にランニングしていた私にはそれがわかる。

定期的には知ってる距離もほんの500Mだから体力はそこまでつかない。

足は普段使わない。

でも今回ばかりは使っている。

これほど早く走りたくなった気がしたのは初めてだった。

・・・あいつだっ！あいつが今信号にひっかかっている！！

私は全速力で走った。

いい年してこんなにも走る人はいないだろう。

高校以来見たことのない、全速力だった。

・・・風を裂いている気分だ。

風を裂くことができたのかどうなのか分からないが、私はとうとうその人の肩に手をのせることに成功した。

――勘はあたるものだ。

彼の顔がこちらを向いた瞬間私は満面の笑みを浮かべた。

でも、その向き方はなかなかシヨクなものだった。

手を払ったあと、少しだけ走って、パツと後ろを振りむいて、やつとその足を止めたのだ。

そして目は威嚇する目で、ゼエゼエと息を吐いている。

だけどそんな態度を取られようとなんだろうと・・・

やっぱし私の顔は笑顔のままだった。

彼もまた、笑顔になったから。

「伊藤・・・！伊藤だよね・・・！！」

つづく

次回

最終話

呪い天使 50 エピローグ 『最後』

呪い天使50 エピローグ『最後』

伊藤・・・

実に8年ぶり。

8年たつてもその顔つきは変わることがなかった。

大人になっただけ、顔の基本的作りは全く変わっていない。

「・・・三日月・・・！？三日月・・・だよねっ！？」

私は伊藤の体全体を見渡した。

多少痩せている。

そして表情は全体的に暗くなっている。

「久しぶりー！・・・覚えててくれたんだ・・・！嬉しい・・・！」

「久しぶり・・・ホント・・・忘れるわけねえーだろ・・・」

「・・・ここで立ち話しすんのもアレだしさ・・・ウチ来ない？」

「・・・・・・・・ああ、うん・・・・・・・・暇だから行くよ・・・・・・・・」

私たちは私の家に向かって歩き始めた。

もちろん事務所ではない。

もっと、20代女子らしい、生活感に満ちた家だ。

仕事場は・・・・・・・・いや、ある意味生活感に満ちているかもしれない・・・・・・・・。

歩きだして初めの第一声は、『バック忘れた!』だった。

身振り手振りのリアクションをとってしまったが伊藤は笑ってくれた。

笑いがとれたので良しとしよう。

会話は尽きることを知らなかった。

この空白の8年間を何していた、とか。

私も伊藤も仕事については語らなかった。

そしてお互いに、今の話をしなかった。

ついに私は都宮と上前のことも伊藤に話した。

伊藤は安心した様子だった。

表情が一気に明るくなっていたのだ。

気分がよくなったのか、伊藤は嬉しい報告を私にしてくれた。

「母さんがさ、病氣治ったんだよ!」

私にはそれが嬉しすぎた。

この年にもなつて大きくジャンプした。
もちろん周りにだれもいないのを確認した後。

「で・・・お金の方は・・・どうなの・・・？」
「・・・・・・・・」

少し伊藤は黙った後、口を開きはじめた。

伊藤がそれを語るまでに時間がかったので私はとても申し訳なくなっていたのは言つまでもない。

「まだ・・・返済が終わらないんだ・・・。実は今・・・借金取りに襲われているんだ・・・」

さらに話を聞けば今本当に借金取りと戦う毎日で、母は借金取りに知られることなく兄弟のいる田舎に逃げているそうだ。

——伊藤は母に以前伊藤と鈴科のやりとりを全て話したともいう。

それを聞いた母はすべてを受け入れ、病気がすぐに治ったことだ。伊藤は借金を返すために精神的にも体力的にも辛い仕事をしていたのだ。

私が漫画家になつて裕福になつている間、ずっと・・・ずっと・・・。

伊藤の母も内職をして、少しずつ返済を手伝っているのだ。

しかし伊藤のその痩せた体は私には少々痛々しかった。

やはりそれだけの借金をしていたのだらう。

「でも、今結構困りものでさ……。もう仕事が危ないんだよね。色々事情があつてさあ……」

「え……。あ……。私さ……。結構……。お金……。あるけど……」

「あ！それは大丈夫だよ……。うん」

「え……。でも……」

話はすぐに切り替わった。

伊藤がとつさに替えたのだろう。

少々話題が暗くなっていたが、そのおかげですぐに明るくなった。

家に着いた。

自分でも驚くほど女子の一人暮らしに最適なオシャレなマンションだ。

オートロックを解除して、私は部屋を案内した。

私たちは部屋に入ってお茶を飲んだ。

部屋は、普段使ってないため綺麗なままである。

仕事場に連れてこなくて大正解である。

「でさ……。今日何で編集室に来たのお？」

「それは……。いつも寝ている公園で雑誌が偶然落ちていたんだ……。そしたら三日月由奈、って！」

「……。公園……。あ……。そつかあ……。あ……。あ……。漫画、初めて見たんだね……。あれ、結構すごかったんだよ」

「自分で言うのもアレだけどさっ」

「いやいや！ホントにすごいみたいだね！ビックリしたよ！でもその前に手が治ってよかったよ！」

「もう、本当に天使が舞い降りたみたいだよ！」

そして一杯のお茶。

・・・

編集室

「いやぁ・・・三日月先生。今ごろあの男に会ってるのかなぁ？」

「そうじゃないですかね。バック忘れたのをそろそろ気づいても良いですね」

「あとあの男・・・なんで“三日月先生の作品の主人公”の名前を名乗り続けてたんだろうかねえ・・・？」

「やっぱり熱狂的なファンなのだろうね。初めて見たよ。でも顔つきは少しだけ似てたよなっ」

・・・

伊藤たちは話が詰まっではお茶を飲んでいた。
だがその回数は少ない。

会話がなかなか途絶えることもなく、盛り上がり、ただただ話
していたり。

時間の流れを忘れさせるような時間が続いている。

ふと、二人の目が合わさった。

沈黙が流れた後に伊藤が切り出した。

「・・・そういえば・・・この部屋見るからに三日月、結婚して
ないんだ・・・」

「当たり前じゃん。私はあなたを探してたんだから」

「それ、漫画の題名じゃん！」

「・・・まったく・・・鈍感なんだから・・・」

【呪い天使 - 漫画 / 三日月由奈 原案 / 伊藤雄】

完

呪い天使 50 エピローグ 『最後』（後書き）

完結しました。今までありがとうございました。

恋は盲目と言わんばかりに中学三年生の時から書いていきました。

一番楽しめてしまったのは作者のようです・・・。

この話を楽しんでいたただけでしょうか？楽しんでくれたのなら至上の喜びであります。

このお話で伝えたかったことは、いじめも仕返しもしてはいけないうること。

実際、この物語ほどいじめをした人に仕打ちがやってきませんが、僕はいじめをするような人はいつか神から仕打ちをうけると信じています。

何故僕はこの物語を書くことになったのか・・・少し話します。

「いじめをなくそう」がコンセプトであったこの小説は、ある僕の友達に見せたい、という気持ちから生まれてできたものです。

その友人は何か気に入らないことがあるとすぐに人のものを隠す人でした。

さらにアドレスもネットに広げ、靴を隠せば教科書ノートも隠していました。

靴に画鋏なんて日常的。そんな友達は周囲の人からあまりよく思われていませんでした。

だからこの小説を書くこうと思いつきました。

その人がそういうことを一生しませんように。

・・・僕のそんな気持ちが届きますように・・・。

御観覧ありがとうございました。

今後、何か小説を書くことになったらよろしく願います。

今まで本当にありがとうございました。

評価感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2874c/>

呪い天使

2010年10月8日11時46分発行